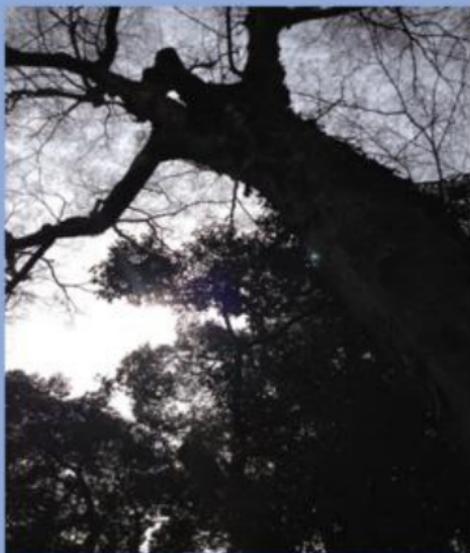




Li-tweet



2014/summer/No.8



特集 かける、少年少女

日居月詠 小野寺那仁 彩
Pさん ろ 深街ゆか 常磐誠
蜜江田初朗 6 安部孝作

たとえば迷子になって闇雲に走り散らした揚句、いっそのまま果てまで向かってしまった方がつまらない果てが待っている人生を送るよりもいいのではないかと振り切りかけた矢先に、見覚えのない川瀬に行き着いてしまって、左右を見渡しても橋がないから行き場がなくて坐りこんでしまった少年。

普段兄が占有してゐる自転車を羨ましがって、ある日こっそりと鍵を奪い自らの所有にし、あちこちを走り回った末に兄にも出来なかつた芸当をやつてのければこれは自分こそ相応しい代物だと証明出来るのではないかと、坂道をブレーキも利かさず全速力で駆けて転倒してしまい頭から血を流す少年。

放課後の夕暮れが差し込む教室に居残つて、課題があるわけでもなし、とはいえ家に帰るのも物憂い、ただただ黄金色に輝く時間の中に身を浸して、この瞬間を知っているのは自分だけだと感じることでおしるこの瞬間を永遠には出来ないかと模索する少女の黄昏た姿を、ドアから盗み見ている少女。

目次

『Li+tweet』(2014 夏号)

・特集「かける、少年少女」

小説「サマザマナラブ」：日居月諸	7
小説「ガラスの街」：蜜江田初朗	9 1
詩「初恋」：る	9 9
訳詩「引き離された愛」：安部孝作	1 0 1
小説「ある天気予報士の手紙」：常磐誠	1 1 5
詩「キノシタとわたし」：深街ゆか	1 8 4
小説「The new day」：崎本智(6)	1 8 6
エッセイ「子供の頃には」：Pさん	2 0 4

・自由投稿

詩「ディスタンスのミズ」他二篇：蜜江田初朗

2 1 5

詩「詩3篇」：る

2 2 0

小説「ビター&スイート」彩

2 3 0

・連載

小説「書かれなかった寓話」第三回：日居月諸

2 3 5

小説「合同教会の人びと」第三回：小野寺那仁

2 5 6

評論「暴力論」第一回：蜜江田初郎

2 6 8

小説「瞳子」第一回：常磐誠

2 7 8

記録

2 9 5

編集後記

2 9 9

特集

「かける、少年少女」

サマザマナラフ

日居月諸

五月のよく晴れた日に、僕と薫は知り合いに招かれて山の麓にある小さな町を歩いていた。都心から電車で三十分ほどを田んぼや川が見える抜けの良い景色に囲まれながら走り、それから峻しい山肌を望む駅に降りてまた二十分ほど歩くと、黒い瓦屋根を葺いた大きな屋敷が見えてくる。日差しが当たって萌黄に染まった山を背に居を構えている姿を、薫は歩みを止めてじっくりと眺めていた。青いジャケットにレースの付いた白いトップスが太陽の光のもとで混ざり合って、まるで青空に融けていくような印象を醸し出していた。

「本当に良いところだね、ここは」

彼女は駅に着いてからあちこちにアンテナを張り巡らしていた。耳をつんぎくような雉の鳴き声、足元に寄ってくる野良猫、無邪気に駆けながら通り過ぎる子どもたち、普通なら逐一感想を述べたくなるだろうこの小さな町を構成する物たちを、薫は目を見開かせつつも黙って受け止め続けていた。そしてようやく、それらを総括するように薫はシンプルに言い放った。その中には、きっとこの家に住む家族も含まれている

だらう。

家主である野田さんは僕の会社の取引先に勤める医者で、養子の恵治は薫にとって画家の師匠に当たる。野田さんの奥さんが子供を授かるのに不向きな体質ゆえに、二人は養子縁組という形で四人の子どもを育ててきた。

四人はいずれも親を失っている。長男の恵治は十歳の時に火事で両親を亡くし、親戚である野田さんの元に身を寄せた。次男は生後間もなく、野田さんが勤める病院の玄関に置き捨てられた。長女は望まぬ妊娠のために育児が出来ない母親に代わって、二人がその身を引き受けた。三男は津波で血縁のほとんどを流された。

長女の響子が十四歳の誕生日を迎える時、初めて僕たちはこの家に招かれた。野田さんの家が養子で成り立っているのは町の人なら誰でも知っており、子ども誕生パーティーは知り合いを呼んで賑やかに執り行われることとなっている。中学校の同級生たちが席を埋める中、倍近く年の離れているはずの薫が一番ハシャいでいたのは良く思い出せることだ。

「今日はハシャグにしてもほどほどにしるよ、今度は電車で寝ても起きないからな」
「わかってるって」

とは言うものの声の調子は上ずっていて、手に携えた紙袋も大きく揺れた。中にはプレゼントが入っている。今日は三男の幸太の四歳の誕生日だ。まだ幼稚園に入った

ばかりの幸太に呼べる友達は少ないので、代わりに僕たちが席を埋めることとなった。「いらっしゃい、疲れてない？ やっぱり迎えに行けばよかった？」

玄関を開けると奥さんが迎えてくれ、その後ろにいる響子も二つに結った髪を軽く揺らして会釈してくれた。いえいえ、と心配がいらぬことを示すのも程々に十五畳ほどの居間に通されると、次男の哲治が本を読みながら紺のポロシャツと黒の七分丈パンツ姿で坐っていて、

「三人とも山に行っちゃったよ。二人のために山菜を取るんだ、って」

と残りの家族がここにいない事を教えてくれた。

「追いかけてよ、私、山に行きたい！」

下ろしかけた腰をすぐさま上げて、薫は早くも玄関へ向かおうとしていた。まだ挨拶もまともにやっていないのに席を立つわけにはいかず、

「本の話しようよ、桜井さん」

と哲治が言ってくれたのもあって、結局薫だけが山に行くことになった。玄関先で大声で、行ってきます、と言うだけ言って出て行った彼女の代わりに謝ったところ、奥さんは、こちらだつて主人も恵治もないから、と許してくれて、準備が残っているからと台所へ向かった。

「テツ兄の話なんて全然面白くないじゃん、薫さんについていけばよかったのに」

母親と入れ替わる形で麦茶を持ってきてくれた響子は、グラスを置くと去り際にとげのある言葉を残していった。そりゃ馬鹿には面白くないに決まってるだろ、という兄の声は聞こえていたのかどうか、妹は何も答えずに足音だけを響かせていく。

「これありがとうね、面白かったよ」

と言って哲治はテーブルの下から『硝子戸の中』の文庫本を差し出してきた。ひと月ほど前に、高校の授業で漱石をやったから他のものも読みたい、と言うので譲るつもりで渡してやったものだ。古本屋に行けば簡単に買えるから、と受け取るのを断るうとしたが、どうやらすでに向こうも自分の本棚に入れるための本を買っていたらしい。それを引っ張り出してきてあちこちに付せられた傍線やら折り目やらを元に話を始めようとしてくるはものの、こちらとしては大学時代に読んだ本だから筋がさっぱり思い出せなかった。

「じゃあちようどいいね、今度来る時は読んでおいてよ」

元はと言えばこちらが薦めたというのに、今となっては向こうが自信満々に本を差し出してくる様はあべこべにも程があるな、と思いつつ鞆にしまいこんで、新しく用意してきた『坑夫』を、申し訳なさを表すように丁寧に取りだした。

「漱石ってさ、一回勘当されてるんだよな」

本を受け取ったかと思うと、哲治は不意に小さく深刻そうな声色で言い出した。裏

表紙のあらすじを見つめつつも、心では別のことを考えている様子だ。

勘当されたかどうかは微妙なところがある。漱石は生まれて間もなく里子に出され、露店でザルに入れられている姿を哀れに思った姉によって拾われ、実家に戻った。ところが、今度は余所の養子になった。そして、この養父が離婚したことでまた実家に戻ってきた。都合、親が四回変わっているが、本人が不徳を犯したわけでもないのだから、勘当という言葉は間違っているだろう。とはいえ、待遇としては確かに勘当に近い。

ただそれとは別に、哲治が勘当という言葉の意味をしっかりと捉えて使っていたかどうかは、注意すべきことだと思われた。

「実の親から愛情を受けなかったのは確かみたいだけどね」

「じゃあ養子のままでよかったじゃん」

と言っても養家との仲も悪かった。特に養父は籍を戻す戻さないで実家と争いになり、あまつさえ養子でなくなっただけから漱石をゆすって金をせびる有様だったそう。

「……最悪な奴じゃないか」

昔は子どもは大事にされなかったから、と言いかけて哲治の境遇に思いが至った。もしかしたら、漱石に対してシンパシーを感じているのかもしれない。思い入れを抱く事自体に問題はないだろうけど、自分の境遇に引きつけて作家に接することが良い

のかどうか、判断がつきかねて返答が遅れてしまった。しかし、哲治は一人で考え込んでいたので、ある程度言葉が遅れても間に合わせる事ができた。

「最悪な奴だよ。実際、漱石は自分の小説にそいつを出して悪役にしているくらいだし」

「それって、いいの？」

「昔は何でも出来たんだよ」

曖昧な答えに対して哲治は拍子抜けしたような目を向けてきた。頬は苦笑いでひきつっており、すげえな、漱石って、という感嘆を残してひとまず探求は諦めたようだ。

気付くと台所の方から足音が聞こえてきて、

「何のお話？」

奥さんが顔を見せたので、漱石の話を少々、と簡単な事実だけを答えると、哲治もうなずくだけで細かい説明はしなかった。

「そうなの？ 昔は小説もよく読んでいたんだけど、今じゃすっかり忘れているものですから、哲治の話には時々ついていけなくなるんですよ。桜井さんがお相手をしてくれて助かります」

「僕もたいして変わりませんよ。結局わからないままに読み進めていたんだと気付かされる始末です」

「若い時は何でも吸収出来ますからね……ああ、桜井さんもまだお若い方でしたね」

と言って奥さんは今のは無しにしてくれ、と言うように笑った。

「でも桜井さんはトリビアとかいっぱい知ってるじゃん」

「余計なことはよく覚えてるってだけだよ」

余計なことでも面白いからいいんだって、と矢鱈にフォローしてくる哲治に気後れして思わず奥さんの方を見てしまったが、こちらも微笑んだきりで視線を固めることは出来ず、仕方なしに入口に目を向けると、響子が醒めた目で居間に入ってきた。

「テツ兄は余計なことしか知ってないし、面白くもないもんね」

目つきを陰しくした兄に対して、臆する様子も見せずにベージュのスカートを整えながら畳に正坐する。背筋を正したためにやや濃いピンクのカーディガンがすこしきつく映った。

「僕だって面白い話は出来ないよ」

謙遜するわけでもなく、素朴な実感として話したつもりだったが、響子はそう、と言っただけで取り合っているのかどうか、手元のグラスに口を付け始めるだけだった。

「薫さんとはどうなの？ 上手くやってる？」

何の話だか、とお返しをするようにおざなりな言い方をしたところ、だってカノジヨなのについていけないっておかしくない、と追及してきた。茶化す調子でもないの
で響子の方へまともに目を向けると、きつい視線とかちあってしまった。

「薫さんとはいつもいるから、今更なんだろ」と哲治が助け舟を出してくれたが、
「だからってテツ兄の相手って、ねえ」

と皮肉ぶった口調で返してくる。奥さんの方をうかがうと、動揺しているわけでもなく、しかし微笑みは無くして斜向かいに坐る二人を見つめていた。

「まあ、俺は桜井さんに比べたら頭は良くないけどさ、でも別に不快にさせることなんか何もやってないぜ」

「そういう問題じゃないんだよ。薫さんを放つといてテツ兄の相手するのがダメなんじゃないのって話」

「だからそれは、たまには俺と喋りたい時もあるだろう、って事で」

「で、喋ってることが理屈っぽい変な話？　それが役に立つの？」

「そりゃ、お前にはわかんねえだろ」

「わかんないって言うばっかりだよ、説明できないだけなんじゃないの、結局」

言葉はともかく、口調は二人とも押し殺したような所がある。一通り口論をした挙句、お互いの意見が合わない事を悟ってこれ以上疲労したくないといった調子があった。意見自体が噛み合っていないし、単純に自分の言い分だけをぶつけて済ませたいというところがうかがえる。

「ま、いいや。桜井さん、今度来る時まで読んでおくよ」

立ち上がると、扇子で仰ぐように文庫本の表紙を顔のあたりでかざしてみせた。入口を出て少しすると、階段を上る音が聞こえてくる。しばらくは戻ってこないだろう。それを察したのか、響子の口調はきつさを増していった。

「私、やっぱり最近のテツ兄、嫌い」

ぶつけどころが遠くに行つたのに比例して、声の通りは良くなっている。最近といつても一年近くにはなるだろう、と指摘しかけたものの、茶化すつもりかと咎められそうだからやめにした。第一、今日初めて喧嘩の現場に立ち会つた僕からしてみれば一年というのは長く感じられるものだけれど、十五年ほど同じ屋根の下で暮らしてきた身からすれば、一年くらいは最近と括つてしまえるのかもしれない。

「いつもこんな調子なんだ」

「うん。ていうか昨日も喧嘩したばかりだから、ちょっと引きずってる」

「このところは、まあまあ穏やかだったのだけれど」

気付くと奥さんは少し微笑みを取り戻していた。というより、さっきだって本当は微笑みたいところだったが場に似つかわしくないから留めておいたという様子だ。

「ますます理屈っぽくなってるってこと？」

「別に理屈っぽくなるのはいいんだけど、やたらとこつちのことを否定してくるようになった。たとえば昨日だって、夜遅くまで起きてたら桜井さんたちとまともな話で

きないでしょ、って言っただけなのに、どうせお前には分からないから関係ないだろ、とか言い出すし。私は単にテツ兄のために言っただけなのに……お父さんやケイ兄だったらちゃんと言い返せるけど、私じゃいつも喧嘩になっちゃう。それに、お父さんとケイ兄は家にほとんどいないし、お母さんは喧嘩するタイプじゃないから、ぶつかるのは結局私だけ」

奥さんの微笑みを通して響子の様子を見てみると、そのきつい口調も単純に兄を嫌っているという様子でもなく、それと付随して兄を嫌うようになった自分のことを責めているのではないか、と思えてきた。

「昔は優しかったものね、お兄ちゃん。周りの子どもは何かあるとこの家を集って、お兄ちゃんを取り仕切って遊びやら何やらを計画してた。お山の大将みたいに上から命令するんじゃないなくて、公園で遊びたい、とか、山で遊びたい、とか、そういうあれこれの意見を全部聞いてから、公園で遊ぶのが一番良い、ってまとめて、次は山に行く、っていう約束も決めてた。響子はそういうお兄ちゃんに一番助けられたんじゃない？」

奥さんが問いかけると、響子は少し目を背けた。

「響子が家で一人になっちゃうから、響子も加わられるような遊びを考えられないかって言いながら、皆で新しい遊びを考えてた。あの遊び、しばらく流行ったわよね。鬼

を一人決めて、その子を守る側と奪い取る側に分かれる遊び」

「それでもない……って言いきれぬわけでもない、かも」

煮え切らない態度を取るところを見ると、見立ては間違っていないようだった。

「その点、今は本を読んでいろんな考えを取り入れてる時期なんでしょうね。それが普段の生活で使う思考回路と大分違っているから、一本に集中するために響子のごことは邪慳にしている」

「そうじゃないかしら。でも、響子としては一人にしてほしくないんでしょう？」

別にそんなわけじゃない、と否定はするものの、語調が弱いので反抗までには行き着いていない。

「変な知恵を教える身としては、一人立ちしたところで思いやりも忘れちゃいけない、って教えてやらないといけないんですかね」

「ていうか、なんでテツ兄の相手なんかするの？ 薫さんはカノジョでしょ？ 一人きりにしていいの？」

普通はフォローが入るべきところなのに、きつい口調が再びやってきたので面食らってしまったが、考えてみれば中学生でそんな世渡り上手な口の利き方が出来るはずもない。

「それとこれとは別だろ」

思い通り、薫については放ったらかしにしても大丈夫であるかのように素っ気なく答える事が出来た。時にはまともに取りあわないで、相手をいなすことも重要であると教えなければいけない。

「別だけど、でも……」

「言いたい事はわかるけどさ、あいつだって一人きりのほうが楽しそうにしてるタイプの人間だから」

無頓着というわけでもない。僕のいないところでも薫は薫であるし、彼女だって僕がいなければ自分が保てない、なんて思っていないだろう。ありていに言えば束縛めいたものは僕たちの間にはないのであって、現在の放擲を表現するには信頼というのがふさわしい言葉だ。つまり、今この場で薫の話題を出すのはどこまでつきつめても間違っているし、関わるべき話でもないから、僕は引き続き素っ気なく答えた。

こうして肩透かしを食らった形になる響子は、唇を噛んで睨み始めた。とはいえ瞼には力が入りきっておらず、首もそれまでの前にのめった体勢から、後ずさりしたように顎が上がって見えた。

「……もういいよ、だったら私が薫さんについていく」

と言って響子も立ち上がってしまった。行先は兄とは逆の玄関の方だ。あれが哲治との口論の末に取る態度か、と確認しつつ見届けてから、すいませんね、と奥さんに

詫びを入れた。

「いえ、良いんですよ。今の子どもたちは皆頭が良いから、私なんかは、そういうの、と言うばかりでまともに相手をするのが出来ないもので。桜井さんみたいに壁になつてくれる人がいた方が良いでしょう」

そこまで言われると買い被りも甚だしいな、と思えたが、依然として皺を露わにしながら目を細める顔に見つめられていると、そうしたあけすけな態度に対してはお世辞だと捉えることが自體間違っている気がしてくる。

「黙って見てる方が正しい気はしますけどね。本当は子どもの問題は子どもの間だけで解決するべきなんでしょう」

そうかしら、とまた僕のことを持ち上げるような首の傾げ方をしてみせる。

「今まで、甘やかしてばかりでしたから。たぶん響子は誰かにそっぽを向かれるのを極度に嫌うんだと思うんです。でもどうしたらいいかわからないから、相手と同じ態度をとってしまう。私たちは、特に哲治は一番、響子のことを大切にしながら生活してきたから。こう言うのもなんだけれど、徐々に人から突き放されることに慣らしていく経験も、積ませるべきだったのではないかと」と

「甘やかすことにはそういう面もあるだろうけれど、一概に悪いことばかりではないと思いますよ。むしろ外側から見たら、真っ当に育つてますよ、二人とも」

「桜井さんにそう言っていただけだと助かります」

倍近くも年が下回っている人間の、誰にでも言える一般論にも耳を傾けてくれる。おそらく兄妹はこの養母が見せる、自分を小さく見せて相手を立てる態度のおかげでそれなりの良心を保っていられるのだろう。単なる育ての親ではない、恩人とも言うべき人がここまでへりくだって見せるのだから、そうした態度を無下にしてしまつてはこちらのメンツも形無しになってしまうというものだ。

もしくは、喧嘩してバツが悪くなった時、こうして微笑みながら迎えてくれる人がいることで、いつもの自分を穏やかな状態の中で取り戻せるようになるのだろう。そういう役回りが出来るのなら、別に首を傾げるような真似をする必要はない。にもかかわらず、この人は首を傾げてみせる。無自覚にせよ、そこには余裕のようなものが仄見えた。嫌味は全くない、ひたすらにこちらを慮ってくる余裕。自分の持っている価値のある物を、持て余しているからと惜しみなく分け与えてくれる余裕。

「そうすると、薫のことをあれこれ言ってくるのも哲治に対して抱いてる不満の転嫁みたいなものだったのかな」

「そうかもしれません。お気を悪くしたら、ごめんなさいね」

こちらは気にもしていないのに、しっかりと白髪のみじった結った髪を見せながら、頭を下げてくれる。そうした仕草を見せられては、響子の事も頭ごなしに叱つてしま

ったのではないか、という疑念が湧き起こってくるというもので、「ちょっと追いかけてきますね、せっかくの幸太の誕生日なのに、後味が悪くなるのもいけないから」

とわだかまりをなくすために立ちあがると、そう、いってらっしゃい、と単純に見送ってくれる。その様子もまた、余裕があるものだった。

玄関を出ると変わらずに青い空が広がっていて、庭先に植わっている白いツツジに日光が当たったおかげで一瞬だけ眩しく見えた。野田さんと仲の良い向かいの花好きの主人は、自宅の庭のみならず町のあちこちに種を埋めては全てを自分で管理しているのだという。秋には庭先でヒガンバナが赤く並んでいるのが見えた。裏手の方に歩いていくとまた低木が鬱蒼と茂っており、紫の芽を出しているところをみると、おそらくこれからはアジサイが咲くのだろう。

家の裏手の方にも家々が何軒か並んでいるが、それを通り抜けたら後は緑に染まった山と対面するだけになる。国道も通ってはいるがほとんど車が見えることはない。神社や農家の小屋、林業の事務所などが点在しているばかりだ。右手を見れば僕たちが乗ってきた電車が走る線路がちょうど水平になる形で伸びており、山から下ってきた水で出来た川へと続いていく。そこまで視線を伸ばせば何台かの車のエンジン音が

聞こえてくるものの、その他には駅や学校と言った目立つ建物が佇んでいるばかりで、その先は太陽が当たってやや白くかすんでいる山にまた行き当たってしまう。

視界の広さを持って余しつつあちこちを見回しながら歩いていると、ちょうど山道の方から数人の集まりが降りてくるのが見えた。下の方にも声を掛けている女の子がおり、それが響子だとわかれば、上にいるのが薫たちであることは確実だった。

おおい、と言う声がやまびこによって倍加されつつ膨らんで聞こえてきた。山道の方で手を振っている薫からの声だ。つられて、横にいる恵治に肩車された幸太の手が振られる。数キロ離れていても見えるくらいには成長したらしい。といっても、恵治の赤いジャケットと思しき服装が無ければ、なかなか気付きにくいくらいの小ささは残している。最後に野田さんが、ゆっくり、大きく腕を振ってくれた。

「晴れてよかったですね。こんな日にお二人をお迎えできてよかったです」

合流すると野田さんは空を見上げながら、眼鏡越しに目を細めて言った。病院で良く見る白衣とは程遠い、黒いベストにカゴを背負った格好ではあるものの、同じ表情が晴れた空のもどくつきりと表れたことで、一週間に一回ほど顔を合わせている人に相違ないという実感がしつかりと湧いてきた。

「こっちだってこんな景色が広がってる時に招いてくれて、ありがとうございます！」
野田さんが晴れを呼んだかのごとく薫は返答した。

「いえ、別にこちらが用意したわけでもありませんから」

「いやいや、野田さんのおかげみたいなものですって。だって野田さんの笑顔って晴れの日にピッタリなんですから。表情が空気の中に溶け込んで、そのエネルギーが空の方まで届いていくんだと思うんですよ」

論理が飛躍しているが、お世辞を使っているわけでもない。目の前にある野田さんの顔をしっかりと捉えながら言葉を並べているのが証拠で、これが薫にとって当たり前感覚なのだ。それを分かっている、というか近しい感覚で受け止めることのできる師匠の恵治は、うなずきながら聞いていた。頭の上に乗った幸太の体がそれに応じて上下したことで、キャッキョウという喜ぶ声上がる。

「オヤジの笑ってる顔が晴れた景色を作ってるんだよな。景色がオヤジを作ってるわけじゃないんだよ」

その通り、と笑いかけた薫に対して、同様に笑みで返した恵治は、お前にもわかるか、と言って幸太を見やった。パーマの掛かったポリュームのある髪が擦れたことにちょっと驚いてから、うん、とわかっているはずもないのだから、兄が視線を送ってくれることの方が嬉しいのか、すぐにうなずき返した。

「なるほど、そうですね。ならばそう言うことにしておきましょう」

そうした三人の様子を見ながら、野田さんは受け止めるように言った。

「やっぱりさ、人が風景を作れるようじゃなきゃダメなんだよな。風景が人を作るって思ってたら何にも進歩しないんだよ。与えられるばかりじゃ奴隷みたいなもんだろ」

「けど風景をペットみたいに従わせるってわけでもないんだよね、センセイ」

普段から繰り返しているやり取りを確認するように薫は付け加えた。

「そう。風景と人との間に主従関係はないわけ。歴史を振り返ってみると人が傲慢になったり、風景が牙をむいたり、シーソーみたいに上下する中でそのたびにこれから人間の時代だ、いや自然を尊重しなければいけない、みたいなグダグダの議論があったけれど、結局シンプルな答えに行きつくんだよ。これからは両方が対等な関係を歩まなければならない、ってね」

「つまり協調の関係というわけだね」野田さんがやんわりと口を挟んだ。

「でも完全に協調出来るわけじゃないんだよな。半分くらいは影響を及ぼしあえるけど、もう半分くらいはお互いに無関係なわけだよ」

「自然と人間の関係を過大評価してはいけない！」薫が恵治の口調を真似するように言った。

「なるほど。ありのままというわけだね。人間の印象を送りこみすぎてもいけない、か」

薫と恵治は言わずもがな、野田さんは元々芸術に造詣があるから話を理解することが出来る。幸太は喋るたびに揺れ動く兄の頭のおかげで退屈することがない。すると当然、僕と響子は四人の後ろを並んで歩く格好になる。目の前のやり取りに対して呆れていることを隣の少女に対して示すと、仲間がいたことで安心したような目配せを返してくれた。

「ああいう話、薫さんは普段もやってるの？」

「まあね」

「理解できるの？」

「全然」

「よく付き合ってるね、ケイ兄のほうがお似合いじゃん……なんで二人は付き合
い始めたの？」

と溜息を洩らすように声を掛けられたが、そもそも薫との間には付き合おうという腹積もり自体がなかった。高校の頃からの同級生だが、その頃の僕の印象は変な女子というだけで卒業まで変わることが無く、再会したのも偶然駅で鉢合せただけだし、地元に戻ってきたはいいものの何カ月もアルバイトを決めることなく友達の家を渡り歩いて過ごしている薫を見かねて、僕の部屋に誘った。

「好きじゃなかったの？」

「いや。でも、それありきで付き合ってたってわけでもないってこと。順序が逆なんだよ。普通なら好き合っって一緒に暮らすんだらうけど、一緒に暮らしてから段々好きになっっていった」

「何それ。よくわかんない」

でも家族もそういうもんだらう、と言いかけてやめにした。そもそも家族は両親の間に愛があっって、それを軸に子を育て続ける。おまけに響子の場合は事情がねじくられていて、両親の間に愛はなかったし、母親から見捨てられている。

「お前と哲治が嫌い合っっても一緒に居られるようなもんだよ」

「それこそ関係ないじゃん、それに私はともかく、テツ兄はきっと私の事なんて邪魔だと思ってるし……」

そんなことはない、と言ったところで耳は貸さないだらう。おそらく響子は形で示してくれないと自信を持ってない。哲治との喧嘩の原因もそうだらうし、薫との関係についてやたらと口を挟んでくるのもそのせいだらう。

「そのうちわかるよ。同じ気持ちを持ち合いながら暮らすのが理想なんだらうけど、同じ気持ちを持ち合っってなくても一緒にいられることは出来るし、同じ気持ちを持つとうとしすぎるとかえってダメになる、ってことがさ」

「そのうちって、いつ？」

「僕と薰くらしいの歳になったらじゃ、遅い？」

質問に質問で返すのは意地の悪い真似だったかと、言葉に窮している響子を見て悟った。しかし、ちゃんと返答してくれる律義さは備えていて、

「……多分遅い。その頃には、私がテツ兄に追いつけなくなってると思う」

追いつけなくてもいいのに、とは思ったけれど、そこからは堂々巡りになってしまふ。大体、僕は薰と反目し合っていないから暢気な口を利けるが、響子はそうではない。

「二人とも、置いていっちゃうよ」

気付くと家々が並んでいる通りに入りこんでいて、四人は五十メートルほど先を歩いており、薰が振り返って声を掛けてきた。それにつられて他の三人がこちらを向き、薰が駆け寄ってくるのを立ち止まって見やっていた。

「何の話してたの？」

「薰には縁のない話だよ」

「あ、馬鹿にしてる」

睨みを利かそうとしてゐるらしいが、仰向いた拍子にショートカットの前髪がなびいて額が露わになり、大きめの瞳が強調されるとおしろ上目遣いをして媚びているようにしか見えなかった。そんな表情からして、感情のもつれというものと無縁な人間

であることは明らかである。

「別に馬鹿にしてないって。良い意味で言ってるんだよ」

「そもそも二人が話してたことがわからないのに良い意味もないよ」

「縁のない話だからわからないのは当然だって」

そう言うと、なぜか響子が隣で吹き出した。

「ちょっと、響子ちゃんも馬鹿にするの？」

違ふよ、とは言うもののタイミングの悪さは補いきれない。矛先を変えた薫を宥めつつ、響子は咎めるような目つきをこちらに向けてきた。そこで、薫をあしらう口調が哲治と似ていたのだと気付いた。パロディめいたものを演じているのだと勘違いしたらしい。こうなると話はややこしくなり、いちいち説明するのも面倒になるから、自ずと二人で真相を隠すように示し合わせている格好になる。

「あんまり薫をいじめんなよ、ただでさえガキなのにムキになって一層ガキみたいになって手がつけられなくなるんだからな」

「ガキじゃないよ、れっきとした大人だよ！」

諫めるつもりがあるのだからわからない恵治のせいで一層事態はややこしくなる。

「薫ちゃん、僕もガキだよ、同じだね」幸太さえも言葉の意味をつかめないままに声を発すると、

「薫さんは大人でありながら子どものような活発さがあるところが魅力なんですよ。一概にご自身を否定するのもいけません」

野田さんが宥めるような表情を浮かべながら、しかし明らかにからかうつもりもりの言葉を掛ける。怒りをぶつけるべき方向があちこちにばらけたことで処理しきれなくなったのか、いいよ、もう、と薫はこれ見よがしな溜息をついて黙り込み、集団から離れて一人で先を行ってしまった。

「そこがガキなんだっての」

数歩先まで聞こえないように小声で恵治が言うと、苦笑が広がった。が、その中で唯一、響子だけが薫の背中をぼんやりとした表情で眺めやっていた。どうした、と声を掛けると、我に返るために一呼吸置いてからこちらを向いて、

「私ってああいう風な態度取ってたんだな、って思って……」

「反省したってわけか」

「うん……でもさ、話をしようとしただけなのに、お前にはわからない、って言い方はやっぱり酷いよね」

そうだな、という返事は我ながら気持ちが悪くもっていかない軽い口調になってしまい、響子に溜息をつかせた。

薫が角を曲がって、一旦姿を消す。しかし、こちらも後を追って角を曲がると、背

中がちゃんと捉えられる距離にいる。視線を伸ばした先には瓦葺の屋敷が見えてきた。

玄関をまたぐと居間の方から、おかえりなさい、という奥さんの声が聞こえた。それから先に帰っていた薫の聲が、聞えよがしに屋敷に響きわたる始める。帰り道で起こったことを逐一話しているらしい。哲治はまだ二階の部屋にこもったきりであるのだろうか、二人きりで向かい合って話しているようだ。

野田さんと響子は居間に向かい、僕は残りの二人の後に従って恵治の部屋に向かった。玄関から左に曲がり、縁側から差し込む光を浴びながら、居間を過ぎた頃に、「幸太、新しい絵、兄ちゃんに見せてくれないか？」

聞えよがしの聲がよく反響する。一瞬だけ薫の話が止まった。

「うん、いいよ」

と言うと幸太は小走りに駆けだし、八畳ほどの物置を挟んだ先にある襖を開けた。恵治は都心にあるアトリエを拠点としているため、普段この部屋は幸太の遊び場となっていてという。初めの頃はおもちゃが散乱していたが、使い古した画材が棚にあるのを見つけると、それを使って絵を描き始めたのだそうだ。

「おっ、良く描けてるじゃないか」

「良くかけてるー」

もっとも、幸太が描いているのはヒーローだとか家族だとかの絵ではない。恵治が学生時代に買った画集、とくに抽象画の模写をやっているのだ。もちろん、模写をするだけのテクニクが身につけているはずもないから、完成図を見せられたところで、それこそ子どもの落書きと大差はない。実際に今回はアンリ・マティスというフランスの画家の『赤いスタジオ』を横目に描いたというものの、元の絵は複数の色を一見猥雑に、それでいながらしつかりと境目をつけながら描いているのに対して、幼い筆が仕上げたのは無数の色が境目なしに入り混じっている、アクションペインティングに近いような代物だった。

「なに言ってるんだよ、ちゃんと元の絵どおりに描いてるっての」それでも恵治のお眼鏡には適うものらしい。「境目をしつかりつけとくべきだなんて傲慢だね。本当はこんな風に色と色は混ざり合うべきなんだよ。マティスはそれを実現した画家なんだから、むしろこっちの方が正しい模写なわけ」

薫に比べれば理論に基づいているから意見自体は理解出来なくもないのだが、もう一度見てみる、と言われて差し出された、赤やら緑やらオレンジやらが混ざり合って名状しがたい色をした（元の絵から察すれば）壺と思しきものや、椅子と額縁がお互いを浸食し合って出来上がってしまった奇妙なオブジェを見ていると、納得は出来ない。

「これだから芸術のセンスがないやつは」

両手を肩の上で仰向かせ、恵治は呆れのポーズを取る。幸太もそれを真似するものの、むしろバンザイをしているようにしか見えなかった。

「単純に原典を尊重するだけじゃ一向に進歩がないんだっての。浸食なんだよ、浸食。原典が自分の中に食い込んでくる感触があって、それに対する抵抗を描いてこそなんだ、芸術ってのは。猿真似するだけじゃダメなんだ」

力説する兄の横で一向にバンザイをやめない弟の様子を見てみると、たとえ正当性のある意見だろうと説得力がなければ意味を為さないのだとわかる。

「芸術は鬭争ってことか」以前恵治から聞いた話をそのままに繰り返すと、

「然り。何もかもが鬭争だ。線と線、色と色、画家と作品、作品と鑑賞者、それぞれが鬭い合って芸術は成り立つ。そこには区分けなんてない」

「区分けしたがる奴は権力者の手先だ！」

話される言葉に似つかわしくない幼い声が聞こえてきたかと思うと、いつの間にか部屋に入ってきていた薫が幸太を持ちあげて、彼の小さな右腕を振り上げさせていた。

「だよね、幸太？」

笑いかけてくる幼い笑みに対して、幼い笑みが返される。当然幸太には、向こうが笑っているのだからこちらにも笑いで返すくらいの考えしかないのだろう。

「わかる奴にはわかるんだよ」

恵治はこちらを見ながら誇らしげに言ってくる。そんな選民思想めいた言葉こそ区分けというやつなのではないかと思えたが、馬鹿らしくて応答する気さえ出てこなかった。

「でも、この緑はもうちよっと浮き出た方がいいよね。これじゃ他の色に埋まってるからかえって目立っちゃうよ」

「ああ、そうだな。いっそ緑じゃなくて青を使った方がいいかもしれん」

机に乗った幸太の絵をまじまじと見つめる薫に、先程までのふてくされた様子はない。居間の方で上手くなだめすかされたのもあるだろうが、なにより幸太の絵によって帰り道のことを忘れたのだろう。

「よし、お手本を見せてあげよう」

薫は幸太を膝に乗せて机に坐ったかと思うと画用紙を取りだし、マティスの絵の載ったページを片手でおさえながら、あちこちに散らばっていた絵具をパレットに絞りだし始めた。大方、言っている事とは逆に自己流の絵が出来るのだろう。

「とんだ英才教育だな」と僕が言うと、

「いいんじゃないねえの。習うより慣れる、ってやつさ」

と恵治が返してくる。薫に教える才能がないことは共通認識である。

「それよりさ、幸太にかまけるのもいいけど、上の兄妹の相手もしてやれよ」

「なにが？」

とぼけた顔を向けてきた。しかし、この兄だって弟たちが反目していることは踏まえているのだ。

「私はテツくんも響子ちゃんも好きだよ？」

「だってさ」

薫には幸太のお守りを任せることにして、僕たちは部屋から出て縁側へと向かい、庭へと降りた。ちょうど南に面した視界からは傾き始めた太陽が見え、庭に植わった常緑樹の影がその背丈の半分ほどに長く伸びている。

「あいつらの喧嘩なんて関わり合ってたって面白くないって言っただろ」

赤いカットソーのジャケットが光を反射して、緑に囲まれた中で一層大柄な体を目立たせている。恵治がそう言っただけのけるのには、人間同士のいざこざが「面白くない」からという理由がある。思春期ゆえの難しさだからじきに解消される、と高をくくっているわけではない。単純に自分にとって邪魔な話であるから、視界から取り除いておきたいのである。

「そうは言うけど、この調子だと哲治が変な方向に行きかねないぞ。ブレーキ役が必要なんだよ」

「お前がやればいいだろ。実際あれこれ教えてるんだから」

言い分としては間違っていないが、血がながっていいとはいえず、弟を余所の人に任せて平然としていられるというのは呆れかえるべきことに違いないだろう。

「ありゃあな、余計なことを考えすぎなんだよ。昔から他人を気にして自分のことみたいに悩んでやがる。今だって小説を読んであれこれ悩んでるんだろ？」

そう言えるからには、弟を嫌っているわけではない。

「他人の事なんて考えたってしょうがないんだよ。考えるのは自分にとって有益である時だけでいい。ひたすら自己肯定あるのみだね」

ただ、面倒をみるという観念が著しく欠けているのだ。人は勝手に育って勝手に生きていく、というのを地で行く男だから、周りが茶々を入れるのは本人にとって妨げにしかならない、と知っているのだろう。

比較的面倒をよく見ている薫に対して、基本線は変わらない。本人の意思を尊重する、と言えば聞こえはいいが、彼女のように元々教育を受ける必要のない悩みの薄い人間は、ただ褒めるだけで勝手に伸びていく。面倒を感じさせないから面倒をみる、というくらいに考えしか持っていないのだ。

「小説を読んでこの作者って勘当されたんだよな、とか言い出すんだよ。今はこの家に不満があるわけじゃないだろうけど、段々感化されすぎて変なこと考え出すんじゃない」

ないかってさ」

「変なことって？」

「俺はなんで昔の親に捨てられたのか、とか思い始める」

「阿呆らしいね。今ある現実を見ないで過去ばかりに目を向ける。オヤジやオフクロに対する冒涇だよ」

今の家に大事に扱われているのは事実だけど、一度親から見離されて病院の玄関に置き捨てられたことも事実である。妄想ならともかく、事実は揺るがしうがないから双方のギャップに苦しむ。おそらく、哲治はこうした問題に突き当たるかもしれない。恵治の言葉はそれに対する確かな解答だ。けれど、そんなに単純に割り切っていないのだろうか。

「大体だな、過去を重要視するのは権力者に屈服することと変わりないんだよ。基本的に人間は動物と一緒に過去の事は一切考えなかった。けれどそれじゃ権力者にとつて都合が悪かったから、過去って概念が導入されたんだ」

「確かにニーチェはそんなこと言ってたけどさ」というより、いつも恵治の口からニーチェを引きながら出てくる言葉だ。

「過去に対して負い目を持つってのは過去に対して負債を持つことであって、負債を担がされてるんだよ。それをすんなりと受け入れて腰を曲げるのは奴隷の態度なわけ。

痛みに対して従順になる。飼い犬と何にも変わりやしない」

「犬は臆で過去っていう觀念が出来上がるもん」この種の意見に対して茶々を入れると、機嫌が悪くなるから話を戻すわけにはいかない。

「文字っていうツールが使われ続けるにつれて知的階級の専有物になったのもさもありなん、ってとこだな。権力者は過去を書きとめるツールの効力を見抜いてたんだよ。その上手さに感服するのは結構。だが、感服するあまり従属しちゃうならない」

「要するに、哲治が陥っているのも文字への従属、権力者に対する従属ってことか」そういうこと、と話のオチがついたことに満足しながら言いきった。短絡にも程がある。とはいえ、この芸術家肌の男がこういう性格になるにもそれなりの経緯はあったらしい。

そもそも恵治の専門は具象画だ。それも極めてリアリティのある、線の一本一本にまでこだわった、あたかもそこに物が実在しているかのような感覚を呼び覚ます絵を描くのである。人間ならば人間、動物ならば動物、自然ならば自然、それぞれが確かな輪郭を持って目の前に居る。それは写真のようなものではない。写真は目の前に居るような感覚は呼び覚まさない。写像と鑑賞者の間には境目があって、こちらがリアルでありあちらがフィクションであるとわきまえられる。しかし、恵治の絵はそうした境目を崩すのだ。

早くから恵治は境目を崩す技法を体得していた。彼曰く、人がそこに存在する原動力を探り当てさえすればそうした絵は簡単に描けるのだそうだ。もちろん、それを実際に形にするには相当な労力があるのだが、労力を使いさえすれば描けるものは簡単に他ならない、と言つてのける。

そんな恵治にも躓くことはあつたらしい。現実存在する物を描き続ける中で、万物を存在せしめる何か、つまり普遍的な原動力そのものを把握できた「と思ひ込んでいた」時期があつた。段々、彼は現実を描くことから離れ、非現実的なものをあたかも実際にあるかのように描く方向へシフトしていく。たとえば、触角から関節に至るまで無数の靴で構成されたムカデ、骨だけで出来たビルなど、現実の素材をそのままに活かしているがために本当に実在するかのような錯覚をもたらす絵が何枚も出来上がった。が、ある時途端にそれをやめて、また現実の方へと戻っていつてしまう。

決して歓迎されなかつたからではない。むしろ現実を素材にしていたころよりもパソコンサーからは個展の依頼が数多く舞い込み、メディアからは特集を企画されたこともあつた。

プライベートでトラブルがあつたわけでもない。アトリエを兼ねた事務所には薫を始めとした画家の見習いが多く出入りし、外に出れば画家仲間のみならず他分野のエキスパートとも幅広い交友を持っているが、本人の言葉通り自分に利益をもたらす人間

としか交流をもたないため、そこではトラブルというものが起こらないように出来ている。

把握しかけていた普遍的な原動力そのものが彼の手からすり抜けたからでもない。仮にそうだとすれば、依然として現実を（彼の言葉で言えば）抉り取るように描いている事の説明がつかない。何より、闘争だの革命だのといった血なまぐさいフレーズを普段から使い続けている人間が、自分の手から離れていくものに対して指をくわえて見届けるような態度を取るだろうか？

恵治はただ一言だけで理由を説明している。普遍的な原動力なんてありはしなかった、と。物を存在せしめている原動力は、一個体につき一つであって共通のものがあられるわけではない。その辺を見落としていたからやめた、というのが弟子の薫を通じて知った話だ。

「お前も文字に支配されているタイプの人間だよな。読書の効果は否定しない。しないが、そればかりになっただらおしまいだね。文字は視野を狭窄にするんだよ。人間の視界はもっと広いんだ。それを台無しにするなかれ、ってところさ」

結局、弟に対する態度も芸術に対する態度となら変わりないのだろう。一個人の悩みは一個人自身が解決するしか方法はない。その点、僕が響子に対して自ずと悩みは解決される、と言っていたのに等しい。

それにしたって、芸術的な態度は現実への注視によって成り立っているのだから、弟に対しても目を掛けてしかるべきだとは思うのだが。

「大体お前はどんなんだよ。他人を気に掛けてられるほどの余裕があるのか？」

「さあ？」

「それだよ、そういうすっとぼけた態度こそブルジョワ的余裕だね」

あらかじめ用意していたセリフのようにスラスラと言ってみせながら、右頬だけを釣り上げつつ、皮肉ぶった笑みを向けてくる。

「お前こそテツの心配をしてるくらいだったら薫の面倒を見るよ。テツの悩みなんて一過性だが、あいつは二十も半ばになってもあの通りだ」

と、顎を使い部屋の方を示してみせる。た

「こっちに付き合ってるほうがずっと面白いし、いつまで経っても飽きないさ」

またも口の端だけで笑って見せる辺り、やはり皮肉を使っているつもりらしい。

「それが分かってるからこそ付き合ってるつもりなんだけどな」半ば冗談に言ったところ、

「どうだか」と視線を家のほうへずらしながらあざけるように返された。「ま、お前が分かってるって言うんならそれでいいさ」

恵治は縁側への石段を登り始めた。煮え切らない切り上げ方ではあったけれど、こ

れ以上話していても仕方のない事だ。太陽を背にしたことで残照が目を覆ったので、僕たちは眉の力が抜けてから襖を開けると、そこにはすぐさま顔を向けてくる薫が待っていた。

「あっ、ちようどよかった。今出来たところだよ」

薫の膝の上に立ち、机に前のめりになって肘を乗せている幸太は彼女の手元に置かれた画用紙をまじまじと見つめていた。遠目からは赤を基調とした、元の絵通りの出来栄であるかに思われた。しかし、紙の両端を持って、じゃん、とこちらに差し出されてみると、赤以外の色は全く合っておらず、壺などのオブジェの配列もバラバラ、到底、元の絵とは似ても似つかない。それこそ、臙脂に近い赤が印象的に使われていること以外は。

「なるほどね、自分でフレームを作ったのか」

それでも恵治にはアレンジとして受け入れられるらしく、指で紙面をなぞりながら絵を見つめている。確かに、絵の縁には黒と白で塗られた額縁を模したと思しき装飾が施されている。

「ずっとこの絵にフレームが描かれてないのが不思議だったんだよね。スタジオに飾られた絵にはフレームが嵌められてるし、フレームそのものだってあるのに、なんでこの絵自体にはフレームがないんだろう？」

「いや、そこまでやったら狙い過ぎだろ。俺なら買わないね。あくまで遊びの範疇で許される話さ」

どうやらこの二人にとって色が違っていたり、オブジェの配列が違っていているようなことは瑣末な問題らしい。もしかしたら、恵治の手元で広げられた画用紙に向かって、顎を釣りあげながら精いっぱい視線を送ろうとする幸太にとっても、関心は他の所にあるのかもしれない。

「お前は どう思うよ？」

先程芸術的なセンスがないと指弾したくせに、恵治は明らかに僕をからかうために、赤さだけが原典に忠実な代物を渡してくる。瑣末な問題に口出しをするのは素人ゆえの間違いなのではないかと思われ、かといって勝手に付せられた額縁についても額全体に及ぼす影響など図りようがない。単純に、唯一の共通項である赤にしか目が行かなかった。

「原典通りの印象的な赤なんじゃないか」

「おっ、そう言ってくれると嬉しいな」

苦し紛れの感想に対して笑みを向けられるとは思っていなかったたので、面食らってしまった。

「でもマティスの赤って本当に難しいんだよね。画面に配列された色彩の全部が赤に

向かって寄り添ってるんだ。でも赤があれこれ命令してるってわけでもなくてさ、皆が赤を助けようとしてるんだよね。きつと他の色は赤がなくても存在していけるんだけど、赤だけそうじゃなくて、画面が全部赤だったらこんなものは使えないって二度とパレットでは作られないと思う。他の色はそれじゃまずいし、そんなことを許してたらその内自分たちも使われないようになるよと察知したから、赤を助けようとしたわけ。脇役に収まっても、それくらいで自分たちの魅力がなくなるわけじゃないってわかってたから。そう言う事をしていればまわりまわって主役になれるとわかってたから。それを理解した時、他の色は本当の意味で主役になれるんだよ。

マティスはそんな色どうしの連帯を感じとってたんだろね。ていうかマティス自身が赤だったんだよ。そういうことを理解しないと、本当の意味での再現なんて出来ない」

あれこれ言葉を尽くしながら話してくれてはいるが、最早ついていける話ではなく、薫が画面に目を落している隙に視線を反らして助けを求めると、横では恵治が苦笑を浮かべながら首を振っていた。何もわかってないじゃないか、といった具合に。

そうした身ぶりに嫌気がさして視線を戻すと、薫の話はまだ続いている。となれば、自然と視線は降りていって、膝の上に坐っている幸太へと移っていくのだが、こちらはこちらで何も言わず、口をすぼめて目を丸くして僕の事を見つめていた。

「ちょっといいかしら？」

部屋の入り口から声が聞こえたかと思うと、奥さんが立っており、おかげで視線の行き所が確保された。

「カステラを出しているんですが、いかが？」

カステラ、と真っ先に反応したのは幸太だった。つられて薫も幼い体を抱き上げて入口へと駆けていく。先程まで熱心に語っていたマティスの模写は机の上に放り出されてしまった。

「ありがとうございます、いただきます！」

礼だけはしっかりと述べて居間へと続く廊下を小走りに渡っていく。恵治は肩をすくめて、奥さんは微笑みながらそうした様子を見ていた。

遅れて居間に入ると薫は響子の横に、幸太は野田さんの膝に坐っていた。やはり、哲治はいない。

「今から声を掛けようと思っただけなんですけれど」

奥さんが天井を見上げた。口元が結ばれていて、眉根がややきつく寄せられている。どうやら、階段を上るからにはそれなりの配慮を用意しておく必要があるらしい。

「ペンキヨウしてるんだらうから、邪魔しなくていいんじゃない？」

響子は相変わらず尖った言葉を使う。特にペンキヨウ、の辺りが強調されて、揶揄

がこもっている。野田さんや奥さんがその様子を苦笑しつつ見ている辺り、いつも使っている揶揄らしい。

「ドツポに嵌るだけの勉強なんてやっても何の意味もねえよ」揶揄を重ねる恵治に對し、

「おいしいのに勿体ないなあ。いまずぐ降りてこないとなくなるよ」

カステラを頬張る薫は、まるで他人が搔っ攫ってしまうような言い方をする。野田さんの方を見たが、小分けにしたカステラを更にちまちまと口に入れる幸太を膝に乗せながら、その世話をしていた。

「僕が行きますよ。ちようど話すこともありますし」

玄関から真っ直ぐ伸びた廊下を渡り、突き当たって分かれ道になっているところを右に曲がると、左手には台所が見え、右手には階段が架けられている。木で出来てはいるが補修がしっかりしているためか、足音だけが小気味よく響いた。改めて耳を傾けてみると、音がよく通る屋敷だ。居間の会話も、内容はともかく声の色分けはちゃんと出来る。

上り終えるとまたも道は分かれていて、右に行った先には響子の部屋が、真っ直ぐに行った先には哲治の部屋がある。窓から見える太陽は庇を掠めた位置に陣取ってお

り、廊下には影が長く降りるようになっていた。

「哲治、カステラだってさ」

襖を軽く叩くと、ああ、入っていいよ、と返事が聞こえた。開けると、この年代の割には整理された部屋の景色が広がった。畳が敷き詰められた左手には本棚があり、以前入った時は漫画が半分ほど、教科書がその半分、残りは活字といったところだった。が、今や半分ほどが文庫本やハードカバーによって占められている。右手には机が置かれ、宿題を終えたのか、それともこれから取りかかるのか、何冊かの教科書とノートが乗せられている。それらが入口から正面に見える窓からの光に照らされて、どこに何があるかという標識をしっかりと表していた。

窓に対して並行に布団が敷いてあって、哲治は寝転がって文庫本を読んでいる。

「サンキュー、ちょっと降りづらかったんだよね」

カステラを受け取ると早速頬張っていく。

「こっちも逃げてきたようなもんだよ」

「何かあったの？」

「他人の事を気にしない人間の相手をするのは大変だなって」

「ああ、ケイ兄か……」

それに薰も加えられるのだけど、当面の賛同を取り付けるには持ち出す必要のない

話だった。

「でも、ケイ兄は才能があるから勝手に人が寄って来るんだよな。結局、才能が無い奴は他人のことを気になげなきや生きていけないんだよ」

「じゃあ僕は才能がないんだな」

そんなことは言っていないって、と哲治は笑いながらカステラを食べていた掌を振った。

「他人を気になげられるならそれでいいじゃん。でも、最悪なのは才能が無いのに他人を気になげない奴」

「たとえば？」

「たとえば」と繰り返して哲治は少し迷った。「子どもを捨てる奴とか」

一度迷ってから言葉が発したおかげか、しっかりとこちらの顔を見つめてくる。

「まあ、子どもを捨てた方にも、事情はあったのかもしれないけれど」

かと思うと、視線を下げてしまった。こちらとしても返答に窮してしまう。哲治の視線は布団の上を泳いで、どうにか漱石に向かって固まったらしい。

「その事情に、興味はあるのか？」

「興味」とまた繰り返す。今度は受け取り損ねた言葉を取り戻すように、慎重な声色でもって繰り返された。「元の親の事は、よくわかんない。でも、俺みたいに産んだ

親が育ての親じゃないって奴には、興味がある」

「それが漱石なのか」

「漱石だけじゃないけどね。こないだ眠れないからスマホでテレビ見てたんだよ。したら、里子が特集されてて、育ての親が本当の親じゃないってことを滅茶苦茶気に病んでる奴だったんだ。里親は良い人そうだったのにさ、きつと捨てた親にも事情があった、だから自分はその人を後悔させないために幸せに生きなきゃいけないって言い続けるの。結局は学校の友達に里子だってカミングアウトして、それがなんだって言われて、別に無理して元の親にこだわって幸せにならなくても良いんだ、って気付くんだけど」

「なんか、まとまってる話だな」

決して哲治の話し方のせいではない。むしろ、テレビの場面を逐一メモし、それをそのまま繰り返し返すように話している。ならば、元からそのドキュメンタリーがまとまっていただけの話なのだ。

「うん、まとまってた。実際、最後にそいつのインタビューでシメたんだけどき、無理して言わされたように見えたんだよ。自分の幸せと親の幸せは関係がない、だったら、自分が幸せだったとしても元の親が不幸なままなのは変わってないんじゃないか、ってことに気付いたみたい、いちいち言葉に詰まってた」

「たとえ幸福だったとしてもそれはそれで引っかかるよな。子どもを捨てて幸福ってなんだよ、って話になるし」

「子どもを捨てたら幸福でいられないっていうのも可哀想じゃん」

「結論が出ないね」

哲治は、いや、と言って少し間を置いた。

「結論なんか出なくても良いんじゃないのかな。結論が出ちゃったら、どっかに不幸な人が出るんだと思うよ」

「随分と上手い事いうな」

「いや、今のは漱石をパクった」

と言って、哲治は手元の文庫本をかざした。確かに『坑夫』にはそんなことが書いてあった。まとまっているのは体くらいのもので、心はいたってバラバラなものであり、それを無理にまとめようとすると矛盾が生じる、だったか。

「でも、漱石はそれなりに真っ当な人生を送れたからそんなこと言えるんだらうな。バラバラになっても、どうせ勝手にまとまるってわかっているから、そんなことが言えるんだよ。実際、『坑夫』の主人公って、家出してるけど元は金持ちだったじゃん。でもって、最悪自殺してもいいと考えてた。自殺すれば、体は残るだろ？ とりあえず自分が自分として死ねたっていう事実が残る。それだけでも十分だし、家を出るま

ではそこそこ幸せに暮らせてたから悔いなんてなかったんだよ。俺が漱石を読んでも、そういうところが俺と同じだから。要するに、余裕があるんだよ。余裕がない人間が聞いたら、親に捨てられた子どもが聞いたら、ふざけるなって言うだろうね。まとまりたくて仕方ないんだよ、本当は。まとまった体に生まれたからにはまとまった人生を送りたいんだよ。結論が欲しいんだって」

そこで哲治は一息ついた。それこそ、結論が出てひとまず安心したとでも言うかのように。それから思い出したように、ああ、と口を開いて、

「親に捨てられた人間に限った話じゃないな、そーいや。生みの親が育ての親だったとしても、余裕がない奴だって、いるもんな。時々、いや、いつも考えなくちゃいけないんだけど、そいつらだって親を変えたくてしょうがない思いをしてる。きっと、俺の事を恨んでるよ、ゲームをリセットするみたいに、親をリセット出来てうらめしい、って。親の方だってそーかもかもしれない。捨てたくて捨てたくてしょうがないのに、捨てられなくて、でも余所では捨てた子が幸せになってる、とかさ」

「となると、捨てた親も恨まれるよな。抜け駆けで子を捨てやがって、って」

そう相槌を打つと哲治はうなずいた。言葉の道筋はどんどんどツボに嵌っていくように見えるが、常日頃頭の中で組み立てている言葉を繰り返すために喋っているのか、表情自体に曇りはない。しっかりと僕の方を見据えて話してくる。一緒に考えてほし

いと訴えかけてくる。だから、僕も相槌を入れた。

「お前が抱いてる後ろめたさって、結局は循環を生むだけだよな。お前が元の親に固執すればするほど、親子を変えることは間違ってる、って考えが確かなものになってさ、また歪みが生まれて苦しむ親子が増えて、抜け駆けせざるをえない親子が出てくる」

「親が簡単に取りかえられる社会とか、出来ればいいのにな」

「無理だよ。死ぬほど痛い思いして子どもを産む理由が無い」

「親の痛みがあったら子どもを拘束していいの？」

「ダメだろ」

「じゃあ取りかえてもいいじゃん」

「そういうことを言ってるんじゃないかって、そもそも取りかえるだけの子どもが生まれないんだって。ダメなのはダメだけどさ、何だかんだ言って親にとって子どもは所有物だし、痛みに見合った対価が欲しいんだよ」

「そうなのかな、と首を傾げてくる。」

「そうやって首を傾げるあたりが余裕なんだろうな。野田さんって、お前を所有物だと思ってないだろ」

「ああ、確かに。そうか、そういうことか……」

今度は反芻するように首を縦に振る。野田さんの性格は恵治の育て方を見ればわかる。高校時代に学校を辞めて家を出て、アメリカで修業をしたいと言いつ出した養子に対して、野田さんは簡単に許可を出し留学費用をまとめて渡した。全て自腹で、元の親の遺産などは含まれていなかったらしい。もちろん、その時点で素質の片鱗を見せていたということもあるだろうけれど、それにしても、普通なら留めてしかるべきところだ。あるいは、金の工面は自分でしろと言うだろう。

オヤジはそこで俺を対等な人間として扱ったんだよ、と恵治は振り返っている。野田さんは眼鏡の奥で目を細めながら、行ってくるの良い、とだけ言ったそうさ。猛反対を覚悟していた人間にとっては、思いの外あっけなく、それだけに表立って現れた以上のものを感じざるを得ない態度だった。アメリカで野垂れ死んでも知ったことじゃない、何も養子だから言うんじゃない、仮に実の親と子だったとしても同じ判断を下したろう、寛容な親を演出するなんてつもりはさらさらない、むしろ厳格な、他人に等しい人間だろう、何故俺に許可を求めらんだ、俺に許可を求めなければお前は自信を得られないのか、俺と問答を繰り返した末に自信を得て海を渡りたいのか、そんな自信なんて役に立ちやしない、お前が勝手に決めた自信なんて与えてやらない、代わりに武器を与えてやる、金という武器がないからそんなみじめだったらしい態度を取らざるを得ないんだ、これでもって聞え、自信は俺との戦いで奪い取るものだ……い

くらか誇張はあるにせよ、野田さんにそうした向きがあるのは確かである。

「何にも言わなかった、ってのが大事なんだろうな。そこであれこれ言ったら、どんな言葉で取繕ったにせよ、相手を自分の思い通りにしたい、っていう意図が透けて見える。金の工面を自分一人でさせるのも一見責任を持たせるための手助けに見えるけど、身も蓋もなく言えば、俺に迷惑は掛けるなよ、っていう態度だし。

そういう、人を物みたいに見る態度を全部取り払って、野田さんは金だけ渡して恵治を放り出した。金も親としての責任も何もかも放り捨てて恵治と同じ次元まで降りて行った。何にも持たない、絵画の才能くらいしかない人間と同じ目線にまで行って、言葉じゃなしに問いかけた。お前は本当にやれるのか、って。そこに子どもを所有してるなんていう意識はないよ」

「でも、そういうのって珍しい話なんだろう？」

「いわずもがなだ。結局、野田さんもこの屋敷が示す通り、そして医者という地位が示す通り、生まれもっての富裕者だったからこそ、そういう態度が取れた。

「最初から余裕があるならともかく、余裕がなかったら、目の前にある自分の所有物は手放したくないよ、普通。それが身銭を切って手に入れたものなら、尚更」

「珍しい話が、普通になるにはどうすればいいんだろうな」

「生みの親が育ての親だっという固定観念を崩すしかない」

「親が簡単に取りかえられる社会じゃダメなの？」

「それが唯一無二の家族の形になったら別の所に歪みが出てくるだろうね」

「……そっか、それもそうだな。基本は生みの親が育ての親、でもリタイアしてくる人間も出てくるかもしれないから、その人に対しては優しくしてあげる……なんか、月並みだな」

「月並みだけど難しいんだよ。それに生みの親が育ての親っていうのは一見体のつくりに沿った考えみたいに見えるけどさ、それがいざ、体のつくりに沿った考えなんだからこの通りにやれ、って言われだすと、最早肉体からは離れた考えになっていく。本当なら個人個人にズレがあるはずなのに、そのズレをなかったことにしてしまう。多くのズレを、一つの型に無理やり嵌めこんでしまう。その制度が発達すれば、ズレが完全に隠されたものになっていく。ただ隠されただけで、なかったことになるわけじゃない。だから、ある時不意にズレが現れてくる。こうなると、ルールに乗っかって苦しいながらも何にも考えることなく生活してた方としては、たまったもんじゃない。こっちが型に嵌められながら暮らしてたのに、型に嵌ってない人間がいる、裏切り者がいる」

「そして、ズレがまた押し込められる……制度の中の人間を全部救わないといけないんだな」

「お前にはその才能があるよ」

脈絡もなく自分の話題になって、おまけに褒め言葉が聞こえてきたために、哲治は一度のけぞってから疑いの目を向けてきた。だけど、お世辞を使っているつもりはない。

「他人の事を自分の事のように考えるのって、難しいんだよ。一見優しいような奴だって、結局自分にとって利益になる時だけ優しくなるだけで、利益にならない奴は捨てるのが普通なんだ。その点、お前は自分に対して向けられる恨みにも自覚的だし、それを解決するにはどうしたらいいか、ってことをちゃんと考えられる。それも才能だよ」

「いや、さっき言ったじゃん、他人のことを気に掛けなくちゃいけない人間は、才能がない奴だって」

短い髪をいじりつつ、言葉を手繰るように話す。まだ、自信を持っていないらしい。あるいは、そこに賭けるだけの準備は整っていないらしい。

「才能のない奴は自分一人で利益を生みだせないから、他人から奪い取るしかないんだよ。だから他人を気に掛ける。お前は違う。そういう損得勘定で動いてない。子どもを捨てた相手の事を思いやるなんて、何の得にもならないだろ」

「思いやりのある人間だって言われるくらいの得は、あるんじゃないかな」

「目の前にいる人間を助けたらそうだろうな。でも、自分と全然無関係で、会ったこともない人間のことを思いやったところで、感謝されるわけでもないだろ？」

そこで哲治はうつむいて黙り込んでしまった。面映ゆそうにはしていない。むしろ、自己評価に比すれば過大なまでの評価を与えられてしまったから、そのギャップに苦しんでいるといった感じがある。

「それだけ思いやりのある人間がなんで妹のことは考えてやれないんだろうな」

「なんだよ、それ」こちらを見ないまま、苦笑しつつ返事をした。「妹って、目の前にいる人間じゃん」

「目の前にいる人間だから、自分にとって得になってしまいうからって考えるから思いやれないのか？」

「言ってることが滅茶苦茶だよ、目の前にいる人間を助けたら得になるだけだから、遠くに居る人間を助けるって言ったのはそっちじゃん」

「どっちかを助けるとも言ってない。目の前にいる人間だけを助けて思いやりのある人間だって言われるのは胡散臭い、遠くに居る人間だけを助けて思いやりのある人間だって言われるのも都合が良すぎる、そう言いたいだけさ」

哲治はまた黙りこむ。七分丈の裾をつかんで、うつむく首の角度がより深くなくていくように見えた。とはいえ、単に僕から目を背けているわけではなく、今ここに居

ない響子のことを考えているために視線をズラしたようにも見える。

「……別に嫌いってわけでもないんだよ。でも、放っておいてほしいだけなんだ。俺だって、二年後には大学生だし自立しなきゃいけないし。ひよっとしたら里子になってたかもしれない。里子って十八歳になったら親から離れなきゃいけないんだろ？当然、妹や弟とも離れなきゃいけない。なにより、自分で道を開いていかなきゃならない。あいつだって、来年は高校生だよ。いつまでも俺にかまってる暇なんてないんだって」

「自立したら、それまでの縁はすっぱりと切らなきゃいけないのか？」

「そういうことじゃない。ただ、おんぶにだっこはやめろってだけの話。あいつ、俺が中学校に上がるまで友達いなかったんだよ。それをなんとも思わず、俺や俺の友達とばかり遊んだ。最近じゃそういうこともなくなってきたけど、それだって俺があいつの世話できなくなったから、自分で全部やらなくちゃいけないようになったから、性格が変わっていったんだよ」

「変わっていったんなら分別も出来るだろ。おんぶにだっこことまでは言わずとも、元通りの仲になっても良いんじゃないのか？」

「仲良くなる必要もないじゃん」と首を振って、声を荒らげた。「妹に対して兄貴が優しくする必要だってない。むしろ、家の中に敵がいれば、外に出た時にいけすかな

い奴がいても対処しやすいだろ。俺はそういう役割をやってるだけだって」

「それだってお前が勝手に決めてることに過ぎない。妹のためだって言っても、実際に響子がどう思ってるかはわからないじゃないか。響子がそうしてくれって言ってるならともかく、言ってたとしてもお前が尖った態度で話してるから、その真似をしてるだけだろ」

唇を噛んで口をつぐんだ。けれど、責めることをやめてはいけない。

「高校生になるんだからとか、大学生になるんだからとか、外側から借りた理由でもって自分の態度を決めても道を開く事にはならないよ。誰かから嫌われても、それが世の中では当たり前だから、って言いつつ逃げ道を作ってるだけだろ。お前が響子をどう思ってるかが重要じゃないんだよ。響子がお前をどう思っているかが重要で、それに対してどう応えるかが重要なんだよ」

いよいよつむいていた首も落ち着きがなくなっていく、机の方を見たり、入口の方を見たりするようになってしまった。

話しながら、哲治は昔親から捨てられた記憶を思い返ししながら、その状態にまで自分を貶める、つまり嫌われていた頃の自分にあえて戻ること、家の外の世界について考えているのではないか、家族から愛されている状態から一歩外に出ようとしているのではないか、という推測に行き着いた。しかし、本人の口からはその話題は出てい

ないので、何も言わないでおいた。

「まあ、難しいけど、じっくりと考えろよ。それこそ苦しんでる人を救う練習だと思っ
てさ」

多少軽薄な言葉だと我ながら思った。ただ、落ち着かない首が止まって、少しだけ
僕の方へと傾けられた。

「練習って言い方、なんかひどいな」

「どっちに対して？」

少し言葉を探るように間を置いて、「どっちに対してもだよ、多分」

そうだな、とうなずいてカステラをつまんだ。少し乾き始めてはいるが生地のおくら
みは保たれており、問題なく頬張れる。哲治にも薦めたが、断られてしまった。けれ
ど、一つ溜息をついて、ようやく顔が上げられた。

「でもさあ、一歩間違えたらシスコンだぜ、俺」冗談めかした口調で哲治は言った。
「シスコンなくらいがちょうどいいんじゃないのか？ 近親相姦まで行くとまずい
けど、兄妹は喧嘩するべきものだって考えもまずい」

「桜井さんには妹がいらないからそう言えるんだよ……」ふてくされるような態度を取
りかけたかと思うと、何かに気付いたように上を向いて考え込んだ。「ああ、薫さん
っておしろ妹みたいな感じなのかな」

哲治に従って天井の方を見ていたから、薫のことは容易に脳裏に浮かんだ。こちらの気も知らず好き勝手に振舞っている彼女の態度を鑑みてみれば、そしてそうした態度に多少嫌気がさしつつも受け止めている自分を振り返ってみればそうかもしれない。

「だから俺に対しては厳しいんだな。妹とは仲良くやるべきだ、って思ってるから」冗談として言われた言葉だが、あながち間違いいでもない気がした。

「でも、それって恋人に対する態度かな、やっぱり」

一拍置かれてそれまでの調子と変わりない、単純な疑問が投げかけられたので、初めは事もなげに聞いていた。けれど、こちらに視線を固めたまま、まじまじと見てくるので、間もなく怪訝な目で相手を見返すことになってしまった。

「なんだよ、急に」

「いや、それも一つの選択肢だとは思いうよ。恋人同士って、普通はお互い干渉し合っ
て当然なんだろう？ でも、そうじゃない、ってことは、そうじゃなくても恋人として
やっていけるっていう可能性なわけじゃん」

フォローするような慌てた口調だったので、裏にある含みを勘ぐらざるを得なかつた。

「今更遠慮するようなことかよ、なんでも言ってみなっ」

出来るだけ柔らかく返してみると、哲治は少し言い淀んだ。ただ、それは言葉をまとめるための時間だったようで、

「正直に言うときさっきまでの話で、じゃあ桜井さんはどうなんだよ、って思ってたんだよ。逆ギレみたいに思われかねないから言わなかったんだけど、桜井さんの薫さんに対する態度って、相手を大事にするフリをして、自分が楽になりたいだけのものじゃないかって」

その口調に責めるような調子はなかったため、安易に反論は出来なかった。

「桜井さんはそんなつもりないんだろうから、俺の勘違いなんだろうけど」

そうした物わかりの良い態度に偽りはないだろう。しかし、半ばこちらを買い被ってくるような言い方をするから、おぼろげさを感じて、自分を卑下したくなる。

「そういう節が無いって言ったら嘘になるし、別に遠慮なく指摘してくれても構わないよ」

先程まで厳しく言い過ぎたという負い目もあるから、多少の事は受け止めようという気にもなる。それを受けて、哲治は言葉を選ぶための間を取ってから喋りはじめた。「そういう、自分を楽にしてくれるところがあるから薫さんと付き合ってるわけ？」
これも素朴な訊ね方だった。

楽にしてくれる人間でなければ、そもそも付き合おうとする気さえ起こさないだろ

う。けれど、哲治の指摘しているのがそういう話ではないことくらい、わかっているつもりだ。

そもそも薫がアパートを決めないでふらついていたところを、僕の部屋に連れてきた。そこでいくらかの迷惑は被っている。家事もほとんど僕がやっている。普段薫が喋る内容も、暮らしに当たって必要な話以外は理解が追いつかない事がしばしばだ。けれど、僕は干渉しない。薫の性格は変わらないだろうし、それを元に生きてきて、それなりの人生を送っているのだから、これからも自由に暮らしていけばいい。その邪魔をってしまったら、彼女の隣にいる意味はない。彼女の雇い主である恵治は金払いがいいから、暮らしの面ではむしろ助かっている。恵治の言う通り、一緒に居てわからない事ばかり喋ってくるから、とりあえず飽きることはない。

僕は薫のリズムを崩さなければいい。彼女が彼女でいてくれるだけで十分に楽しいし、これからも彼女が見せてくれる様々な景色をありのままに受け取るだけで満足である。

「だったら、その隣にいるのって桜井さんじゃなくてもいいんじゃないの？」

哲治の言いたい事はそういうことだ。素朴な質問になってはいるが、特別意地の悪い表情を浮かべるでもなく、自身も首を傾げて考えているのだから、おそらく悪気はない。

「別れる、って言うてるわけじゃなくてさ、干渉してないフリして、実は干渉してるから、桜井さんは薫さんと一緒に居るんじゃないかな。それを認めないのはどうなんだ、って……」

認めると言われたなら認めるつもりだ。僕の態度がそう見えるのならその通りなのだろう……もちろん、こうした言葉は言い逃れであり、判断を他人に委ねているだけである。

「俺は中学の時に彼女が一人いただけだし、一回喧嘩しただけで別れたから、付き合いう方とか全く分かんないし、言えた立場じゃないから、別に真に受けなくていいよ。桜井さんは、きつと色々な経験を積んで、女の子のことがわかった上で、そういう態度を取ってるんだろっし」

フォローするような言葉と、あわてて話す口調で、自分が黙りこくっていたことに気付いた。

「……自分の事は考えてるようで、意外と顧みないものだな」

「……ま、おあいこってことで」

そう言って哲治が笑うのにつられて、笑い返した。笑うだけの余裕があるから分かる。おそらく、そうした自分勝手な態度について深く考えずとも薫とは上手くやっていけるだろう。相手が自分勝手であるのだし、少しくらい無責任な態度を取ってもいいは

ずだろ……そう思い込んで一年以上の歳月が過ぎているのが、とりあえずの証明だ。ただ、そうした態度が甘えと言われても、仕方はない。

「もう日が暮れるな」

哲治が窓の方を振り返った。それまでは良い具合に部屋に光を与えてくれた太陽が、今では目にきつい刺激を与え始めているので、部屋の主がカーテンを閉めてくれた。黒い布地を隔てた視界からでも、山の稜線に近づきつつある太陽を透かして見ることは出来る。むしろ部屋が暗くなったことで、白い輪郭がはっきりと浮き出ている様子がより目立って見えた。カーテンいっぱい陽光を浴びせてくるので、部屋が灰白く包まれてくる。

そうやって相手から視線を外していると、間もなく聞こえてきた、木の階段を上ってくる足音をしっかりと意識出来た。

「邪魔していいかな？」

襖越しにも音の一つ一つがはっきりと聞こえてきた声は、野田さんのものだった。襖が開いて、白いボーダーのシャツの上に乗った、目鼻立ちのくっきりとした浅黒い顔が現れたかと思うと、僕たちを見定めつつ皺を寄せて微笑んでみせた。

「いやあ、私も逃げてきましたよ」

「逃げたって、何が？」 哲治が訊く。

「女の話だよ。恵治が長電話を始めたから、服のことだの料理のことだの、色々出てくるんだ。幸太を置いて、ね」

薫にとっては、双方とも興味を持たない話のはずだ。つまり、切りだされた話題に相槌を打っている内に、何かの拍子で勝手に盛り上がりはじめ、それに対して他の二人が調子を合わせてくれるのだろう。

「さしあたり、こちらは男の話というわけだ。漱石の話をしていたんですか？」
「そんなところですね」

哲治の方を見つつ言うと、やはりこちらに従ってうなずいてみせた。

「それはいいですね。男の話という感じで実によろしい。女性が漱石を読むことはあまりないでしょう。あの時代は両性ともに良く読まれていたらしいが、時代が経つにつれて色々な作家が現れて、漱石が異性を嫌な風を書くことがわかってしまったからすっかり女性は離れてしまった。あれは男の世界です、女を拒んでいます」

やや辛辣な言葉ではあったが、こちらに向かって目配せをしながら、そうでしたよね、とばかりに確認しつつ語りかけてくるので、興醒めがするようなことはない。いつもと変わらない話しぶりだ。

「漱石自身女が嫌いだったのではないですか」と野田さんが訊ねてくるので、
「そうかもしれませんね。妻に対して手酷かったらしいですし」

とお望み通りに同意した。別におべっかを使うつもりではない。実際に漱石の人生を振り返ってみると、女を嫌っている節が仄見える。あくまで仄見える程度だから、推測の域に留まるということでお互いに申し合わせをしておく。

「ただ、それでいて美人には弱い。大塚楠緒という人がいまして、彼女が漱石宅を訪ねた時、ちょうど細君と喧嘩をしているところだった。決まりが悪くなって、後々楠緒の家にまで出向いて、あの時機嫌が悪かったのはこういうことがあったのだ、と弁解する。細君を相手にすれば頭ごなしに罵倒を投げつけるばかりなのに、余所の美人になるとこうですから、到底世の女性には受け付けにくいことでしょう」

「オヤジって漱石読んでたの？」 哲治が口を挟む。

「全集を持っていったんだがねえ、売ったんだよ。嵩張るから」

「もったいねえ」

「漱石は誰もが読んでいるだろう。誰もが読んでいるから、話を訊くだけで十分読んだ気になれるとわかったのさ。今の話だって人から訊いたことだ」

「それって横着じゃん」 親を相手に呆れた顔をする。「ま、おかげで桜井さんと話が出来るから、良いと言えれば良いかもしれないけど」

「それは良いに決まってるさ。この人くらい話が上手い人はなかなかいない」

「医者よりも？」

「医者なんて口が上手いだけだよ。自分だけ一人勝手に新しい機器だの学会の報告だのの話をするばかりでこっちにてんで興味が無い。忙しそうに、面倒そうに話して、それを自慢するばかりなんだ。そう言うのは話が上手いというんじゃない。話の上手さというのは相手の持ち上げ方に関わるものなんだ」

「オヤジが言うと言得力があるな」

皮肉を前面に出した口調に、皮肉が重ねられて、父親は一杯食わされたという具合にこちらに向かって気恥ずかしげに笑いかけてきた。

僕のこととはともかく、持ち出された定義に合わせれば野田さんこそ話が上手い人間だろう。仕事の合間の空白を埋めるためにぎこちない会話を持ち出してくる同僚と違って、病院に納品に行くたび、野田さんは僕の興味を誘い出す話をしてくれる。一見気ままに振舞っているフリをして、その実こちらに対して、こここそ君が興味を持っていて、病院に納品に行くたび、野田さんという具合に探りを入れてくるから、こちらとしても安心しつつ無理なく返答することが出来る。野田さんと話をしていると、気を張ることが無いから日常の瑣末な問題を忘れられるのだ。

「話を戻そう。家に来た女性の身の上を一通り聞いた上で、人生について考えさせられたなんてことも平然と言うんです。まあ漱石宅は弟子を始めとして人が年がら年中やって来るところだから、女を招いて話を訊くなんてなんともない事なのだけど、人

生について考えさせられることばかりはそうそうない。大方、その人も美人だったのでしょうね」

「美人が出てくる小説も多いですね。『草枕』の那美さん、『虞美人草』の藤尾、『三四郎』の美禰子、いずれも男を嘲弄したり、癢に障るところがあったり、やっぱり嫌だったみたいですが」

「なんか、漱石って嫌な奴だな」と口を挟む哲治に対して、

「ただ、男に対しては優しい」と野田さんは間髪をいれず応えた。「もちろん嫌いな男もいるにはいるが、一度目を掛けた相手はしっかりと世話をするんだ。森田草平とかね、心中を図ったはいいものの、冬山を登るのに疲れて坐りこんでしまったところを見つけられるくらい度し難い男だったんだ。この男を漱石は世間様から一時かくまったばかりか、小説にしてはどうか、と文章指導までした。これが当たったおかげで森田は当面の食い扶持を得られたんだよ」

「漱石の弟子の話は事欠きませんね。男を相手にした時の方がモテたのではないかというくらい」

「ええ、何より引きうけた仕事はちゃんと取りかかるとです。ぶっきらぼうで気難しい性格として語られがちなのですが、ほだされると、とことんまでのめり込んでしまふ。そのあたりが、嫌な仕事だろうとそつなくこなしてこそ一流だとする男には受け

るのでしょね。ただ、だまされやすいとも言えるわけで、典型的なのが養父との因縁です」

一瞬、哲治の眉がしかめられて、悟られないようにするためか余所を向いた。

「イギリスに行った時もそうでしたね。英文学はちゃんと学んでいたけれど、英語を勉強してこいと言われたから困ってしまったそうで」

「松山を散々に罵倒した結果転任した熊本では、生徒に恵まれてとりあえずは落ち着いた暮らしをしていた。留学はその矢先の出来事でしたねえ。おまけに妻ともソリが合わなかった。親友の子規がそう長くはないと悟っていたからか、俳句などにも凝り始めていた時期だった。自分にとって性分に合う出来事と、合わない出来事がごちゃまぜにやってくるのですから、発狂するのもやむなしといったところでしょう」

「漱石って教師をやめて小説家になったんだよな、ひよっとしたら教師も嫌だったの？」気付くと哲治は顔をこちらに戻していた。

「どうか。弟子は教師時代に薰陶を受けた者が多かったから、一概には言えないところがある。まあ、人に教えるのは好きだけれど、それを職業にするには懐疑的だった、といったところだろうか。当時からしてみれば立身出世してお国のために奉仕したこそ男子は一人前であるから、そうした人材を育成するのもまたお国のため、といったところはあったろう。そこでも性の合わなさはあっただろうね。漱石は、漢文学

の方が好きな厭世主義者だったから」

「一時期の小説は明確に俗なものに対して嫌悪を表明してますね。『草枕』とか、『野分』とか」

「そのあたりが漱石の本分でしょう。朝日に雇われて職業小説家になってからは俗な世界を書くようになったけれど、あれこそ、ほだされた結果ですよ。『それから』だってあれこれ語られてはいるが、本当なら高等遊民のまま人生を終わっているはずだった。遺作の『明暗』でさえ、俗なものを書いてると心が荒れるとって、漢詩を片手間に書いていたくらいだ。あれがいたずらに長くなっていったのも、やはり性の合わなさを根底に感じていたからこそだろうし、『こころ』だってあれだけの長さのある、いびつな遺書になってしまったのも内心は俗臭いものが嫌だったからに他ならないと思いますよ」

「でもさ、漱石は本心ではどう思っても、生きるにあたって必要な事は逃げずに引きうけなくちゃいけない、って手本を示したんじゃないのかな？」

哲治が強く口を挟んだ。それまでは話題に乗っているようで乗りきれていない口の挟み方をしてはいたものの、野田さんのリズムは崩さないように問いかけていた。しかし、今回はリズムを崩しているものの、ちゃんと話題に乗りきれている。だから、というべきか、その口調には強い否定のニュアンスが感じ取れた。

対する野田さんは、一度しっかりとうなずいた。

「そうだね。実際、当時は森田みたいな、やぶれかぶれの自然主義が跋扈していた。彼らは告白という体裁を取って世間に顔向けできない自分を書く事で、最終的には自分を認めてもらおうとしていた。罪を悔いることのできる自分、というものをね。といっても、それで罪が償われるわけがない。罪というものは、罪を犯した相手が生きている限り、あるいはたとえ相手が死んだとしても、罪を犯した出来事を誰かが覚えていく限り、償われることなどない、一生向き合わなければならぬもののはずなんだ。結局、自然主義の連中のやっていることは、紙の上でそれらと向き合っているだけで、現実の上では一向に見向きもしない、土下座をしているフリをして舌を出しているような真似だったんだよ。」

その点、消えない罪を描き続けた漱石は偉いものだった。ただ「
やっぱり、と言いたげに養父を見ていた哲治の表情が、ただ、という言葉で途端に曇り出した。」

「消えない罪を描いていたとはいえ、私生活では漱石もろくでもない人間だったんだよ。妻は自殺未遂をするくらい、漱石に対して酷い仕打ちを受けていた。子どもたちも漱石が死んでから、世間で高い評価を受ける作家としての父親に反発して、虐待の事実を暴露するくらいだった。弟子や世間に対しては良い顔をするのに、身内に対し

てはそうでもなかった」

話を聞いている間、哲治の目は瞬きもしなかった。顔はこちらの方を向いてはいるが、おそらく現実の映像はほとんど認識できていなかっただろう。視線を宙に浮かせながら、漱石の暴虐的な一面を想像しているのかもしれない。

「まあ、どこかでそういう、気配りから漏れるところがなければ、精神ばかりか胃を患っている漱石としては苦しみが極まっていただろうけどね。人間というものは、生憎そういう風に出来ている」

野田さんはフォロースするような言葉を投げかけて、落ち着く時間を作った。ようやく我に返ったらしい哲治は一度窓の方を向いてから、何度かうなずいて、こちらを向いた。しかし、顔は上げきれていない。そうした様子を察したのか、野田さんは僕の方を向いた。

「弟子も弟子で、森田をはじめそういう人間が集まっていたから、漱石とはソリが合ったんでしょね。武士の感性ですよ、あれは。家庭の平和やお国への奉仕よりも、主君への忠誠の方が大事なんです。小宮豊隆なんて、漱石が修善寺で血を吐いた時には結婚式の準備を切り上げて見舞いに来たくらいです。おまけに結婚するのが嫌になつてきたという有様で、我々としては責任がないように見えるけれど、あの時代はそれが責任だったのでしょ。家庭よりも仕事、やはり男の世界ですね」

小宮や森田ほどでないにせよ、漱石の弟子にはおしなべて忠君的な傾向がある。内田百閒は漱石が世間には出さなかつた、絵や俳句のような習作はことごとく蒐集していたという。あるいは、漱石の友人は様々な回想記を残しているが、一点だけ、他に婚約者がいた大塚楠緒との恋愛沙汰には皆口を閉ざしている。そこにはやはり、忠義とでも評すべき関係があつたには違いない。

とはいへ、話を聞いていると、そうした漱石にまつわる想像よりも、野田さんが眼鏡越しに見つめてくる目の方に意識は向けられざるを得なかつた。やはり、ここにこそ君の興味があるのではないか、という具合に、口調を工夫しながらこちらに問いかけてくる。

「漱石が単なる病死で済んだからいいけれど、場合が場合なら、どうだったか……」一瞬間が置かれると、僕は思わず哲治の方を見てしまった。その様子に変化はない。相変わらず、頭を半端に上げながら目線を養父の方に固定しきれずにいる。

「もちろん、末弟子には新しい時代の責任を背負ってしまった人もいて、それが芥川龍之介という人です。彼はもう江戸時代の人ではなかつた。漱石は横目で、ほだされながら雇われている身として時代のひずみを見ることができたが、彼にとっては喫緊の課題だった。そして、負いきれなくなつて自殺してしまつた」

「じゃあ、どうすればいいの？」ようやく哲治が声を出した。

「そればかりは請け負いかねる課題だよ。たぶん、誰ひとりとして答えを出しきれた者はいないんじゃないのかな。あるいは、答えを出しきれたとして、やりとおせた者はいやしない。誰かを大切にしたら、他の誰かは犠牲になってしまう。月並みなことだね」

そう言うと、野田さんは咳払いをして窓を見た。日が暮れてしまったか、と言うので僕と哲治もそちらを見た。いつのまにか、カーテン越しに赤い光線が部屋に入り込んでいる。窓の縁に陣取っていたはずの太陽は、今や山の稜線に向かって輪郭を滲ませつつ沈もうとしているところだった。

「さて、パーティーの準備も始まったようだね」

階下の方に耳を澄ますと、食器が運ばれていると思しき甲高い音が聞こえてきた。先に行っているよ、と野田さんは立ち上がって襖を開けた。開けられたまま出て行ったので、背筋を伸ばして廊下を歩くところまで、背中を追いかけることができた。階段を下っていく音も、一段一段しつかりと、リズムを崩すことなく丁寧に歩いている様子がはっきりと聞き取れた。

「オヤジもさ、そういう経験があるのかな」

哲治がこちらを見ずにつぶやいた。月並みなことだと本人が言うからには、あると見積もった方が良さだろう。

「でも、教えてくれないと思うよ」

「なんで？」

「直感」

なんだよ、それ、と苦笑されてしまったが、半ば願望の混ざった答えだった。過去を打ち明けられたところで、それを受け止めきれぬだろうか。野田さんはこちらをしっかりと見つめながら話をしていった。一方で僕たちは顔を背けてしまった。少なくともその違いが解消されない限りは、恵治の言葉を借りれば対等の立場になれない限りは、野田さんの過去もまともに受け止められないかもしれない。

「僕はともかく、お前には教えてくれるかもな。才能があるから」

「からかうなよ……まあ、頑張ってみるよ」

そう言うと、僕たちは部屋を出て階段を下りて行った。

「それじゃ、電気消すぞ」

恵治がリモコンを取って電気を消すと、明かりはケーキに刺さったろうソクの火と、縁側から入りこんでくる外の淡い光だけとなった。

「ほら、お前のためのケーキだぞ？」

年の離れた兄に抱きかかえられて、幸太がケーキを見下ろす格好になる。四本の口

ウソクがそれぞれの火を寄せ合わせて、テーブルの上にだけ光を投げかけている様子を、パーティーの主役はじっと見つめていた。

「危ないって、ケイ兄」左隣に坐った響子が身を乗り出した。

「大丈夫だっつての。ほら、一気に吹き消してみろ？」

果たして見下ろした格好で小さな体が息を吸い込めるのかと思ったが、間もなく赤く染まった顔が膨らみ、口をすぼませながら思いきり息を吐き出した。一度では消えず、兄の支えを借りながら体を揺すらせつつ、何度も息を吐く。ようやく火が消えたかと思うと、拍手とともに電気が点いた。

「おめでどう、幸太！」

恵治の右隣に坐った薫の合図で、クラッカーが鳴される。次々と浴びせられる破裂音によって小さな目は一瞬丸くなったものの、色とりどりのテーブルが顔に降ってくる、すぐに頬を緩ませ笑みを見せた。

「ていうか、ケイ兄危なすぎ。やけどしたらどうすんの」

「一人だけケーキを上から眺められない方が可哀想だろ。そもそも見たか、このじつと見る目つき。今のでオレンジを体得したな」

呆れた表情を見せる姉にも、頭を撫でてくる兄にも関心は寄せないで、小さな手は絡まり合ったテーブルを結んだり解いたりしながら遊んでいた。

奥さんによってケーキが切り分けられて、皆に一切れずつ配られる。野田さんと恵治はビールを、その他はジュースやお茶など各々の好みの飲み物を採りながら、用意された料理に手を付け始めた。

「絵具を組み合わせることも大事だけど、現実から素材を得るのが大事だからね、画家は」向かいにいる野田さんが言う。

「正しく。やっぱり素質があるね、幸太は」

「恵治よりも目覚めるのは早いんじゃない？ 恵治が小さかった頃は、おしろ外でいっぱい遊ぶ子だったから」野田さんの右隣に坐った奥さんが言う。

「その分俺は現実を良く見てたからね。でも幸太は俺を追い抜くね、なぜなら俺は俺に指導されなかったから」

「第一、幸太って画家になるつもりなの？」

一人で笑う恵治に対して、野田さんの左隣に坐った哲治が口を挟んだ。

「なるに決まってるんだろ。俺が援助してやるよ」

「いや、そういうんじゃないくて、本人の意志は変わるだらってこと」

「本人の意志を持ち出すならお前が茶々入れるまでもないだろうが」

「大丈夫だよ、センセイ。私も手伝ってあげるから。プレゼントだって、ほら！」

そういうと薫は膝に乗せていた紙袋を取りだして、中から白いスモックを取りだし

た。野田さんが、絵を描くたびに服が汚れて困る、と言っていたのを思い出し、オーダーメイドで作ってもらったものである。

「あら、ありがとうございます」奥さんが頭を下げた。

「着てみなよ、絶対似合うから」

一度兄の膝から立たされて、着ている服の上からスモックに袖を通すと、小さな手は隠れてしまい、足元も裾によってほとんど覆われてしまう。そのあたりは成長も考慮しているのだけれど、幸太は不思議そうに自分の体に着せられているスモックを見回していた。

「デザインがないから、ちょっと戸惑ってるみたい」響子が言う。

「そのあたりは自分で描いても全然構わないよ、ていうか、そのための白衣だから」
「何も言わなくても描いちゃいそうだね、この様子だと」

大人たちの目も気にせず、幸太は袖を引っ張ったり、胸のあたりを裏返したりしている。

「幸太が画家かあ……ちょっと勘弁してほしいな。まともな人間が兄弟に居なくなっちゃうじゃん」

「まともな人間じゃなくても生きていけるってことはケイ兄が証明してるだろ」

「言えてるけど、テツ兄はそうじゃないかもしれないじゃん。ていうか、テツ兄は落

ちぶれるね、絶対」

「お前だって人のこと言えるのかよ」

「待て待て、まとも、なんて価値観は他人が決めるもんだ。お前らは他人に支配されてるんだよ」

口喧嘩の兆候を見せ始めた弟と妹に、止める気のない兄の一言が投げかけられたことよって呆れてしまったのか、テーブル越しのやりとりは一旦交わされなくなった。「お兄ちゃんとお姉ちゃん、ケンカしないの？」

気付くと幸太がこちらを向いていた。何故だかガツカリしたような顔をして、兄と姉を交互に見交わしている。

「幸太にとっちゃんお前らの喧嘩もヒーローと悪役が闘うみたいなものだ」

恵治が二人を見てから、僕の方も向いて言ったので、

「そうみたいだね」

と返すと、アテが外れたように目を見開いてみせた。

「子どもにしてみれば喧嘩もショーみたいなものなんだってさ」

弟と妹に向かって言うと、それぞれが苦虫を噛みつぶしたような顔を浮かべ出した。「そもそもお前が突っかかってくるのが悪い」

「普段から気に入らない態度取ってるのはテツ兄のほうじゃん」

お互いから目を反らしつつ、静かな声で応酬を交わす。野田さんや奥さんは苦笑しながら見守り、恵治は気にも留めず料理に手を付け、幸太はこれから何かが起こるのではないかと期待の眼差しを送っている。

「喧嘩はいけないよ。幸太に悪い影響が出ちゃうって。おいで、幸太」

調子の外れた合いの手によって、二人はいよいよ決まり悪そうな様子を見せる。

スモックを着たまま、今度は薫の膝に乗せられた幸太は自分の手でケーキに手を付けた。握りしめられたフォークでスポンジを粗く切り、刺して口へと運ぶ。その瞬間、クリームが垂れて白衣に紛れてしまう。早速役に立った格好だ。

「一日中着せていた方がよさそうですね」奥さんが笑いながら言う。

「それならもう一着プレゼントしますよ？」

「いえ、そこまでお世話になるわけにはいきません。これは大切にに使わせましょう。きっと思いつくようになるでしょうから」

「思いつくにするなら汚しまくった方がいい気はするけどな」

「恵治みたいにポロポロにされても困るは困るのよ。哲治のお下がりにも出来ないくらいだったから」

それもそうだ、と言って恵治はビールを飲んだ。

「遠慮なくポロポロにしてくれた方が私としては嬉しいですよ？ サイズも合わない

くなるだろうから、せめて誕生日が来るたびに送らせてください。その都度その都度、私たちに見せてほしいな、幸太がどんな風にこの白衣を使ったか、幸太が色んな絵具を使いながらどんな風に自分をデザインしたか」

「一年したら別のところに興味が出てくるかもよ」

そう言うと、薫が反発の目を向けてきた。

「なんで水差すようなこと言うのさ」

「大人にとっては好き勝手やってるようでも、子どもにとっては自分をデザインするための方法なんじゃないかな。あれこれやって自分に似合ったものを探すプロセスってやつ。それこそ、画家が一つの色を際立たせてくれる他の色を見つけるみたいなものでさ」

「ううん……そう言われると反論しづらい」

唸りながら幸太を見下ろす。ちまちまとケーキを食べていたところに、視線がやってきたから、不思議そうに首を傾げながら見上げ返してくる。

「まあ、しばらくは本人のやりたいことを見守ろうじゃないか」野田さんが言う。

「そうですね」奥さんが同意する。

「画家をやりたいって言ったら私に相談してくださいね、全力でフォローしますから」

「それは俺の役目だから譲らん」

勢い込む薫に対し、恵治がすぐさま言い返す。語気の強さに感応したのか、それまで不思議そうに見上げていた目が、途端に兄とその弟子をせわしなく見比べ始めた。

「喧嘩に対して敏感みたいですね」

「囃し立てる才能に目覚めかねませんね。困ったものだ」

野田さんが快活に笑って、恵治が皮肉ぶった笑いを浮かべると、そこにはもう何もないと悟ったのか、小さな手はまたケーキに向かって伸びて行った。

時計が八時半を回ると、幸太が目を擦り始めた上に僕たちの電車の時間もあったので、パーティーはお開きとなった。食器を片づけるのを手伝おうとすると、お客様にそれはさせられない、と奥さんが言ったので、その言葉に甘えて玄関に向かった。居間を出る時、

「バイバイ、薫お姉ちゃん」

と恵治に抱かれた小さな手が振られた。僕に対しての見送りがなかったことの埋め合わせと言うわけでもないだろうが、哲治と響子からも目配せが送られ、

「それでは、また」

と赤らんだ顔をした野田さんから声を掛けられた。

外へ出ると、日中の陽気とは裏腹の春の名残が感じられる、ひんやりとした空気が

体を包んだ。家々の明かりも乏しく、都心にあるようなネオンの光で空が白むということもない。点々と設置された外灯がわずかに道の先を照らすだけで、少し視線を伸ばしても黒々とした山の連なりが見えるだけだ。それも、飛行機のための赤色灯がなければ山だと気付きは出来ず、ただ暗闇がそびえているとしか見えないかもしれない。山と空の境目も、空の方が星のおかげでわずかに青くなっているくらいに区別しなげきはしない。

「なんか疲れてるね、大丈夫？」

横からふと声が聞えた。

「どこらへんが？」

「雰囲気、としか言いようがないなあ。そもそもパーティーの時から疲れてたよ。なんていうか、一人だけ遠くの方にいる感じ？ あんまり喋らなかつたし、喋ったとしても、すぐ引っ込んじゃった」

心配はしてみせるが、口調はいつもと変わりが無い。わずかな光の中を歩いているため、詳しい表情は読み取れないが、大方首を傾げながら自分の世界に入り込みつつ話しているのだろう。

「テツ君と喋りすぎて疲れちゃったんじゃないの？ あれだけ私にハシヤぐなって言ってたのに、自分がハシヤいじゃってるじゃん」

軽い笑いが静かな道に響く。否定できかねたので黙っていると、反応がないのが不満だったのか、こちらを向いて強い視線を送ってきて、

「ていうか、あの時響子ちゃんと何話してたのさ。教えてよ」

と訊いてきた。とりあえず、事実だけは話しておくに越したことはない。

「あいつと哲治が喧嘩してるのをどうにか出来ないかって話。どっちも仲直りはしたんだけど、中々出来なくて困ってるんだって」

「だったら私に相談すればよかったのに。ちゃんと取り持ってあげるよ」

「お前が取り持って上手く行っても、お前がいない時はどうすればいいんだよ。結局、二人が自分たちの力で解決しないとあいつらは変わらないんだって」

なるほどねえ、と今気付いたようにうなずいてみせる。

「テツ君とは何を話してたの？」

これも、話せる事実だけは話しておく。

「おおむね変わらないよ。でも、響子は哲治と仲直りしたがってたけど、あいつは勘違いしてた。喧嘩するのが普通だって」

「普通ってどういうこと？」

「俺と違って世の中は響子に対して厳しい目を向けてくるだろうから、今の内に訓練してやるんだってさ」

「それは勘違いに他ならないね。第一響子ちゃんのことを悪く言う人間なんていないに決まってるじゃん。あんなに可愛い子を」

「お前は響子のことを養子だろうと関係ない、って目で見てる。でも、世の中には残念だけど養子っていうだけで変な目で見る奴がいるんだよ」

ふうん、という声が響く。話を理解しているというより、興味はないけれど僕に相槌を打つことだけは忘れない、といった感じがある。

「テツ君と話したのはそれだけ？」

「漱石の話もした。途中で野田さんも入ってきて、一緒に色々教えてもらったよ」

「へえ、じゃあ色々勉強しながら悩んではいるんだね。なら、大丈夫かな」

「大丈夫って、何が？」

「漱石なら漱石を読んで、その悩みを知らながら悩み方を勉強してるわけでしょう？ だったらその内仲直りは出来るんじゃないかな。一人で悩んでたら勘違いも勘違いってわからなくなるけど、誰かと一緒に悩んでたら、それは勘違いだって教えてくれるだろうしね」

哲治の場合、そもそも漱石を勘違いしていた節があるのだが、それよりも、薫が悩む行為をそれ自体に理解を示していることが意外だった。

「お前は悩んでたってしょうがない、っていうタイプだと思ってたけど」

それこそ、師匠の恵治のように。薫は唸ってから視線を外し、道の先を見つつ話し始めた。

「最初はそうだと思ってたんだけどね。でも、悩むのが生きる上で必要な人と悩まなくても良い人がいることくらいは、分かってきたかな。テツ君は悩む人で、もちろんカズミも悩む人」

喋りながら、僕の方へと視線を戻してきた。ちょうど外灯の下に差し掛かったので、白いレースのついたトップスが照らされ、それにともなって掘りの薄い顔立ちが一瞬はつきりとしなくなり、暗闇へと向かうにつれて一つ一つのパーツが現れ出した。

「でもって、その二つのタイプの人たちが、それぞれのグループで喋ってるだけじゃダメで、もっと二つのグループが一緒になって励まし合えばいい、っていう風には考えてるよ。私とカズミみたいに」

いきなり僕の名前が呼ばれたので、思わず相手の顔を凝視してしまった。それなりに強い視線を浴びせたとは思いますが、ショートカットが首を傾げた拍子に多少揺れただけで、黒い瞳は外灯の白い光を入れ込みつつこちらへと向けられている。

「良くも悪くも、僕とお前はお互いに干渉してないと思うけど」

「そうかもしれないけどさ、だからって無関係なわけじゃないでしょ。油と水みたいなお互いを邪魔だっと思ってるわけでもない。油と水がくつきりと分けられてるのっ

て、邪魔だと思って居るわけじゃなくて、混ざり合っちゃいけないってわかっているから分けられてると思うんだよね。混ざり合わない事で、お互いの良さを引き立たせてる、っていうのかな？」

視線は段々と僕から離れて、空の方へと向けられていく。わかりやすいようにするためか、油と水をたとえに使ってはいるが、どうにも話し方が下手で変わらないうちでとくるところがない。そもそも、そのたとえで僕と薫の関係が説明できるのだろうか？ しかし、僕にもわかるように、それなりに真剣に考えているということはわかったので、

「お前もそんな風に他人を考えることってあるんだな」

「あるに決まってるよ。また馬鹿にして」

咎めてくるので、もう少し言い方を考えればよかったと思う。見直した、と云えばやはり馬鹿にしていると思われるだろうが、今まで感じたことのない、敬意に近い感情を覚えたのは事実だった。

「とにかく、悩んだって仕方ないって言うばかりじゃダメなこと。悩めば悩むほど、他の人が寄ってきてくれるなら悩みまくった方がいいと思うよ。私みたいなのが寄ってきて、どうしたのって声を掛けてくれるだろうからね」

「お前なら声をかけてくれるだろうけど、恵治みたいに声を掛けない人間だっている

だろ」

「そう言う風にタイプ分け出来るなら一定数はそういう人間がいるってことじゃん。大丈夫だって」

笑いながら道の先を見やって、それまで遅らせていた歩調を、またしっかりと速度へと戻していく。無根拠にも近い言い分で、到底受け入れることは出来ない。むしろ危うささえ感じるので、しっかりとした軌道を歩ませてやらなければと思うくらいだ。

それに、僕が薫に対してどういう影響を及ぼしているのか、そうしたことはうやむやになってしまっている。そのところを訊かなくてはならないので、話の軌道も戻さなくてはならない。

「悩んでる人間が悩まない人間に励まされるってのはわかるけどさ、逆はどうなんだよ。悩まない人間が悩んでる人間に励まされるっていうのは」

「そんなの簡単だよ」そう言って、薫はまた歩みを遅らせた。「私が悩めない分をこの人は悩んでくれてるんだな、って思って安心する」

「それって、他人任せっていうことか？」思わず脱力してしまった。

「そういうわけじゃないよ。この人が悩んでるなら安心だな、って思ってるんだよ。私は悩みとかよくわからないから、ちゃんと悩める人はうらやましいと思ってるよ。」

尊敬してる。スポーツ選手とかに対してもそう思うじゃん。速い球を投げる人もいれば、上手くドリブル出来る人もいる。人間には色々な才能があるんだな、ってことを分かせてくれる。悩めない分を悩んでくれる、っていうのは、そういうことなんだよ」

論理が全くつながりあっていないので、一度つかみかけたかに思えた話が、手からすり抜けてしまったのを感じた。薫は変わらなずにつかみ続けているという手ごたえを感じているようで、話はまだまだ終わっていないのだが、最早ともに聞いていられない。道の先と、僕の方を交互に見るので、置き去りにしようとは思っていないらしいのだが、話の方に工夫がないので、あそこにゴールがあるよ、と目標だけを示されて過程を教えてくれないようなものだ。いつも通りの話しぶりだ。

おぎなりに話を聞いていると気付いたのか、横で溜息が聞えた。

「喋ってない時のカズミはちゃんとこういうことわかっているのに、喋ると途端にわからないって言い出すよね」

そうは言われても、自分自身を自分で捉える事が出来ないのは、今日哲治と話して痛いほどわかった。ある程度他人に教えてもらわないといけない部分があるわけで、だからこそ薫を頼ったのではあるが、その教えを理解するには、もう少し時間があるようだ。

「まあ、時間をかけてわかっていくよ」

ならよし、と言って薫はまたしつかりとした足取りになる。気付けば駅へと向かう坂道へと差し掛かっていた。光と言えば駅の明かりだけになってしまい、目の先には暗闇に包まれていても凹凸がわかるほどの険しい山肌が立ちはだかっている。

駅の入口にたどりつくと、薫がにわかには振り返った。つられて後ろを向くと、町のあちこちから放たれる光が、ぼんやりとした膜のような小さな塊となり、向こうに面する山を仄かに白く染めていた。薫はしばらくそちらの方を見つめている。駅の明かりに照らされて、青いジャケットと白いトッパスがそれぞれの輪郭をしっかりと分けていた。

こういう時は何かを言うわけでもない。後々になって絵として残すというわけでもなく、ただただ景色を見ているだけなのだ。こちらの出来ることと言えば、黙って動き出すのを待つだけである。手持無沙汰になったので、野田さんの家がどのあたりにあるのか、薫を横目で見ると忘れないように探っていた。そうして一分も経たなかつただろうか、まもなくうなずいたかと思うと、行こうか、と言ってまた構内に向かつて歩き始めたので、ゆっくりと後を追った。

へ了

ガラスの街

蜜江田初朗

ちょっとした、でも確かに冷たい温度で私の中心をひどくしばりつける、胸の痛み。もう、これ以上何も傷つきたくないというのに。

十月の空が街を支配する、その地に近い所で、十七歳の杏は自転車を漕いでいる。一心不乱に、時に自転車を漕いでいることなど忘れてしまいうで、でも思い返したらとにかく一生懸命にペダルに体重を乗せて。私の中心を襲うこの確かな痛みと共に。

グリーン塗装に包まれた自転車のボディも、この暗闇の中ではその存在感をあらわすことはない。むしろ、冷たさと暗さの圧倒的な空気に飲み込まれてしまっていて、その色すら物悲しい表情を作っている。少なくとも今の杏にはそう見える。信号の目の前で止まる。赤のライトの点滅は、大した意味もなく視覚をいたずらに刺激する。何を、何を止めろっていうの？ この痛みを？ この存在を？ こんな片田舎のこんな遅い時間帯なので、人どころか車通りでさえ少ない。それでも赤信号で止まらざるを得なかったのは、痛みを抑えたくて抑えたくて、それでも止まらないこの冷たさをどうにかしたかったから。哀しくて。

人間関係については、少なくとも今までの人生の中ではうまくやってきた——そしてこれからも——はずだった。だから、私は、アイツのことが理解できない。少なくとも、私の知っていた、あの優しく情緒深い性格だったはずの、アイツではない。

——「お前に、何が分かるんだ！」

私に何が分かるかって？ 全部よ、全部。私に見えるものの範囲の中でなら、全部。そう言いきれぬくらい、私は彼の事を分かっているつもりだったし、優しくしてきたはずだった。

なのに。

——「お前に、何が分かるんだ！」 その言葉を放った時のアイツの表情を思いだそうとするが、できない。頭と心が拒否しているのかもしれない。思い出すな、敵の顔を。敵。たった一瞬で、友達と言うものは敵になってしまふものなの？ 私たち人間の関係というものは、そんなにも儚くて、そして哀しいものなの？ 信号が緑に切り替わって、またペダルに足をかけて、自転車漕ぐ。今日はどうやら風が吹かない。街そのものが、静まり返った感じ。わずかに、CDレンタル屋さんのけばけばしい電光板の光や、暗闇にひっそりと生える植木の緑たちが、杏の視界と心にただただ意味もなく流れ込んでくる。……痛い、っ。身体と心というものを完全に分けることができないうのだとしたら、心の痛みは身体の痛みに決して劣ることはないだろう。人との

——一瞬の——亀裂を目の当たりにしてしまった杏は、多分未だにその事実の重みを把握できていなくて、それでも衝撃だけが杏の頭の中をかけまわって、そうして冷たさと暗闇の深みに接している。痛みを抱えた自転車は、ガラスでできた冷たい街の中を、一秒一秒すすんでゆく。

☆

どれくらい走っただろうか、気がつくとき杏は帰路にいた。飛び出してきた、家族のいるアパートを頼りに、自転車をくねくね走らせている。行きの時と違って疾走感はない。杏の体は火照っても冷めてもいかなかった。むしろ秋の空を覆う空気はひんやりと冷たく、それは時として人の健康な精神を蝕んでいくほどの不気味さを兼ね備えていた。

杏は夜道が怖くなり出した。一時の感情で家を飛び出したことを後悔しはじめてすらいいた。杏の住んでいる街では、たとえば大通りから離れた地域ほど、夜間灯の整備はおろそかであった。

杏が特に嫌いな場所が二つあった。一つは、杏が中学生の頃通っていた、空き家の前。もう何年も前、それこそ杏が生まれる前からずっと空き家の状態で、壊れた家屋の割れた窓ガラスや木片などがずっと散乱したままなのだ。その空き家には庭もあって、これを庭と呼べるか怪しいほど草木が荒れ放題になっているのだが、その不気味

さといったら無かった。杏が中学生のとき夜遅くそこを通ると、この庭には魔物が住んでいるかもしれない、と真面目に何回も思った。それになぜ一向に建物が取り壊されないのかも不思議だった。もう一つは家から少しだけ離れた所にある公園だった。基本的に、公園というものは、昼の時間帯のためにある、と杏は幼少のころから結論づけていた。それには公園の様子を一日中ずっと観察していれば事足りる。公園に設置してある遊具や、サッカー・野球をするためのスペースは、子供が明るい時間帯に遊ぶものだし、事実、日が暮れると公園という場所には誰ひとりとして存在しなくなる。たまに、深夜になって、金髪のヤンキーや騒ぐ高校生たちの溜まり場と化すだけだ。

そのように、暗がりの中誰ひとりとして人がいないか、若しくは怪しい集団がたむろしている様子は、昼の公園とは全く違ったものである。夜の公園は人々の意識からは遠ざけられる。ただし私のような、近くにアパートがあるから公園は意識せざるをえない人々は除外して。そして、杏は夜の公園の雰囲気がとても苦手だった。二つの薄暗い街灯のあかりが、逆に公園の侘しさを際立たせていて、灯りの下には誰かが居ると何回も思った。口が耳まで裂けた女、チェーン・ソーをひたすら振り回す男、汚い恰好をしてよだれを垂らした不審者、長い黒髪を束ねた白装束の女……。イメージの源泉はよく見るテレビだったり、真夏の怪談話だったりした。公園の灯りの下には、

そのうち誰が出てきても可笑しくなくらいほどの戦慄の手触りがあった。杏が現在たどっている道からして、一つ目の空き家近くを避けることはできそうになかった——公園はなおさらだ。杏は彼女自身でも気がつかないほどにその額にうっすら汗をかきはじめ、自転車の方向を定めた。街灯は少ない。杏は空を見た。三日月と半月のあいだくらいの方が光っていただけだった。ちいさな通りに並ぶ住宅や会社や何らかの建物たちは、むしろ道路に大きく暗く伸びる不気味な影になっていた。杏はそれらをタイヤで踏みしめるうちに、今が暑いのか冷たいのか全く分からなくなった。かなり細い通りに入って、百メートルも二百メートルも先に例の空き家がそびえ立っているのを杏はすぐ目にしてしまった。少し意識しすぎているのだらう……。杏は冷静さを取り戻さなくては、と自分に言い聞かせた。しかし、空き家の手前にさしかかったとき、彼女はある感情を露わにせずにはいられなかった。先程も言った通り、この空き家には壊れた家屋と伸び放題の庭とがあるのだが、その庭の右すみに黒いものが立っているのが見えた。杏はすれ違ったその瞬間、黒い少女が立っている！と思った。決して明瞭に見えたわけではないが、何かとても黒々としていて、そしておそろく背の低い少女。それが荒れ放題の庭のす隅に独りで立っている……と思った。もちろん何か木材とか石とかの間違いかもしれなかった。でももし本当に黒い少女だとしたら？ 杏はもう空き家を背後にしていた。今度は自分でも尋常ではない量の汗を

かいていることに気が付いた。杏の脳裏には、黒くてぼさぼさとしている、そして少女の形をしている像が焼き付いていた。彼女は口をきゅっと閉めたまま、自転車を猛スピードで走らせた。

杏は自分の部屋のベッドのことを思った。一刻も早く家族のいるアパートに着き、そして自分のベッドにばたんと身をあずけられたら……。恐怖に駆られた妄想はそれを打ち消してくる。後ろから黒の少女がついてきているのではないか、とか、いやもしやこの自転車の少女が丸ごとはりついているのではないか、とか悪いイメージはいくらでも出てきた。その度に杏は自転車の後方に目をやり、先ほど目にしたような少女は見当たらない、と確認してまた前を向いては、恐怖の妄想に駆られるのだった。そのうち公園が現れた。このとき杏は進む道だけを見て、公園には一瞥もくれてやらないと心に決めていた。杏のアパートは、公園の角を二回曲がって真っ直ぐ進んだところを右に入るだけだった。家はもうすぐだ。

一回角を曲がって、もう一回角を曲がったところで、杏は安心した。そして、角にある公園の入り口を目にしてしまった。杏は「きゃあああ！」と声をあげた。入口の所に、先ほどの黒い少女が立っている……。全身が黒くぼさぼさとしていた。少女の口元が見えた気がした。黒い少女は薄く笑っていたのだ。

杏は気が気ではなくなつて、アパートまで猛突進した。ほとんど目をつむるように

して、感覚だけでアパートの自転車置き場にたどりついた。ハアハアハア、と息が切れる。もう、すぐさま家に入る。ここまでくれば。

そうして、自転車の鍵に手をかけたとき、杏は自転車置き場の暗がりの中から、物体がゆっくり姿を現すのを目にした。最初は影と一体だったものが、今や分離された。黒い少女は、熊の毛皮のようなものを全身にすっぽりと被っていた。彼女は本当に黒々としていたのだ。黒い少女の身長は杏の半分くらいだった。顔は毛皮のようなもののおかげで下半分しか見えなかったが、黒い少女の口元は真っ赤に塗られていた。まるで鮮血のような紅さで、それは美しささえ感じさせた。

黒い少女の口元が再び開き、その表情はニタァ……とほかでもない杏に向けて笑いかけられていた。今や黒い少女のひきつった顔面は杏の目の前にあった。

*

「杏―？」 部屋の扉がガチャリと開けられると、ベッドには杏の大きくない身体が横たわっていた。

「あんた、どこ行ってたの？ バタバタ帰ってきたりして。」

杏は何も答えず、うつぶせたままだ。母親は返答を待っていたが、しばらくすると小さく鼻を鳴らして、ご飯は電子レンジにあるから、と言って部屋を出て行った。

何とか、何とか家に帰ってきた。今は大丈夫だ。杏は思った。でも、今日は、寝る

ときに灯を消すことなんてできそうもないよ、と。

……そう、その灯だけは、その灯が、この心の内の、冷えた吐息を、それゆえ……。

(了)

「初恋」

る

懐かしむことがそれぞれ吊いであるような春の午後に
美しい色彩のなごりをまぶたに敷いて

眠る夢のなかであなたの帽子が飛ばされてしまった
風に、そう強い風に

その行方を追うには早すぎる季節でした

細やかに流れ落ちる春の粒子のなかでまどろみ
ステップを踏もうとする脚の動きを止めるような

春に、氾濫する春に

僕たちはいつまでも綺麗でいようね、と

囁き合った季節を手にとって懐かしむことが
それぞれ吊いであるような四月の急斜面に煌く

数多くのあやまちを踏みながら靴を汚した記憶

振り返ることが罪で、その意味を問うことが罰なのですよ

耳の先で鳴り響く車輪の音、強く、そう強く祈りなさい

僕たちはいつまでも綺麗でいようね、と

囁きあった季節を懐かしむことがそれぞれ吊いであるような

春の午後に

訳詩

作 アヒム・フォン・アルニム 訳 安部孝作

ひき離された愛

愛らしく麗しいこどもがふたり
愛らしく麗しいこどもがふたり、
ふたりは深く愛しあっていた、
ひとりはまだひとりへと冬には
歌を贈って過ごしていた、
滝のこちらとあちら
重なり合う響きをいつでも耳にするだろう。

冬は橋をいくつも渡した、
ふたりは寄り添った、
そしてふたりは喜びに酔い

橋はもう永遠のものだと思った、

滝のこちらとあちら

両親は離れて谷間に住んでいた。

春は来た、

氷はいまにも溶けそうだ、

だからふたりは憂いていた、

ぬるい風が吹いた、

滝のこちらとあちら

うなりたける小川がどっと流れた。

明るく耀く弧がなにになろう——

それで滝はひとを魅了し、

それはふたりに愛をこめて育てられ

はじめて彩に飾られるのだけれども——

滝のこちらとあちら

ふたりが離れて谷間で歎くのが聞こえた。

鳥たちは飛び越えていった、
こどもたちは悲しんでいた、
そしてひとりで満足せねばならない
互いに遠くから見つめ合うしかなかったのだ、
滝のこちらとあちら
ツバメたちは大きく啼いて飛び交っていた。

ふたりは歌によって一緒になって、
——鳥の雛たちのように、
天国のような春を過ごしたいと思った、
ひき離すというのはむごたらしい、
滝のこちらとあちら
ふたりはどうとう最後に見つめ合った。

少年はめでたくも一人前に
小さな制服をさずかった、

少女は絹の小さなワンピースをもらった、
そうして学校が始まった、

滝のこちらとあちら

鐘が鳴るとふたりは修道院へ向かった。

ふたりは長らく再会することなく、
もはや面影をなくしていた、

少女は豊かな體にコルセットを締め、

少年はもう修道僧なのだろうか、

滝のこちらとあちら

ふたりは来た—— 谷間で呼び合った——

少女は高い声で呼んだ、

少年は低い声で歌った、

それでもふたりはすぐにわかった——

それはみな家が家で眠るころのこと、

滝のこちらとあちら

耀く月下に魚はみな飛び跳ねた。

夜の清涼にうっとりした、

ふたりは川に冷まされた、

ふたりは魚のようには泳げない、

それでもそれでも口づけを求めあった、

滝のこちらとあちら

渦はたけり狂ってふたりを遠くさらった。

両親は歌を耳にした

そして山腹の家から眼にした、

二羽の白鳥が綺羅星のなか身をよじり

滝の重吹きへ浮かばんとするのを、

滝のこちらとあちら

親ふたりは大きく響く木霊を聞いた。

白鳥たちは絶唱した

ふたりの最期の 最上の歌を――
しかして白く耀き靉黷たり、
天使たちが見下ろしていた、
滝のこちらとあちら
甘い響きが花冠の如く漂い流れた。

月が眺められる 滝の
底から高く上がり、
夜は花々の鎖をひきあげ
響きあうふたりを掬う、
滝のこちらとあちら
いまにいたるところ 涙より緑が萌える。

〈 典 拠 〉 Achim von Arnim. Werke in sechsBänden, Bd. 5.
DeutscherKlassiker-Verlag: 1994, S. 703-706.

解題、あるいは短い批評

安部孝作

夜闇に響く鈴音ように愛らしく美しく、不吉なこの詩は、ドイツ・ロマン派の詩人、アヒム・フォン・アルニム(1781-1831)の手による。一八〇九年に発表された長編小説『ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い』で間奏されるこの詩のモチーフは、実に、近親相姦だ。声として現れるふたりの玉なることもは互いに無自覚に愛し合い、その歌の響きは調和して重なる。ふたりを同じ血の許に産出した自然はまだこのふたりの純粋な愛に安らいでいる。その愛はまだ互いを分離する性という法に統治されておらず、むしろ、別れて暮らす両親によって毀たれた情緒的家庭の紐帯を保つような、——つまりもう一つの家という道徳、あるいは法に統治された——愛のままだ。そう

して冬、白んだ谷間に氷の橋が架かることでこのふたりは逢瀬する。冬は生命の枯死する季節であり、凍てつく寒さは愛に相応しくないかもしれない。しかし二人を分かたつ滝の力を眠らせるのもまた冬なのだ。それにしても、冬に宿る愛は、どこか死を思わせないだろうか？ 必ず溶けてしまふ、ふたりを結ぶ氷の橋が、この愛は白く耀く仮象でしかないのだと思わせる。それはまた、春の訪れが虹をふたりに——実体の無い橋としてとってかわり——渡したときにもそうなのだ。ここでは白く耀く仮象は、鮮やかな色彩を帯びる。それは未分化であるがゆえにふたりを隔てなかつた美から、分化し、隔たることで現れる美であり、確固とした物質と光学現象という根本的な強度が異なる。ゆえにふたりの憂いはどこか甘美で、激しさを増す流れは自然の力、情熱を醒まさせた。多様な生命の色彩、虹の色彩が、ふたりの愛の豊かさによって紡がれる歌の色彩と重なる。そしてその美しさがなおの事ふたりの嘆きと互換的なのだ。こどもは自然そのものかのようにでありながら、その未成熟が故に官能的でなく、肉体の喜び、駆使を、ツバメや魚たちとは違って享受することはできず、分け隔てる谷を越えていく術もまた、これら生き物と異なりもたない。

やがて成長する。滝のこちらとあちらで違う学校に通い、家を出ることを覚える。ふたりを支配する法は、より大きな世界のもの取って代わり、ふたりの身体も意識もまた、家の支配——血縁の類似性——から解放されながら変態していく。しかし性

微を了えるころ、ふたりは喚び起こされてしまう。コルセットと修道服というより強力な、ふたりを性的に分け隔て、孤立させる抑圧の道具（それらは思春期における性的欲望の誕生を認めたい矯正器具なのだ）が備わった時、ふたりはそれを拒み、解くようにして滝で落ち合う。ふたりは道徳から脱け出て、恋愛に身を任せた。この時、ふたりは気付かないはずがない。自分たちが離れていた両親の子供であり、道徳的に愛することが禁じられ、その愛が抑圧されてきたことを。しかし再び覚醒したこの愛は、何年もの四季の螺旋をまるで縦に——滝のように——流れ落ちて幼少期の冬から青年の春へと突破しようとし、性欲Ⅱタナトスを成就しようとする。それが激しい渦——引き離し、接近するというせめぎ合い——を生じさせ、予測できる死を引き寄せようように引き攫われ、流される。そして——雛のように歌っていた——ふたりは白鳥と化し、羽根を広げ、迎えに下りる天使とともに、天へ昇る。重吹きと綺羅星とが重なる境界面を対称面として、ふたりは沈み、昇る。逸脱してしまい、響きの乱れるこの世の法から逃れ、ふたりがまた調和する法の許へと転生する。まさに恋愛はひとつの通過儀礼だった。多彩な光からまた白光が——地、宙、天と上昇しつつ——蘇るⅡ孵化する過程なのだ。ここに白い芋虫から彩なる絹が生まれ、また白い蛾の誕生を思い浮かべることが可能だ。そしてそれは、同時に死に他ならない。ふたりの愛は涙として地に注がれ、豊穣をもたらすこととなる。冬の終わりにはふたりの犠牲が必要で

あったかのように——。というのも、家庭の支配を破り自然に吞まれたこのふたりに対し、現世に生きる両親の、ふたりの愛をひき離したこの道徳は、自然を統治するものであり、情緒的家庭にありながら離別して苦と思わない親たちの心情の空白を、——つまり現生の冬の不毛を、更にこのふたりに購わねばならないからだ。

このことから、明らかにこの時期に子どもというものが初めから大人と截然と存在し、あらゆる分化、欲望の指示、抑圧という法から解放され、それゆえに家父長的権力に言われるがままに贅として捌かれるの解剖、あるいは身体、身体性を分析の俎上に乗せられる。この肉体内部における多様性の発見は、感情の居所を定めがたくした。それは生氣だろうか？　あるいは磁気だろうか？　新たな器官だろうか？　脳だろうか？　分子生物学の現在に至るまで疑義が提示され続けるこの問題は、子どもという、感情的にも肉体的にもずれない、相互に一致した、全体感の所有者をけばけばしくも作り出すことになる。子どもはまさにアダムもエバも無花果の葉を必要としない黄金郷であり、また死してこそ千年王国をもたらず黙示録的世界の象徴となる。子どもはこの世の恵みのため、もはや殺されなければならぬ。この破壊衝動が性的な装置の濫用が目立ったヴィルヘルム終焉からナチ下工業経済都市ベルリンにかけて発生したのは偶然ではないかのようだ。それがさらに十七世紀、十八世紀の家と道徳、調和的教養を主張したドイツ啓蒙主義、カントの未成年の比喩に代表される子どものも

う一面がまた重ねられると、一層不合理主義と言うのが啓蒙や道徳とは切り離された問題であり、むしろ啓蒙の内部に通路があったと考えることができる。

そしてこの詩における近親相姦の問題は血縁と結婚、近親相姦自他を禁止する原理である贈与、あるいは経済に裏書されていることがわかる。つまり他の血族と結婚することは国民 Nation、あるいは民族 Volk の概念に回収された人種差別において忌み嫌われる一方で、明らかに他の血族との結婚が経済のシステムに織り込まれていたわけで、少なくとも結婚Ⅱ家庭の形成が経済共同体の形成に他ならないシステムにおいては判然としていたので、このジレンマが深刻となる。転換すると、この詩が書かれたのはナポレオン戦争時であり、神聖ローマ帝国は滅んだのでドイツがまさに諸領邦に分離して存在していた。ナショナリズムが盛んに喧伝される中で、一体どこに足元を定めればよいのかが不明確な中、血族の意識は国民意識と共に膨張し、他の血族を定める境界線が乱れた。当時の社会が血縁・地縁を基本にした民衆と経済・社交的なブルジョワジー・貴族に曖昧に分かれていた、というのはよく聞くが、むしろ縦の層よりも横の広がりにより脅威を感じていたのだ。敵と味方がわからない状況は、やはり強力な敵の像を政治的なものが作り出す。その中で「近親相姦」というのは禁忌であり続けただろうか？ この詩で特徴的な大人と子どもの枠組みが縦の層を示すとすれば、土地と血族の古さに根柢を持つフランス的貴族（ユンカー）の経済的合理性、統

治上の合理性、並びに膨張意識・国境意識といった要素のハイブリッドが、まさに民衆の意識の混乱へと変じさせる。そしてこの子どもは死んでしまうのだ。それは死への欲動であると同時に民衆の複雑で、しばしば言語化に隠蔽された、あるいは過度に強調される、時に性的な代償を用いながら掻き立てられる、捉えがたい感情に他ならない。

「民話や神話のキャラクターや、夢、幻視、夢遊病、メスメリズム※などの当時流行の深層心理学的なものを駆使した文学的な仕掛け」を時代批判に用いる彼が、「対岸」のふたりの悲恋を描いたことは、単に彼が「進歩派とも保守的な愛国主義者・反ユダヤ主義者とも、プロテスタントともカトリックとも」いえない立場であったことを反映させている。この詩においてもあらわれている言葉遣いに影響を与えている、四年前一八〇五年にクレメンス・ブレンターノとともに編纂した『少年の魔法の角笛』にある民謡採集が、彼を文化的な地下茎を掘り起こした愛国者のようにも見せる。とはいえ、その歌謡には、グリムの採集した民話と同様、フランスや東方との交流を証立てるものも多く存在していた。さらに彼はフランス革命を肯定するし、その限りにおいてナポレオンを「裏切り」と見做した。たとえばこの詩が少年と少女に留め、女性性も男性性も脱ぎ捨てさせたところには、反って性別分業と男性性の優越を前面に打ち出したナポレオン法典とは真っ向から対立する。霸権的なナポレオンの愛国主義は、

結局のところ自由でも平等でもなかった。愛国主義は、——徹底して家父長的であった——啓蒙主義と結託して、——コスモポリタンの蓑を着て——侵略を正当化するものに過ぎなかった。それに反発するプロイセン——彼は当時ベルリンにいた——をはじめとする諸邦の言説の乱れ、分裂は、ビュヒナーの絶望したように、調和的に統一されたり、社会改革的に作用したりすることはないかと感じられたかもしれない。殊に「対岸」の民衆は、一切隔てられる。そういう諸相を批判するように、この詩の端々にある表現は置かれている。この詩のもつ美的な仮象が常に壊れたり幽かであったり、死んだりするというのは、まさにこれら仮象が、批判たるべく仕組まれたからで、さらに毀れ、蘇るからこそ、これら仮象は瞬間より永遠へ至る、既に存在しない美の觀念へ昇ることになるのだった。

引用 『ドイツ幻想小説傑作選』（ちくま文庫、二〇一〇年）収録、今泉文子「解説」

※ メスメリズム……ドイツの医師（1734-1815）。宇宙に偏在する磁気と人体に流れる動物磁気を、飲用の鉄や「レンズ」を用いて干渉させ、精神的・身体的治療を行うことを提唱した。その思想にはヘルメス主義の影響もあり、思想・モチーフ的にゲテヤシラー、ホフマンにネルヴァル、あるいはカリオストロ、そしてフロイトらに継

承された。フランス革命を主導したマラーも愛好していたように、当時啓蒙されてい
ると思ひ込むでさえも影響を免れることはなかつた。

ある天気予報士への手紙

常磐 誠

一・最初の話

産まれたときからでかかった。四千グラム越えは当然のことで、中三初日で百九十近い背丈をしていけばそれは当然目立つだろう。

だが運動はしていない。というか軽い喘息持ちで急な運動やスポーツはできやしない。

「そのでかきマジ無駄だわー」

という幼馴染達の言葉はもう聞き飽きた。……いや、問題はそこじゃない。

そんなんだから、今年の春赴任して来たばかりでいきなり俺等の担任になりやがった百合神(ゆりがみ)に目をつけられて、そしてとんでもねえお荷物を押し付けられる羽目になったのだ。

「……………」

「……………」

「……………なあ」

「……………」

「なあおいってば！」

「ハ、ハイ！ わっ、私……ですか？」

「あんた以外に誰がいるってんだ」

「え、えーっと……。そ、う、ですよね？」

「……………」

思わず漏れるため息。

「あんた一応先輩なんだろう？ 何でそんなオドオドしてんだよ」

俺はギターのチューニングもそこそこに、とんでもなく居心地の悪そうな顔をして怯える相手を見る。

公立の中学校だというのに去年ほぼ一年学校に来れなかったからだとか、事情をよくは知らないがとにかく留年を食らい、一年後輩である俺等と同級生になっちまって、そしてそれらに囲まれて固まってしまっている彼女を見る。すると、

「やだ隆きゅんこわしい！」

その後ろから、俺程背丈はないが充分にでかくて威圧感のある男が体をクネクネさせながら言う。吐き気を催す程の気持ち悪さだ。引く。

「あ、……………えっ、と……………」

こいつも引いてるな、ということだけはわかる。

「かわいいと思います！」

ありえねえー……。マジに言ってるのかよこいつ。

「ありがとう。わかってるよ！」

とか言いつつサムズアップする百合神。

一回トラックにでも轢かれてまともな思考取り戻してこいや、とか言うのと面倒なことになりそうだ。黙っておく。

「気持ちわりー」

「は？ きもいんやけど？」

敬一郎(けいいちろう)と絵梨(えり)がそれぞれに声をあげる。「いやいや。やっぱり年の功だね。瑞穂だけは僕のこの可憐さ、可愛らしさというものがわかっているのだよ。素晴らしい！ はっはっは」

何も気に留めないようにして気持ち悪いデブ野郎こと百合神は笑いながら教室の中心へと入り込んで行く。

放課後の教室、別に何年何組の、とか決まっていけない場所を、一年前、二年生の時に俺が勝手に活動場所に決めた。田舎なのだ。バンドの練習場所なんざそう易々と準備できるはずもなく、適当にやつついで環境を整えた。別に大義みたいなものはない。ああ、目標って言った方が普通か。まあ、ないもんはない。実際、俺等三人のたまり

場としての機能も十二分にここは果たしてくれて、ふらっと授業をフケて体育館裏だったり、そしてここだったりに身を寄せたりするのは何となく落ち着いたりもした。その場所を、こいつは。

「部員四名と顧問一人！ 軽音部ここに設立う！」

いとも容易く壊そうとしているのだと思うと、おかつ腹が立って仕方が無かった。思い返すのはHR。発表は唐突だった。

「見慣れない子が一人いるなあ、って思っている人もいると思うんだけどさ。中村瑞穂。彼女は去年もここの教室にいたんだよ」

教室は騒然とした。俺は興味がなかった。染め上げた金髪を面倒くさそうにいじっている敬一郎も、ピンク色の髪を同じくいじる絵梨もつまりそういうことなんだろうと思った。

「噂になってしまうのもアレだし、そんなもって隠すようなことじゃないから言うんだけどね」

正直話半分でしか聞いちゃいないから、その続きの事情とかはよくわからなかった。どうでも良かった。

「杜隆、小林敬一郎、菊神絵梨に続く四人目の部員として軽音部作って、そこに所属することに決まっているからよろしくね！」

ここだけは除いて。

「ふざけんな！」

と三人ともが叫んだが、百合神はそれぞれの保護者に話を通し、記入済みの入部届をピラピラと示すだけだった。満面の笑みで。

三人それぞれがこのクソデブに対して、文句と、パンチとおまけに金的の一発でもかましてやるうと意気込んでいた訳であるが、無理だった。

「簡単な話さ。僕は瑞穂の居場所を強引にここに作る。君達には協力をお願いする。その代わり、君達は今まで持つ事のできなかった目標と、そして高校進学に向けた内申等々のポイント、そして貴重な体験を手に入れられる。悪い話ではない。君達はこの学校のお荷物なんかじゃ、ないんだよ」

顔は笑っているがその重圧はハンパなものではなかった。

こいつ、本当に一人一人、いや、もう何十人と殺してるんじゃないだろうか。そこまで思えてくるくらい目のだ。

俺達は何も言い返せず、なのに体だけは妙に打ち震えるみたいになって、それでも敬一郎だけは、

「やってられっかよ！　こんなズブのド素人なんかとよ！」

とどうにかして声を絞り出す事ができた。

後から聞いたが、寿命が縮んで、シヨンベンが逆流して顔にある穴という穴から出たんだそうだ。おもれえ体してんな。お前。

そんな俺等を黙らせるために百合神は瑞穂を俺達の前に立たせて唄を歌わせた。何が始まるうと、俺達は変わらねえ。もしこいつの歌が上手かろうと、そうそうドラマかマンガみたいな展開があつてたまるかと、その唄を聞くまで、確かに三人ともそう思つていた。

その歌声は本当に凄まじかった。

売れない歌手がやるちっぽけなライブ。それでも上手い歌手は山ほどいる。そのことを俺は知っている。

けど、瑞穂はそれを凌駕していた。軽々と。響く歌声に、俺達の動向を見てにやつく野次馬共が、廊下で活動している運動部の連中が、違う階で活動しているはずの連中が。時に音の大小なりで小競り合いをするような吹奏楽部の連中が。

百合神の言う部室——俺達のたまり場——に、ぞろぞろと雁首揃えて集まるのだ。異様な光景に、俺達三人共が固まり、声を失った。そして同時に、俺の頭の中でかつて抱いたちっぽけな夢の光景が広がって来るのを感じた。

できるかも、知れない。

「俺等三人でデビュー、とか？」

「できると思ってたんのかよ？」

「無理に決まってんだろー」

「だよなー」

「ハハ！ ムリムリ！」

そんな風に去年、敬一郎と一緒に簡単に笑って、掃いて捨てたような夢。でもそれが、四人でならば。……できてしまうかも、しれない。が、瑞穂が歌ったのは、ガーン、祈りのテーマ。それもアカペラで。

それからしばらく瑞穂は教師陣からも『ガーンゴン姫』と呼ばれ続けることとなり、その度に赤面する羽目となった。そんな好きか。ガーンゴン。子ども向けアニメじゃねーかよ。もう一度聞こうか。そんな好きか。ガーンゴン。

二・私も嫌いです！

百合神はウザくて、そして自分勝手だ。でも、瑞穂はやっぱり教室の中に居場所を作るのが困難な様子で、そりゃそうだ。ダブって二回目の三年生をやっているような、そして周囲に溶け込もうと簡単にできるような外交的な性格、というかキャラを持ち合わせちゃいない瑞穂は、どうしたってお客さんになってしまう。

それでもどうにかこうにかやっていけているのも、俺達シールドが傍にいてやる事

で、——元々浮いている俺達の傍にさせること。——クラスの余計な発言を抑え込み、そして孤立もさせないという百合神の作戦に俺が嵌めこまれてるから、だ。正直、厄介事以外の何物でもないこの存在は、でも何故か俺にとっても放ってはおけない存在になってしまっていて、気付いた時には俺は瑞穂にギターを教えていて、シールドの中での居場所を分け与えてしまっているような感じになっていた。

シールドは基本的に作詞作曲共に俺がやっていて、時々絵梨なんかも、やったりする。そして、楽曲に合わせてボーカルや演奏する楽器を変えている。その中で瑞穂は元々弾けるピアノと、俺が教えるギター。あと、敬一郎にベースを教えさせて、歌は問題ない。そう考えていた。敬一郎？ あいつはネタ曲担当だ。決まってる。

ところが、それはあまり上手くいっていない。何故かという、敬一郎と絵梨は部活に来なくなってしまったのだ。

敬一郎は俺とは幼稚園からの付き合いで、小学校五年の時から金髪だ。つまり染めただっていうことだ。染めたことがわかった日に敬一郎は遅刻してきていたし、家族も通り一辺倒の反対はしたんじゃないかなと思う。もっとも、もう既に学校で浮いていて、誰も本気で叱り、髪を黒く染めたりするような方向へ諫めたり、実力行使に動いたりする存在がない学校生活を敬一郎が送っていることを見抜けてなくて、そしてそれを学校に押し付けようとした時点で俺は敬一郎が家族から見放されている、と感じ

るには十分だった訳だが。

きっかけは、算数が人並みはずれてできなかったこと。算字障害、とでも言うのだろうか？ その兆しみたいなのが見て取れたとかどうとか、俺の耳にも入ったことはあるが、

「ま、どーでも良いね、んなこと」

と本人も言っていて、そしてずっと学力的には低空の低空。ド低空飛行を続けていて、授業の妨害はお手の物。教師に嫌われ、クラスメートに疎まれ、家族の中ではまづばあさんに疎まれた。三つ年下の弟は逆に出来が良すぎる位良いものだから、このばあさんは弟ばかりを可愛がるようになった。

父親は、俺もまともに顔を思い出せない。家にいないのだ。

稼ぎは良いらしい。確かに、俺達の中でも断トツに良い家、良い暮らしをしていて、実はバイオリンを習わされていた時期があった敬一郎は、今でも暇つぶしと称してバイオリンを弾いたりもする。

勉強だけでなく、知能テストも。スポーツも。そして、このバイオリンも。全て弟の出来が良すぎるもので、敬一郎は、暇つぶし以外で、何かをしない人間になったように思う。

「人生ってつまんねーよな」

が口癖で、そりゃあそうだよな。三つも年下なのに、何もかも身近に自分より上な奴がいて、周囲はそっちばっか向いてるんだもんな。

「ああ。人生ってくそつまらねえよ」

俺も合わせてそう言うのが日常の一コマだ。けど多分、それは八割くらいなもので、二割はこいつ本人の問題もあるんだろう。この二割は、本人に言うと不機嫌になるから、皆避けているが。

ただ、家庭の中で、ばあさんが言うのだそうだ。

「嫁のしつけがなっとらんから、こんなのがでさるんだ」

ってさ。嫁だから頭下げてすみません申し訳ございません言うしか、ないから。そんな母親を見ているのって、嫌だな。ぶっとばしたくなんねえの？ と聞いたたら、

「ああ？ ……まあ、精々あいつの目の前で椅子を蹴倒すくらいかな。あんなババアぶっ殺したって、何の価値もねーっの。だろ？」

俺に同意を求められても困るし、俺はお前へタレな、としか返さなかつた。

「うっせーよ。そのたんびたんびに、一体母親はどんな躰を、とかぼやく老碌ババアがぶっ殺したくなるくらいには不愉快なだけさ」

学校でも、家でも、敬一郎や絵梨はお荷物で、いらぬ存在だと言われて生活していた。家じゃともかく、学校で同じく言われてる俺も、まあ同じ穴の貉な訳だが。

例外の瑞穂は俺達に亀裂を入れることに繋がった。

そんな敬一郎を焚き付けて、変えたのは百合神だった。敬一郎はすぐ百合神の説得に乗せられて帰ってきて、そしてベースをいじりだしたのだ。しかも、頼んでも無いのに瑞穂に教え出したりなんかして。

「良いんだよ。どーせ今の俺はお荷物、なんだし。好き勝手にやらせてもらうさ」
とか言っていたが、そんな敬一郎の姿に瑞穂も感化されて、かなり二人の熱は高まっていた。

当然、百合神は絵梨にも同様の焚き付けを行っていたが、それでもあいつはたまり場に来る事はなかった。別の理由でもあるのかねえ、などと言う百合神は呑気なもんだった。

絵梨は昔から素直じゃないというか、跳ねっ返りというか。そういう人間に見える。ただ、見えるだけであって、実際にそういう人間なのだと言おうと思うと、奥底から絵梨という存在はそんなに単純じゃないってことに気付かされることがある。

まず絵梨は関西弁を使うが実際あいつは関西には行った事すらなく、地元生まれの地元育ちだ。

じゃあ何故？ という当然の疑問が生まれるがその答えは俺のお袋だ。絵梨はお袋の真似をしているのだ。

昔からどこかズレた発言をしてしまったり、考え方が特殊だったのだろう。俺も一回だけ聞いたことがあるが、

「あの子とは遊んじゃダメよ」

「あの子は、少しおかしいから」

という周囲の大人達の言葉。それらはまさしく毒で、聞かされた子供は絵梨に近づけなくなり、言われた絵梨は弾かれて、省かれて、いつの間にかズレたまま、そして周囲に対する攻撃性だけ保ったまま、来てしまう羽目になっちゃった、という訳だ。そんな折に俺のお袋がどういふ訳か関西弁で怒鳴り散らす様を見てしまったらしく、それがまるで悪を張っ倒すヒーローにでも見えてしまったのだろう。それ以来あいつはお袋の真似で関西弁を喋るようになった。

俺達からすれば単なる偶然なのだが、ただでさえ『おかしい』娘を、余計におかしくした親子になっちまう訳で。そういう訳で俺達親子は絵梨の母親とは折り合いが悪い。まあ、俺からすれば知ったこっちゃないんだが。

精々言えることがあるとするならば、あの関西弁は絵梨なりの一生懸命、っていう奴なんだと思う。倒れず突っ張り続ける為の、一生懸命。

閑話休題、というものになるか。そんなこんなで部活に顔を出さなくなった絵梨を変えたのは、何と瑞穂だった。今までずっとどこか年長者という風に線引きをしてい

たように感じられる態度ばかりだったが、絵梨に対して自分なりのアクションというものを起こし始めていたのだ。

「隆君からギターやベースを教えてもらって行く内に、できる様になって行って、それを今度は絵梨さんにも伝えたいって思うんです」

と言っていた。要は、楽しさを伝えたいって奴だろうと理解した。……まあ、意味ないだろうなって思って、けど言えなかった。あまり乗り気でない俺の顔を見ていると、それをやめるだろうと、そう思った。こいつはそういうのにすごく敏感だっているのを指導中に何度も感じていて、そしてそういうのにかなり素直に、というか、従順と言って良い程に従う人間だったから。

ところが、だ。瑞穂は部活が終わった後に毎日毎日絵梨の家に行き、会おうとしていたのだ。家族と仲が悪い絵梨が家に寄り付く訳が無いのに。

絵梨の家族からも疎まれてしまって。それでもなおお挫けない。かなり冷たく当たられてもなお、一時だけ顔を伏せても、決まって五秒くらいで顔を上げ、そしてその後は顔を下げなかった。むしろ晴れやかに笑っていた。雨の振る日には、何かのまじないだろうか。必ず傘をくるくる、と回して、顔を上げたら、笑顔のまま。もう下げなかった。

そんなものを見せられて俺もどうかしちゃった部分っていうのがあるんだろう。も

う一つの俺達のたまり場を教えてしまった。

売れない歌手だったり、地元からデビューしたいと思っていたりする連中がライブをすることができるようなちっぽけなステージを備えた喫茶店。俺や絵梨は学校をサボったりした日なんかここで演奏をしていたりもするのだ。つまり、絵梨も楽器の腕には覚えがあり、瑞穂が感じ始めた楽しさ、なんていうのは、とうの昔に味わいきったものなのだから、意味が無いと思った訳だ。

絵梨が俺達三人——いつの間にやら敬一郎まで合流していやがる。意味が分からない——を見付けると、あからさまに瑞穂を見て嫌な顔をした。その気持ちが理解できないではなかった。絵梨が言い放つ。

「わいはアンタみたいな女がホンマに好かんねん！」

要はズブの素人で、学年も——本来なら——違って、そして今まで何の交流もなかったような女子が、俺と楽器で交流を持つ事が、それもヘッタクソな腕前で交流を持つ事が許せない、ということだ。

その気持ちに拍車をかけたのは瑞穂が俺達と大きく違う部分、不良であるか、その逆の委員長タイプか、という部分だった。

今は俺や敬一郎、それとマスターがいるから良いものの、いなかったらもう絵梨は手足を出していることだろう。それほどまでに感情を露にしている絵梨に対して、先

生もマスターもすごく冷静だった。

先生は絵梨が来てすぐマスターから一報を受けてコソコソと様子を見ていたそう
だ。とんでもないストーカーもいたもんだ。

アンタみたいなのがホンマに好かんねん発言から空気が凍ると同時に、
「にやにやっぴにやにやーん！」

と緊張感の欠片もない登場をしたかと思えば、マスターと一緒に、

「そういう喧嘩は楽器でやりたまえ！」

とぬかす。色々と問題が大きくなるかと思っていた俺と敬一郎だったが、絵梨も瑞
穂も、それぞれに楽器を準備したのだ。

「ギッタギタにしたる！」

と直接口にした訳ではないが、そういう気持ち露骨に伝わるような演奏。何より、
まだ瑞穂に教えていない、というか教えてもできないようなコード、奏法をバンバン
織り交せて音を表現する絵梨の音楽は、刺々しく、荒かった。

一方の瑞穂は、簡単なコードだけで、時折間違えたり、詰まったり、止まったりし
ながら、思い思いの音を奏でる。全く教えた訳でもないのに、何故か絵梨の刺々しい
音を柔らかく包み込むようにして、和らげていくように感じられた。

「なあ……。お前瑞穂ち……さんにあんなことまで教えてマスターさせたのか？」

敬一郎は信じられない、という顔で俺に尋ねてくる。

「んな訳ねえよ」

答える俺も、本当に信じられなかった。

「フンッ！ 上手い下手はハッキリわかるやる！」

いつまでもケンカ腰の絵梨だったが、

「でも、楽しかったですね」

と言って無邪気に笑うその問いかけに、

「……いつまでも言ってるや」

毒気を抜かれていた。そしてその次の日の昼休み、絵梨を呼び止めた瑞穂の、

「昨日言い忘れていました！ 私も嫌いです！」

という訳の分からないタイミングかつ訳の分からない内容の言葉を全員で笑ったことを契機にして、絵梨も部活に戻る事となった。そしてなぜか、その時には学園祭の中に組み込まれている——というか、百合神がねじ込んだのは明らか——ライブという目標を、誰も馬鹿にしたりしなくなっていた。

二の余談・ほのかな茶色、のお話

瑞穂が絵梨の家から引き返したりする時なんかには、ふっと頭の中に蘇るモノを感じ

ていた。

そういうえば、あの女の子もこんな感じで。髪の毛の色が少しだけ茶色だったな、なんて。

デジャヴユなんてそうそう珍しい話でもないか。別段深く受け止めはしなかった。金髪に染めて一生懸命に不良を演じる敬一郎が、俺の背中を押しながら急かす。そうしている内に、俺もまたこのデジャヴユをふわふわの内にまた落とし込み、溶かし込んでしまうのだろう。

さようなら。また会う日まで。……きっと、そういう日が来るなんて、夢にも思えないんだけどさ。

三・暗雲

詳しい事情は知らない。ただ、この世に生まれてくることを祝福されない命なんてごまんとあることは俺でもわかる。

それくらいのことにはわかるから、だからこそ。俺はその時『セックスしてもんは相気持ちの良いもんなんだろうな』と思ったんだ。

学園祭のライブに、俺達の親が見に来る事になっていたことを俺は、というか全員

が当日、出番の直前になって初めて知った。当然言い出さずは百合神先生な訳だが、一番ノリノリで周囲を巻き込んでいったのは俺の母親だった。

俺を産んだ母親は俺を産んですぐ夫、つまり俺の父親にあたる人と一緒に事故で死んだという。今の母親は産みの母親の妹で、一族のお荷物、面汚し、ゴミクズ……まあ、色々な呼び方で蔑まれてきた人だった。ちなみに当時付き合っていて、籍も破れかぶれに入れてしまった男は借金だけを残して東京湾に沈められたとか何とか。まあ要はそういうこと、らしい。そんな奴と付き合っていたお袋の状況も、お察し。という奴だ。そんなお袋がお袋の弟——俺の伯父——の手引きを受け、まだ産まれて間もなかった俺を抱き実家を飛び出したことでお袋は俺の母親になった。

俺がこの事情を知ったのはつい先月のこと。知ったばかりで、まだ何となく飲み込めない部分だとか知れてない部分もあったりする。するが、でも、こういう事情があったからこそ、恐らく、いや、絶対。お袋は俺の夢を否定せずにくれて、そして女手一つ、水商売で金を稼いでくれているのだ。

そんなお袋が敬一郎や絵梨の、そして瑞穂の両親達に会っていき、そして学園祭に来る様に説得をしていったという。

幼稚園の頃からの付き合いだっただ敬一郎の親はまだ余裕だったが、絵梨の母親とは

折り合いが悪いもんで苦勞したとか、ライブ後に聞いた。というか母親は来なかった訳なのだが。

それでも父親の方が、『惚れた弱み』とかいう訳の分からない理屈をつけて来てくれた。

「うるせー。くせーんだよジジイ！」

絵梨の方はそんな悪態を吐いたりしていたが、まんざらでもない様子だった。

敬一郎の方は親子間にできた溝、というものがこの時は上手くはまらなかつたか、会話は続かず、気まずい空気ではあった。それでも、来ただけマシだ。そう。……来ただけでも、マシだ。

「きっと、忙しかったんやろなあ」

笑顔で瑞穂を励ます様にお袋は言うが、それは本当に御為倒(おためごか)し、というか、要するに励ましているつもり、という状態に他ならない感じの声かけだった。

「……ええ。きっと、そうだと思います」

瑞穂も笑っていた。その後すぐに後ろを向いたら、顔が下がった。

そして五秒後だ。顔を上げると、やっぱり瑞穂は微笑むのだ。

「楽しかったですね。今までで、一番楽しかったです。隆君も、楽しかったですよね？」

四・雷鳴

瑞穂が留年した理由。気管支の障害。繰り返される発作。一番酷いのが去年の夏の始めの方。梅雨明け頃。生死の境をさまよい続け、そして峠を越えた頃に宮ノ訪の病院で根治の為の手術ができる環境が整ったという。

学校に行けない正当な理由として認められるのだから、卒業しても良かったはずだった。でも、それを親が拒んだ。卒業しても既に受験は終わっていて、行ける高校がない。でも、それ以上に、

「あそこの親は子ども一人まともに高校にやりきらんといばい」

という悪評が立つ事の方を真っ先に恐れたのだという。

ロック、というジャンルで音楽をやっているからかどうかは知らないが、俺は世間体という奴が大嫌いだ。そして、それを真っ先に気にして瑞穂の為じゃなく自分たちの都合を優先する瑞穂の両親もが、許せなかった。

お袋が情報を集めていた。瑞穂は自分の家族の事を話そうとしなかった。聞くこと、決まって笑う。笑って、誤魔化した。しつこく聞いてしまうこともあったが、絵梨か、先生に止められた。

お袋が言う。あの子の母親は産みの母ではないと。でも父親は血の繋がりがあるのだ。なるほど俺と同じじゃないのか。だったら、大丈夫なんじゃないかと思った。

だって、うまくいっているじゃないか。俺とお袋の場合。事情をつい最近まで知らなかったけれど、でも知ってからでも今まで通り、言い合いとかつまねー喧嘩とかするんだけど、でもうまくいっている。

何故だ？　じゃあどうして瑞穂はうまくいかない。

お袋が言う。瑞穂を産んだ両親が離婚する時、どちらが瑞穂を引き取るか、という点で一番揉めたという。一体どちらが、

『瑞穂』(お荷物)を引き受けるか。という一点で。

揉めに揉めたという。父親に決まった。その時の父親の顔を瑞穂は忘れられないでいるのだと言う。お袋に直接言った。

「まるで、外れくじを引いたような顔でした」

その後、すぐに瑞穂は笑ったそうだ。そして、続けたそうだ。

「仕方が無いんです。私はお父さんとお母さん二人とも足を引っ張り続けながらここまで来ました。二人はやりたいことをずっと我慢し続ける人生を送ってきました。私はお荷物なんです。でも、それでも私は新しいお母さんと、そしてお父さんの家で暮らす事ができて、とっても幸せなんです。これを恨んだりしたら、罰(バチ)が当たります」

カラン。グラスの氷が立てる音一つ。

「子育てっちゅうんは、我慢なんかやないよ。……いや、我慢だってやっぱあったけどな。ありまくったけどな。……けど、ちゃうやん。そういうもんと、ちゃうやん……」

酒の入ったお袋の声は切なく聞こえて、俺は初めてこの気持ち、こういう感じを切ない、というのだと、知った。お袋が切ないと思ってるのか、それとも俺が切ないと思うから声が切なく聞こえたのか、それはどうでも良い事だが、俺の気持ちがその直後に怒りに変わってしまった事はどうでも良い事ではなかった。

胸は張り裂けそうだった。なんて月並みな表現だ。陳腐過ぎて吹き出しちまう。俺はそういうのを人一倍バカにするクチだった。でも、止められなかった。翌日の帰り道。降りしきる雨の中でついに瑞穂は俺に話してくれた。

瑞穂は新しい母親とうまく行かなかったのだ。いや、母親は、うまくいかせるつもりが端からなかったに違いない。

二人が初めて出会ったその時に出来るだけ印象を良くしようとして努めて笑顔で挨拶した瑞穂に対して、

「どうしてこんな鈍臭(ドンクサ)いのを引き受けてんのよ。とんだお荷物じゃない」
舌打ちまじりに発した発言がこれだ。

「仕方がないだろう。施設なんかに預けてみる。近所から何言われるか」

公務員っていう人種が全てこうだとは当然言わないし思わないが、吐き気がした。瑞穂は普段家でどんな風に過ごしているのか、扱われているのか、それを言わなかった。言わなくても、察しがつく。

「お母さん。今日の晩ご飯はポテトサラダを作りますね」

笑顔で瑞穂は母親に話しかける。でも、その母親から声が返って来る事は無い。それでも、明日も、明後日も、明々後日も、その次の日も、今日こそは何か変わるかもしれない。私が笑顔であれば、私が良い子であれば。それを積み重ねて何年も。……なんて滑稽なんだ！ 腕が震えだす。今こいつらを前にしたら、ワンパンで殺せそうな気がする。死んで当然だこいつら！ そんな俺を柔らかく包み込むようにして、俺の腕を抱きとめる瑞穂の顔が笑っている。

「大丈夫ですよ。隆君。今日はうまく行く気がするんです。お母さんの好きなポテトサラダ。今日はこの前よりずっと上手に作れます。お父さんも、好物の煮付けをきつと美味しく食べてくれます。旭(あきら)君も私に懐いてくれるんですよ！」

違うだろ？ そうじゃないだろ？ 違うだろう！ 問題はそこじゃないんだ。上手か下手じゃない。今の両親の実際の息子、旭だって、そうだろ？ もう立派に両親の洗脳に染まって、お前を目の敵にしているのを俺は知っているんだぞ？ もう無理なんだろ？ どうしてそうやって、笑っていられるんだよ。お前、その笑顔で誰を許す気

なんだよ……。

「隆君。だから。お願いです。お願いだから……」

瑞穂の声がする。優しい声。許されるような声。歌声に込められるような、あの時、ガーゴン姫って呼ばれるようになったきっかけの唄から、ずっと感じ続ける。聴いている、ただそれだけで、何もかも。そう、何でもが、許されるような、声。

——泣かないで、ください。

五・のち、豪雨。

その日の夜の事だった。季節は秋。思う以上に辺りが暗くなるのはあつという間で、そして唐突だった。瑞穂を送る、という名目ではあるが、実際のところは泣いてしまった俺が落ち着くまで時間を取らせたことの責任を取る、……という何だかかっこつけになるのだが、そういうことで俺は瑞穂の家まで付いていく事にした訳だ。そうしたら、偶然父親と家の目の前で出くわしてしまったのだ。

思えば最悪だったのは瑞穂からこの両親についての話を聞いたその当日であったことと、そして俺が傘を持ってきていなかったがために瑞穂の傘を俺が持って相合傘をしている、ということだった。相手が相手だ。別にその手のお説教が来る事はない

だろう。現になかった。だが、

「フン。母親そっくりじゃないか。あれだけ良い子ぶっておいて、やることはしっかりど……しているなんてなあ？」

俺がいるにも関わらず、そんなことを言ってくる事態になっちまったんだ。

「ち、違います！ 隆君はそういうんじゃない」

「じゃあ何なんだその相合傘は」

「これは……」

「俺が傘忘れたもんで強引に入れてもらってんすよ……」

もう、遠慮はいらないなって、そう思った。

「ほう？ 挨拶するより前にそんなケンカ腰に話しかけてくるなんて、どんな嫉妬されてきたかがよくわかるよ」

ほら。向こうだってその気だろ？ てめえの子ども一人幸せにしてやれない甲斐性なしだったのがよくわかるよ。

「つーか俺がいる目の前でよくそういうことが言えたもんすね」

「別に。君がどうい子なのかってのは知ってるんでね。有名人の君に、この子がどうい子なのか、親としては説明してやる必要があるだろう？」

それで俺に押し付けようってか？ 俺の体がゆっくりと前に動き出す。勢いをつけ、

そして殴りつけようとして、それができなかった。

「ダメです。隆君。……ダメです」

瑞穂が俺の体を抱きとめていた。雨に濡れることも厭わずに、傘を投げ捨て、全力で俺を抱きとめていた。体格差を考えると、これくらいしないと瑞穂は俺の歩みですら止められないのだ。

「何でだよ。離せよ。瑞穂」

「ダメです！」

瑞穂の腕に力が籠もっていくのが伝わる。

「あら、お似合いね。……ほんっと、よおくお似合いよ。あのインラン女に、よおーっく、似ているわぁ」

瑞穂の今の母親が、合流してきた。そしてその言葉に、その姿に。瑞穂の体が震えだした。

「お、おかつ、お帰りなさい。お母さん」

引きつった声、引きつった作り笑顔でどうにかこうにか引っぱりだした言葉。

「っーかさぁ。アンタ。もういい加減にしてくんない？ そーいう態度、アタシほんっとイヤなんのよ。そういうさ、『私は良い子でーす』ってた、い、どー！」

ヘラヘラと笑いながらこのババアがくっчаべる。どうにかしようとして、方向は

ズレにズレまくっちゃいたかもしれないけれど、それでも必死に足掻く瑞穂の気持ちなんて、途方もない程考えられちゃいなかった。

「もう無理して帰ってくる必要もないんじゃないか？」

父親の声は不思議と優しい響きにも感じられた。

「だってそうだろう？ 門限も守れないんじゃないか……」

俺は驚いて瑞穂を見る。それは初耳だった。瑞穂の顔が青ざめていく。

「おい」

「……ません」

俺にだけ聞こえる最後の否定の声。瑞穂は、俺の顔を見て、何かの逡巡を振り切るように俯いた顔を上げ、

「うちに、門限なんてありません……」

そう言った。今度は、どうにか俺一人には聞き取れた。

「ハッター、かよ……」

気持ちが悪く荒れてくる。だが父親のにやけた顔がまだ止まらない。

「いいや。この時間だ。八時だぞ？ 健全な中学生が帰るには遅すぎるだろう。まあでも皆まで言うな。わかっているさ。あの女に似たこいつのことだ。どこぞの不良に良い様に踊らされてよろしくやっていたんだろう？」

瑞穂の顔が下がる。違ふんです。口だけでそう言っているのが読み取れる。その違ふんです、は自分のことじゃなくて、たぶん、いや、絶対。俺の事。俺が不良じゃないんだって、こと。自分の事を優先しないで人の事ばかり許す人の良いバカだから。……だから。もう俺は切れていた。

「ふぎけんじゃねえー……」

手始めに父親の胸ぐらを掴み、家の塀に押し付ける。殴りはしない。こういう奴にそれをしたら、思うつぼだと思った。

反応が遅れた瑞穂が慌てて俺を止めようとして、失敗して、つまづいて、そして転んだ。でも、俺はそれを意に介することができないまま、叫んでいた。

「謝れ！ 今すぐに謝れ！」

胸ぐらを掴まれ、そしてもう百九十を越えた俺を見上げながら、それでも父親はにやけていた。

「どうして謝る必要がある？ 君はもう私に暴力を振るっている。これは立派な不良の行動じゃないか」

ふぎけるな！ 　ふぎけるな！ 　ふぎけるなこの野郎！

「ああそうだ！ 俺は不良だよ！ 俺は不良なんだよ。そっちじゃねえよ！ 娘に！ 瑞穂にだよこの野郎！」

興奮しているつもりはなかったけれど、妙に息が上がる。ゼエ、ゼエ。息が苦しい。「血の繋がってない親子なんぞ珍しくもなんともないさ。でも、それでも愛情もって育ててる親ってのはいるんだ。……しかもアンタ、繋がってんじゃねえかよ。繋がってんのに、どうして、何で、だよ……？　なあ、謝れよ。なあ！　瑞穂に、謝れ、よ……」

腕に、手に力が入らなくなってしまうって、瑞穂に、引きはがされる。

「謝って下さい！」

瑞穂は叫んだ。俺に向かって。父親でなく、俺に向かって。

「隆君、謝って下さい。二人に」

背中越しに聞こえる声。俺は信じられない気持ちがして、雨に濡れたコンクリートの上に尻餅をつくようにしてへたり込む。

「どう……して……？」

俺はそれしか言えなかった。

「隆君、早く、謝るんです！　早く」

「だからどうして！」

俺は信じられなかった。俺は瑞穂のために謝れと言ったんだ！　俺のために違うと言ってくれた瑞穂、お前のために俺は！　その気持ちを唐突に裏切って両親の側に

くなんて、信じられなかった。

「私の手術に、どれくらいお金がかかったか、隆君わかりますか？」

瑞穂の声は、穏やかさを取り戻していた。でも、顔に、表情に光を、今までのような雰囲気を感じる事が、できなかった。

「それは、少なくとも安い金額ではありませんでした。それを、二人は出してくれました。わかりますか。私のために、出してくれたんです。それは、間違いなく愛情だつて、わかりませんか？ 隆君」

それはきつと、というか絶対、世間体が理由だ……と言いたかったが、さっき叫んだので体が限界を迎えてしまったようだった。薬を吸い込むのに精一杯になって、それを言う事ができなかった。そしてそのまま、どういう訳か仕事をしていたはずのお袋が駆けつけて来て、朦朧とした頭のまま、俺は引き摺られるようにして帰っていく羽目になった。

「うちのバカ息子が、本当にご迷惑をおかけ致しました」

と母が深々と頭を下げているのを見ると、それだけは本当に申し訳なく思えた。

六・天気予報士

学校にいる間中雨は降り続けていた。今日は流石に傘を忘れたりはしなかった。そ

の雨は、不思議な事に部活が終わって家路につく頃にはもう傘をさす必要がないくらい
の勢いになっていた。これならさす必要もねえな。と俺が独り言を言うと、

「ダメです。隆君は傘をさしてください。私もそうしますから」

と瑞穂が話しかけてくるのだった。

「お前だけ勝手にそうしてろよ」

俺は瑞穂のことを気にしないで歩き出した。敬一郎と絵梨は、どういう訳か学園祭
の後から俺と一緒に帰らなくなった。どういふつもりかっなのはわかっている。全く、
余計なお節介なんだよ。ああ、ったくよ。

「あ、待ってください」

瑞穂が小走りで追いかけてくる。そしてつまずく。あっ、という声が聞こえてきて、
バランスを失った体を俺が支えた。

「ごめんなさい……。気をつけます」

反省したような、しゅんとした顔を見せながら反省の弁を述べる瑞穂を、やっぱり
見ていられないような気分になって俺はすぐにまた歩き出す。別に急いでいる訳では
ないが、歩幅の関係上、どうしても瑞穂のことを置いていってしまう。でも、それも
気にせずに歩く。

「ま、待って、ください。隆君」

どうしたって最終的には小走りになる瑞穂が、少しキツそうにしている、流石にどうかと思ひ、足を止めた。

「あの」

「何」

「……………」

「あんだよ。ハッキリ言えよ」

「ついつい急かしてしまう。」

「あの、ごめんなさい」

「何が」

特に謝られるようなことはされていない。つっけんどんに返す。

「でも、えっと、まず一週間近く学校を休ませてしまつて、本当に申し訳ないです……」

「別に、あれは俺も無理をし過ぎたつてだけだし。それにお前の方だつて、二日休んでるだろ」

「はい。でも、やっぱり隆君の方が……」

「別に俺は構わねえよ。それよかお前、その二日はしっかり休めたんだろうな」

俺は確認する様に問いかける。あの後、お袋から思い切り殴られ、怒鳴られた。ま

あ、当然の事だ。

「呼び出してくれたんは百合神先生の友人の方や。出張してた百合神先生にも迷惑かかってんねんからな！　しっかり感謝して謝っとけやこのポケ息子！」

という説教の最後をすっかりとっぷり頂いてから、俺は寝込み続けていた。勿論医者からも大説教ときたもんだ。めんどいことばかりだな。ギターにも触れさせてくれない。まったく、めんどいことばかりの世の中だ。

じゃあ、瑞穂はどうだろうか。聞かなくてもわかる。二人から、いや、旭まで入ってしまった三人からか。詰られた事だろう。散々に、苦しい言葉を浴びせられた事だろう。そしてそれでも、瑞穂は笑っていたことだろう。言われているその時はともかく、また五秒たったら瑞穂は笑うのだろう。……笑っていたのだろう。いたたまれない。とことんめんどいことばかりだ。つくづく、めんどいことばかりの世の中だ。

「隆君、今日は私を避けてます」

瑞穂が、俺の学ランの裾を引っ張りながら呟く。俺に伝えようとしているのか、それとも独り言なのか。めんどく思うから、頭を掻きながら、

「別に避けちゃいねえよ」

「本当ですか」

「ああ本当だよ」

「じゃあ何で今日一日私に向けて笑ってくれないんですか話しかけてくれないんですか部活だって私と先生が呼び止めなかったら逃げ出してサボっていたんじゃないんですか？ 今日の高君はいつもと違います。変です。大変(おおへん)です」

いつものゆったりした声とは真逆の、早口にまくしたてる瑞穂の口調。大変って何だ。勝手に言葉を創り出すなよ。

「別に変じゃねえ。大変(おおへん)でもねえ」

「本当ですか？」

「ああ。……ただ」

「ただ？」

瑞穂に裾を摘まれたまま、俺も瑞穂も歩みを止めていて、雨上がりの通学路、足下のタイルを見ると、不思議な感覚があった。まるで、二人きり、誰も人がいない田舎の歩道で時間が切り取られて、止まる事はないのに、ずっと時間が切り取られたまま、不安なままで、ふわふわとしたままで居続けるような。居心地の良く、そして気持ちの悪い感覚。瑞穂は俺の返答を待っている。これは、一種の賭けだとも思えた。一体どちらの？ それは多分、双方共に、だと俺は思った。

「この前……さ、あんなになって、お前にも散々迷惑かけちまって。……その、何だ……」

「私も、……あんなに酷い事を隆君には言ってしまった……。ずっと、謝ろうって……思っていました……」

瑞穂もぼつり、ぼつり、と声を落としていた。謝るようなこと、こいつは言っていないのに。

「お前の言っていることは、正しかった」

「……え？」

瑞穂の顔が上がって、またきよとんとする。

「百万とか、そんなくらいはするんだよな。多分、だけど」

「……はい。その他の、例えば入院費だったりとか、私が体を動かさなかった時期の食費だったりとか、そういうのを入れたら」

「つか、そもそも俺が家で飯食ったり風呂入ったりすることとか考えたら、さ」

「……はい。そうだと思います。もっと、かかっています」

瑞穂の声は、小さい。だけど、芯が通っているというか、強く心に突き刺さる。ああ、なんだろうな。このめんどい現実という奴は。そこについては、ほんっと、俺等は無力極まらない。どうしようも、ない。

「私、本当はわかっています」

瑞穂は少し大きな声で、俺を見上げながら言った。ずっと、笑顔だった。

「二人がどちらを引き取るのか、二人きりでは決められなくて。最後は私がどちらに付いていきたいのか、決める事になりました。……わかっていました。どっちを選んでも、選ばれた方は外れくじを引かされたって顔をするんだって。わかっていました。二人とも、表情が必死に訴えてました。」

『どうか、お荷物(瑞穂)がこっちを選びませんように！』って。

それで、ですね。私、お父さんを選びました。世間体が大事なお父さんだから。そして寺留実(じるみ)市の職員だから。収入が安定していて、そして貯金があることも知っていました。だから、……だから」

瑞穂は一度言葉を切った。俯いた顔から、表情が読み取れない。

傘がくるくると回って。そして傘が閉じられる。いつの間に、雨は完全に止んでいた。もう一度顔を上げた瑞穂の顔は穏やかだった。穏やかに、笑っていた。

「二人ともがそれぞれに不倫をしていましたから。だから慰謝料の支払いとかはないし、だからいつか手術ができるように宮ノ訪病院の環境が整った時、お父さんは必ず世間体を気にして私に手術を受けさせてくれるだろうなって。私わかっていたんですよ。……そして、実際にその通りになっちゃいました。……えへへ」

瑞穂が俺の裾から手を離して。一步、二歩、歩いていく。俺の先を、進んでいく。顔が見えなくても、笑っているのが、わかる。だって、いつもそういう風にする奴だ

から。わかる。

「私、猾い子なんです。お母さんの言う通り、『良い子のフリ』をして。でもちゃんと利用したんです。お父さんのこと。私、そんな、猾い子、なんですよ。なのに。それなのに。あの日、私本当は嬉しかったんです。隆君は私の為に怒ってくれました。私のために、自分が不良呼ばわりされるのも構わずに私に対して謝れよって、あの二人に言ってくれました。私、嬉しかった……。なのに、それなのに私……」

「もう良いよ。もう良い……。だから、だからさ……」

今度は俺が言っただけでやる番だと思った。瑞穂の後ろ、手を伸ばせば届く距離。言っただけでやめたかった。泣かないで、ほしい。って。

言えなかった。

これは家庭の事情って奴だ。触れない方が良い。そうなんだ。無力な俺が触れても、どうしようもないことなんだって。左手が右手を抑え込んで、右手の震えを、必死に誤魔化している。なっさけねえ。俺はどこまで情けないのだろう。ぼたっ、て、右手の甲に水滴が落ちて、また、雨が降ってきたのか、って思っ

「……あれ？」

俺は、どうして泣いているんだろ。何故、瑞穂じゃなくて、俺が泣いているんだろ。

「隆君。……ゲームをしましょう」

瑞穂の誘いを聞いた時、その突拍子のなさに、

「……へ？」

自分でもそんな素っ頓狂な声に、軽くビビった。俺、こんな声で返事とかすること、あるんだなって。

「いつも、敬一郎君と一緒にやっている遊びですよ。今日は、私とやりましょう」

瑞穂はもう、笑っていた。

足下の歩道は、丁度今いる所から、俺達シードルの面々が別れる丁度そこまで、決まった色のタイルが敷き詰められている。赤、白、黄色、青の四色。この四色で場所毎に様々な模様が作られている。白鷺、河、その道沿い一面に咲く菜の花による黄色の絨毯、工業地帯。寺留実(じるみ)市の特色を謳う様々な模様。そのタイルを、参加者がそれぞれに決まった順番で踏んで歩く。ただ、それだけのルール。

それが意外と難しく、小学校一年の頃から敬一郎とルールを決めて、やり始めて中々成功できないまま、義務教育の時期が過ぎようとしているのだ。

ちなみに難しい理由は、所々にあるマンホールの扱いだ。

「小学校低学年の時とか、マンホールは落ちて死ぬっていう設定だった」

俺がマンホールの上で一人ごちる。

「マンホールはセーフな。って、男の子が二人で言っていました。丁度私その時五年生でした」

瑞穂が俺の乗っているマンホールに標準を合わせたのを感じて俺は数歩後ろに下がる。当然、瑞穂が乗るスペースを確保する為だ。敬一郎が相手なら当然逆に前に寄る。

「いや俺のスペース無くなんじゃん？」

と敬一郎が言えば、

「良いじゃん。落ちて死ねよ」

と返すのが定番だった。絵梨は飽き飽きしている情景だっただろうから無視しながらも俺等に合わせてベンチに腰掛けていたり、別の何かに目を通したりしながら過ごしていて、そして瑞穂は笑った。

「よいっしょ！」

瑞穂が精一杯に飛んで、勢い余って俺にぶつかってくる。それを支えてあげて、

「ありがとうございます」

「良いって事よ」

っていうやり取りも、これで三回目を数えた。

例えば河の絵になっている箇所では赤色どこにあんだよって感じで、数が極端に減

る。時に見かける小さな花の描写くらいにしかその色はなく、そうでないならば必死にマンホールを頼る以外に生き残る術はない。

「私は定期的に発作を起こしちゃってましたから、ずっと見れていた訳じゃないですけど、でも二人がそうやっているのを見ていて、ああ、あの時のおっきい子が今日もやっているなーって、思っていました」

「へー。見てたんだな。俺は全然意識したことなかった」

「えへへ。だって私目立たない事には自信がありますから」

胸張るところかよ。小さく笑う。

「今は目立ちまくれて良かったじゃねーか。不良生徒の中村瑞穂さん？」

悪戯な笑みを浮かべて俺が言う。

「いいえ」

瑞穂が答える。芯の強い返事に俺が少しだけ気圧される。俺が見つめると瑞穂は笑って次の色、白。雲に飛び乗って、言った。

「今は南稜(なんりょう)高校合格目指して頑張っている立派な受験生ですよ。私達みーんな！」

ああ。そうだったなあ。

かなり自由な校風で、大きな軽音部があって。そして俺以外偏差値的に厳しい南稜

高校。全員で受かったら、そこでまたシールドル組んで音楽を続けよう、なんて言ったな。……そうだった。

「そうだった、な」

「ええ。そうです、よ」

決まり通り色を踏んで進む。いつしか俺達はまた無言になって。ゲームは後半戦に突入して、いつの間にか俺は笑っていて、そしてふと気付いた。瑞穂は俺が泣いていた事に、気付いたのかもしれないってこと。瑞穂は俺を笑わせようとしたんじゃないかなって。

そう思って改めて瑞穂を見てみると、瑞穂は笑っている。ああそうだ。笑っている。俺の目の前であんなにも傷付けられたまま、何も解決しちゃいない状況の中で、俺の目の前で、傷ついた瞬間を見た俺の目の前でまで、笑ってんだ。ちょっと待ってって、ここでようやく気付いた。

瑞穂をもうしばらく見つめていた。瑞穂と目が合う。笑いかけてくるけど、笑わない俺を見て、『ああ、気付かれちゃったなあ』と言いたげな表情で、困った顔で、瑞穂が笑った。

俺は、自分の近くに四色全て揃っている場所ですっと待っていた。瑞穂が近づくまで、ずっと足踏みをするみたいにして待った。

「隆君、前に進んでください」

「……………」

「置いてっちゃいますよ？」

「……………」

これは、賭けだと思った。次に出る言葉で、賭けをした。これは多分、いや、絶対、俺達二人共にとって、賭けだ。

「……………」

「……………」

二人ともが、何も言えない、言わないまままで、見つめ合っていた。何分そうしているのかわからなくなった頃に、ふふっ。瑞穂が吹き出した。

「なあ、瑞穂」

と俺が話しかけると、

「初めて出会った時の事、覚えてますか？」

瑞穂は質問をぶつけてきた。

「あ？ あー。『あんた以外に誰がいるってんだ』って奴だよな」

「ブブブー。違いますよ」

瑞穂の言葉は即答で、また裾を摘まれる。

「はあ？ んじゃいつなんだよ」

俺が答える。また、次の色を踏む。

「このゲームのルールの説明、私が一番最初に聞いたんです。敬一郎君よりも、先に私が」

瑞穂が次の色を踏む。俺の番だって、先に進んでくれて、目が合図を送ってきている。

「……それって、まさか」

大きな一歩で次の色に進む。その更に次の色の為に、稼いでおかないといけなかったからだ。

「そうですね。小学校の一年生歓迎遠足の帰り。二年生と組んで一緒に帰る時、隆君は一年生、私は」

瑞穂も精一杯に大きく踏み出して、そして着地と同時に、

「二年生、でした」

笑って、言った。

「当時から隆君は大きくて、この子は私よりも更に大きなお兄さんだって、思いました。それで、一年生だって、知って、そして更に私が面倒を見ることになっていて知った時には、本当にびっくりしちゃいました」

俺が一步進んで、また瑞穂が進む。

「マジ、か……」

当時の記憶が、蘇ってくる。二年生にしては小さいよなこいつ。そう思った相手が、今こうして目の前にいるなんて、なー。もう既に引越してしまっ、もしくは、いてもとうの昔に記憶から消えてなくなっているもんだと思っていた……。

「隆君は今もあんまり変わっていません」

瑞穂はびよん、と飛んで、言葉を続ける。

「年上の私に対して全然笑ってくれないし、あんたみたいなチビが二年生かよ、とか平気で言うてくるし、私の事お姉ちゃんとかって呼んでくれるかと思っていいたら、名前ですらも呼んでくれませんでしたからね。私、悔しかったです。あの時」

「えーっと、それは、すんませんでした」

頭を掻いて俺が謝ると、瑞穂はクス、と笑った。

「そしてこの遊びのルールを自慢気に私に解説してくれました。そして一緒に遊んでやっても良いけど？　って」

「うわ、上から……」

当時の俺やばいな……。これ相手が瑞穂じゃなかったら色々危なかった……。

「さすがに私も少し腹が立っちゃって、よし、絶対勝ってやるって、気合を入れて

臨みました。ああ、そうですね。マンホールは、乗ったら落ちて死ぬって、言っていました。……ひゅーん、て」

瑞穂は思い出し笑いをしながら、そう言った。踏み出す。その足は、敗着の一步、だ。その方向で進むと、間違いなく、詰む。

でも、待ったはなし。やり直しが効かないのが人生だ。そんな妙な上から姿勢の俺が作ったルール。もう、どうしようもない。

「隆君。私に近づく様に動いてくださいね」

珍しく、瑞穂が俺に指示を出した。驚いたけれど、それに従った。

空は夕焼け。もう、雨は降らないだろう。不思議な安堵が、あった。

「マンホールに頼らなくても、ここまで辿り着きました。あの時も」

「嘘だろ？」

それはない、と思った。瑞穂は笑って、

「はい。実際は何回も落ちたり手詰まりを起こしたりして死んでました。私達」

マンホールを避けながらも、とりあえず戻ってみたり、色の順番を変えたり、その地帯にない色は飛ばしたり。中々強引なルール変更をその場その場で繰り返して、俺達はここまで辿り着いたらしい。子どもの考えそうだった。いや、かつての俺なんだけ。

「けど、ここで私が詰まってしまったんです」

瑞穂が立っている場所は、白鷺が降り立つ菜の花畑の花の色。次が白でなければ、詰み。そして瑞穂の次の色は、青。この地点で言うなら空の、青。

「私、負けるの嫌だーって、そう思いました。きっと隆君は二年生に勝ったーって、喜んでしまうと思って、私は泣きそうでした」

俺は懸命に飛んだ。次の俺の色は黄。そして次は白。更に青と続く。ここでようやく瑞穂の意図に気付く。

「隆君。今度は私を助けてくださいね」

瑞穂が笑って、俺に向かって両腕を伸ばした。

思い出した。俺は、あの時、このゲームは二人揃って生き残らないといけないゲームなんだって言って。だって、勝ち負けを競うゲームじゃなかったから。どうにかしてあの二年生を、瑞穂を助けようとした。そして、彼女を抱きかかえて青に持っているようにしたんだ。そして、——失敗した。

見かけによらず体力も力もない俺は、彼女を支える事ができなかったのだ。見事に潰れて、その拍子に彼女の膝に擦り傷を作らせて、そして泣かせた。

「ルールをまた変えて進めば良いよ」

と彼女は泣きながらもそう言ったそうなのだが俺がそれを拒んだ。だって、二人揃

ってないといけないから。二人揃って、生き残らないと、願いは叶わないから。

「明日、天気になりますように」

瑞穂を抱きかかえて、先に白に俺が飛んで、瑞穂を青色の中に、空の中に降ろす。

「その願い、今度は叶えましょう」

瑞穂が笑った。ゴール地点は、もう目の前だった。

保育園に通っていた時から、謎が謎を呼ぶ不思議なお店があって、看板を見れば駄菓子屋。なのに、何故か自動ドアで、しかも店はガラス張り、何と云うか、風情もなけりや美的センスも無い。幼心にもこの店はへんてこりんだ、と誰もが思う。

もっとへんてこりんなのは、この店は駄菓子だけじゃなくて、バイクや原チャリも売られている。自転車はない。もはや何屋なのか相当理解に苦しむ。看板は駄菓子屋。でもバイクの店っぽい。あ。あと野菜とか酒も売ってる。飲酒運転は犯罪だということに。

そのお店は、国道の太い道路を渡る手前、右手側にある。俺はこの交差点を左に曲がる。敬一郎と絵梨は右に、そして、瑞穂だけはこの国道を渡って真っすぐ進んで家に帰っていく。この店は、このゲームのゴール地点を示す、昔から何も変わらない目印だった。店が見え始めてから先に難所はない。ここまでで詰んだり、飽きたりしてゲームをやめてしまうことがなければ、もうゴールは確約されたようなもので。

「明日は、晴れますね」

赤い花から、無機質なアスファルトへ飛び移った瑞穂が、言った。

「どうだか。こんな天気予報当てになりやしねーよ」

テレビのもっと当てになる天気予報曰く、明日も天気は下り坂なのだそうだ。思い出す。

「いいえ。きっと晴れます」

傘をあえて開いて、瑞穂が呟いた。それは何かのまじないみたいだと、俺は感じた。

「私、わかっていました」

唐突に切り出された話題に、俺はまた、

「……え？」

くらいのことしか返せなかった。

「新しいお母さんが私と仲良くしてはくれないだろうこと。それにお父さんが私を家の中で守ってはくれないだろうこと。私、ちゃんとわかっていました」

瑞穂は俺に背中を向けて言った。傘が邪魔で、背中から上が見えなくなってしまっている。

「私、わかっています。旭君と仲良くする事も、もう無理なんだって事」

瑞穂の声は続く。

「……………」

俺は、沈黙していた。

「でも！」

急に瑞穂は声を張り上げた。幸い、国道は車が走って行くだけで、歩行者の姿は俺達以外になかった。まるで田舎とはいえ、ちっとは拓けてきた場所だというのに、俺達だけが迷い込んでしまったみたいなお空間。少し面食らった形の俺は、まだ何も言葉を発する事ができないまま、瑞穂の言葉の続きを待つ格好になってしまった。

「明日は、晴れるんです。……隆君のお陰で、明日は、必ず晴れます。それで、良いんです。だから」

一呼吸の後、瑞穂が振り返る。

「また明日！ です」

笑顔で言うのと同時に、左側。俺が渡る方の信号が、青になった。

その信号を、俺は生返事だけしかできないままに、渡ってしまった。

でも渡ってすぐ、俺は瑞穂を見る。

傘が広がっていて、背中が見えない。顔が下がっているかどうかとも、わからない。

でも、たぶん、いや、絶対。そうだ。——信号は、赤。

国道の信号機を待つ瑞穂の傘。その傘が、——くるくる。くるくるくる——。

間に合え！ と心の中必死に叫んだ。その傘が回りきってしまったら。五秒経ってしまっただけならば。——クラクションと怒鳴り声が聞こえたけれど、気にしたりしない。気にする猶予なんて、どこにもありはしない！

瑞穂は、笑ってしまう。笑ってしまうんだ。悲しくて、どうしようもなくなくて、泣きたくてたまらなくて。でも嫌われたくなくて。好きでいてもらいたくて。そういう気持ちも、全部。隠れてしまうんだ。全部。

ああ、あの時叫んだあの言葉。私も、嫌いなんです！ あれは、絵梨に返したんだと、ずっと思っていた。だけど、違う。違った。あれは、

『そんな私が、私も、嫌いです！』だったんだ。ああ、俺は何てバカなんだ。今更気付くのかよ。今まで気付かないままにいたんだよ！ 待ってくれ。あつという間に息が切れる。歌う時には不思議と保つはずの息が、こういう時に限って保たないんだ。ああ、待ってくれないか。隠してしまうその前に、笑って、全部を許してしまう、その前に——。

隆、君……？ そんなびっくりして、声がつまったんだろう。そんな感じで、おっかなびっくりした瑞穂の声が、聞こえた。瑞穂の背中が、暖かい。目の前の、何を売っているのかよくわからない——看板を見る限りでは、多分駄菓子屋——お店のガラスに、俺達の姿が映っている。瑞穂の背中に、抱きついている、俺。抱きつかれている、瑞穂。

「え、えっと……」

瑞穂の困った声が聞こえた。目に、涙が浮かんでいるのが見えて、良かった。……間に合った。そう思った。

「ごめん。重いよな」

「え、は、……はい。ちょっと、だけ……。でも……！」

「でも？」

「もうちょっとだけ、こうしてもらいたい気も、します……」

マジかよ。と思う。というか、それは思うだけで留める事ができなくて、言葉として漏れてしまった。

「はい……。マジ、です……」

お前もお前で素直だな。でも、それよりも前に。

「良かった……」

「え？ 何がですか？」

瑞穂はそれが理解出来なかったみたいで、きよとんと俺に尋ねてきた。

「いいや。こっちの話だよ」

少し笑ってみせて、周囲に見せない様に、見られたりしないように瑞穂の傘をたぐり寄せて、俺は体を沈めていく。二人の背中を隠す様にして、相合傘が完成する。雨は完全に上がっていて、傘をさす二人の姿は浮いている。人が少しずつではあるけれど増えてきた。だけど、気になんてしない。

愛おしい、なんて言葉がわかったのは、これが初めてだった。俺は改めて、瑞穂の体に触れて、そして――。

七・手紙

――新しいアルバム、全て聴かせて頂きました。

「ありがとうございます」

――その中でも一番印象に残ったのは、月並みで申し訳ないんですが、やっぱりアルバムの表題にもなっている楽曲ですね。でもどうして天気予報士、なのでしよう。気象予報士、ではいけなかったのですか？

「あの唄は……、一種の手紙、ですかね。あ、タイトルにあるか」

——そうですね（笑）。

「うん。で、そう。瑞穂って変な癖があつて、あいつ、嫌な事とか悲しい事とかあつたら、五秒くらい下向いて、そしてすぐ顔を上げて笑うんです。最初見た時とか、ほんとこいつ何やってんだろって、そんな風に思ったんですよね。雨が降ってる時なんか、傘をくるくるって回してから顔を上げて笑う。一体何なんだろうって思つて聞いてみたら、自分ルールだつて、あいつ答えるんです。傘をくるくる回したら、もう全部受け入れられる世界になるつて。嫌な事を言った人は、きつとイライラすることがあつたんだ、と。もしかしたらもつと良い私にするために、私のために言つてくれたんだ。嫌な事をする人がいても、それもやっぱり同じ。傘をくるくるって回す方が正式で、屋内とか、晴れた日にも最初は一々傘を使ってやつていて、『あの子は変な子だ』と言われたりもしたそうです。そして、そんな生活を物心ついた頃からずっと、ずっと、続けていたんだそうです。当時の俺達は、気象予報士つて言葉を知らなかつたんです。

この唄は、そういう人に、そういう滑稽な奴に向けた手紙なんです。それも、俺が言いたい事を言うだけ、伝えるだけ、叫ぶだけの、そんな乱暴な手紙なんです」

——乱暴、という感じを私は全く感じられなかつたのですが、なるほど、そうだったんですね。

「ええ。乱暴ですよ。何せ、瑞穂はこの唄の背景を聞いていませんし、あと、このインタビューの仕事が俺が受けた事っていうか、話が来た事自体話してませんし(笑)」
——えー。じゃあうちの雑誌瑞穂さんが見たらビックリしちゃうんじゃないですか？

「ええ。だからうちには置きませんよ。この号だけは手に入らなかったってことにしてとぼけ続けます(笑)」

——え？　じゃあ送りますね？(にっこり)

「いやいや。すみません。処分しときますね」

——酷いなあ(笑)。うち結構シールドさんの特集組んでるじゃないですかあ。

「ええ。感謝しています。でもそれとこれとは話別っス。恥ずかしいじゃないですか。汲んでくださいよ、ね？」

ハ・かなう話

結果だけを話すと。それは本当にトントン拍子のサクセスストーリーに成り下がってしまふから、だから少し不本意に思う事がある。だからといって、もっと大きな苦難が待ち受けていれば良かったか、と問われたりしたら、それはノーだ。

正直言って、ギリギリだったんだ。

中学生だった俺達に、一般の部でコンクールに出場して何らかの賞を取らないと、高校で音楽を続けることを許さないと敬一郎や絵梨の両親から言われた事だとか——グランプリは即メジャーデビューっていうこともあって毎年熾烈な争いになるコンクールだ。実質、オーデイションだ——。

俺にとっては余裕だったが他の三人にとっては鬼門である南稜高校——ちなみに偏差値は五十だ——に全員揃って合格しなくちゃ音楽は続けられないだとか。

旭のこともあって瑞穂にはとっとと出て行ってほしい、とのたまう瑞穂の両親と、瑞穂の身の置き場についての問題だとか。

当然俺達だけじゃなくて、敬一郎や絵梨にだって問題があった。でもまあ、今はそれがメインじゃない訳で。だからそこら辺はまたの機会に本人達に聞きなつてことで、俺は話を切り上げるつもりだ。

どうにかこうにかこうした問題を全て解決して、高校の時に再度出場した同じコンクールでグランプリに輝き、俺達はデビュー、そしてありがたいことに様々な場所でライブができるような立場にまで成ることができた。

定期的には先生にはライブのチケットを送っている。中学生の時分、教師という立場の人間を先公と呼び捨てるのはデフォルトだったけれど、先生に対してだけは先生と呼べる。そんな先生だった。

だけど、何度誘っても、丁重な断りの手紙が届くだけだった。瑞穂の一回目の中三の時の担任にも送っていて、その先生は来てくれている。偶然だが、その先生は百合神先生のことを知っていて、

「あいつはねー。『人から受けた恩は一生忘れるな。人に与えた恩はすぐに忘れる』が金科玉条でね。……よっぽどのが無い限り、受け取ってはくれないわよ」

と俺達に話してくれた。

「別にあんたらのことが嫌いだって訳じゃないんだから、そんなしょぼくれた顔してんじゃないの」

とは言うものの、それはやはり寂しいと思った。

そんな先生だったが、ついに来てくれることになった。ついに俺達の気持ち、チケットを、受け取ってくれたのだ。そう伝える手紙には続きがあり、その内容はとうとうと、

「君達のファンだっという子を二人連れてくる。色々背負っている子達で、きっと君達を見て、話をするので救われたり、励まされたりすることがあると思うんだ」

というものだった。なるほど、よっぽどのこと、というのがあるのだろう。何か力に、なれるだろうか。

そんな風にして、そこから俺はずっとその子に何を話そうかを考え続けていた。

先生の手紙にはその子達の情報がびっしりと書き付けられていて、男の子は俺が。女の子は瑞穂達三人が合うかな、という結論に至った。

俺達も、先生にどうしても伝えたいことがあった。手紙ではなく、直接。

俺達、結婚します。

たったそれだけのこと。それだけのことを、俺達は伝えなかった。

当日、ライブ前にさっさとその報告をしてしまう予定だったが、先生達が見事に遅刻した。

「うん。……ゴールド免許っていうのは実に容易く取れるんだ。良いかい？ 免許取るだろ？ 八年間神棚にお供えしておく訳さ。その後もな？ ずうっと神棚んとこに供えて、ありがたやー。ありがたやーって唱えるとな？ 上げえことに、輝きだすんだぜ？」

サムズアップしながら垂れ流される言い訳が小学生レベルだ。流石先生だ。どうしよう。ライブ前だっていうのに俺、キレそう。

そんな俺を瑞穂がなだめながら、ライブ後に時間を取る約束をして、俺と先生達は別れた。

ライブ後、まずは約束通り俺は結構思い詰めたような顔をしている男の方の教え子

を外に連れ出した。女の子の方は、そのまま控え室の中、三人と和氣藹々やってくればそれで良い。先生は、この時間俺達の間に姿を現さなかった。二人を控え室に連れてきたら、厠行ってくらあ、と言い残して姿を消してしまった。

話をして、握手をして。先生の話聞いて。色々していたら、もう俺達も出て行かないといけなくなつて。かなりバタバタしてしまう。先生はさっさと二人を連れて帰ろうとして、それを、

「先生！ 待ってください」

瑞穂が呼び止めた。

「また後で良いだろ？」

先生が言うと、

「今じゃなくちゃダメなんです！ 私と隆君、結婚するんです！」

ドサクサ紛れに瑞穂は一息に言った。あーあ。こんな言い方、するつもりなかったのになあ。

「……そう、か。ん。まあ幸せになりなさい」

先生はそれだけを言って帰ろうとした。

「待てよ。俺達さ」

ドアの所、俺は立ちふさがるようにして先生を呼び止めた。

「俺達、さ。もう少ししたら子供も産まれるんです。落ち着いたら、結婚式もするつもりで。だから先生、その時には仲人、やってくれませんか」

「お願いします！」

間髪入れず、瑞穂も頭を下げる。

「お願いします！」

敬一郎が、頭を下げて、

「やったって下さい。先生！」

絵梨が、頭を下げた。

「……………」

先生はしばらく沈黙して、不意に俺の腕を引っ張り、瑞穂の傍に押しやる。そして、
「叶わないと、思っていたんだ」

そう言いながら、俺と瑞穂、二人をまとめて包容していた。

「そういう風にさ、教え子同士で好き合って、その結婚式で僕が仲人とかするの。きっと叶わないって思ってた。……だってさ、僕は。……僕は、そんなに皆が思う程、立派な教師でもなくて、人間でもないから。ああ……、生徒もいる前でみっともない。でも、叶うんだな。こんなことって……あるんだ……。嬉しいよ。本当に……嬉しい」

先生は俺達を抱きしめながら、泣いていた。そんな風に、喜んでくれると、まして、泣いてくれると思わなかったものだから、俺達まで、一緒に泣いていたんだ。

何だろう。先生の傍にいと本当にドラマみたいになっちまって。本当に不思議な気持ちになる。

「……あのー？ えっと、そろそろ、よろしいでしょうかー？」

定刻を過ぎていることを伝えるにきた会場スタッフが、抱き合い泣きじゃくる俺達を見てぽかーん、としていらっしやる。

「……………」

「……………」

「ま、まあ、良い落ちがついた、ってことで。それじゃな」

我に返った先生がそう言って軽く顔をハンカチで拭い部屋を出て行くとする。

「どーでも良いっすけどその顔今までん中で最っ高の汚さですわ」

隆君！ と瑞穂は俺を責めるが、

「お前もなー！」

程度の上では先生だってそう変わりはないなと思ったりもする。

時期的には、今年の冬の話だった。色々と酷いオチはついちまったが、先生に結婚の報告をして、その上で俺達は役場に婚約届を提出し、軽い会見なんかをしてから、宮ノ訪に戻ってきた。

厳密に言うと、入院先は宮ノ訪ではなくその隣の蒲原という場所だ。別に入院先は東京でも良かったのだけれども、丁度こっちに残って医者になった中学時代の友人がいて、しかも専門が産婦人科だったということもあったから、俺達はこちらを選んだ。「しかし 안타ら、これじゃできちゃった結婚とか言われても文句言えへんで」

と、一言一句全て同じくお袋と絵梨の両方に言われてしまった。まあ確かにそれはその通りなのだが。

一応、プロポーズをして、婚姻届を書いて、先生を除く周囲に報告をしていって、それら全てが一段落してから瑞穂の妊娠に気付いたので、順番としては間違っていない、というのはい訳か。

報告と言えば……瑞穂の両親、だが。結婚の報告の為に直接家に立ち寄った。これは、当然やらなければいけないことだと、逃げてはいけないことなのだとお互いに覚悟を決め合ってから、インターホンを押した。

「へえ。それで一々報告を？ ふうん」

「何も渡すものも言葉もないが、好きにすればいいさ」

という言葉だったので、

「ええ。俺達もこれで筋は通したってことで」

それだけを言って、早足に瑞穂の形跡のない実家を出て行った。

ま、端から期待はしていなかったさ。そう笑顔で言ってやってそのすぐ後、そんな俺の笑顔に答えようとした瑞穂が戻したことがきっかけで、妊娠に気付く、そんなドラマもあつたっけ。

まあとにかく……。俺はこのところに立て続いた諸々が頭の中を駆け巡り、雑然としてまとまらない。季節もいつの間にか夏の直前にまでなってしまうって、先生の教え子達ももう中三になっている。あまりの時間の流れの速さに、呆気にとられてしまう。

「隆君、今すぐぐく変なこと考えてます」

瑞穂からそんな指摘を受けてしまう。

「へ？ いやいや。俺今そんなこと考えてるように見えっか？」

瑞穂は黙って頷く。

「深刻そうな顔をしているかと思えば突然笑い出したり、泣きそうになってたり、すぐぐく変ですよ。疲れてませんか？ もし疲れてるんだったら無理しないで……」

こらこらこらこら。俺は言葉を挟んで瑞穂の発言を止める。

「お前以上に疲れる奴はいねーだろって。俺はもうホントに余裕だから。だからお前はゆっくりしている」

「本当ですか？」

と不安がる瑞穂を見て、俺もふと不安になる。瑞穂は体が弱いんだ。歌えるくらいにまで回復したとはいえ、体自体の弱いのは、変わらない。高校時代も、学年で一番欠席、早退の数が多かった。進級が危ぶまれるギリギリになってしまったこともあった。

そんな感じの体だから。医者からも妊娠、出産は勧められなかった。

「いざという時、その時は母体を優先するぞ」

蒲原の診療所、医者の人として勤務する友人は俺にだけ、ぼそりと伝えていた。ああ、本当にそんなことがあったら、いや、そこさえ突き抜けて、最悪の事態にまでなってしまうなら。もしも彼女が誰も手の届かぬ遠い所へ逝ってしまったら。それを考えると、不安で仕方が無かった。

「……大丈夫、さ。だから、お前は、な？」

瑞穂の体に布団をかけてやる中で、俺は笑顔を作り、呼びかけた。これくらいしか、俺に出来ることはないから。せめて、笑っているだけのことくらい、しよう。

「隆君が新しく作った唄、聴きました」

瑞穂が俺の方を顔だけで向いて、話しかけてくる。

「ん？ 新しい唄って、……いやいや、まさか。おい」

「ふふ。そのまさか、ですよ。隆君。私は隆君のことなら何でもお見通しなんですから」

その手には飴玉が握られている。不安に駆られて、

「そんなことが本当に起こってしまったら」

という思いに駆られて作ってしまった唄。あまりに恥ずかしくて人前には出せないなど思いながら、消せなかった唄だった。

「私も、です」

「え？」

やばいぞ、これは恥ずかしいぞ、と思いながら瑞穂の言葉を聞いていた俺は、少しだけ意外な声を発した。

「私も、隆君が大好きで。失いたくなくて。離れたくない。です。永遠、っていうのも、あったら良いなって、本当に思います。そして、それが有り得なくて、そして本当に、どちらかが先に……」

死んでしまう。消えてしまう。そんな言葉が続くのが嫌でたまらない！

「そんなのはずっと先の事だ！ ずっとずっとずっと！ もっと！ お互いにや

りたいこととかさ、そういうの、やり終わってさ。悔いの残らない人生になってから、……そうだろ？」

その怖さに押しつぶされそうになりながらも、俺は瑞穂に笑顔を向けようとして、少しだけ目を潤ませている。

「ええ。きつとそうですよ。……私、強くなったんですよ」

俺の目の辺りを拭いながら、瑞穂はまた、俺を許すように微笑んだ。その笑顔が臍げにさえ映ってしまった。俺は、ただただそれが儂く消えてしまわないように、それだけを願っていた。

「隆君は、本当に昔から変わらないですね……。昔から、本当に強くて、優しくくて」
瑞穂の手を握り、俺はその言葉を否定する。俺は強くないんだって。優しくなんか
ないんだって。今も、お前が消えないように、死なないようにって、そればかりを、
自分の為に祈ってるんだって。

瑞穂は、笑っていた。

「そうだ。隆君。あの手紙は私に向けて書かれていて、あの日の私を励ましたいって
思っている、って隆君は言っていましたね。でもそれは嘘です。天気予報士は隆君で、
隆君は自分に向かって手紙を書いたんです。私のためでなく、自分のため。でも、そ
れも嘘です。大嘘なんです」

瑞穂は体をゆっくりと起こして、続けた。

「本当はやっぱり私に向かって書いてるんです。どっちでもないよって顔をして、俺の為なんだって言ってるようですよ。……それが、隆君の優しさですから。私、隆君のこと何もかもお見通しなんです。ベッドの下を見ていただけますか？」

言われるがまま、俺は体を屈めてベッドの下を見る。そこには内緒にしていたはずの俺のインタビューが掲載された雑誌が置かれていた。

「嘘だろ……誰に聞いたんだよ」

思わず口を吐いて出た本音を訊だが、

「何度でも言いますが私、隆君のこと何もかもお見通しなんです。誰に聞かなくとも私に内緒で仕事していることくらい、私わかってますから」

ドヤ顔で勝ち誇る瑞穂だったが、不意に俺の手を掴み、

「田中君、いや、田中先生に何を言われたかも、わかっています。でも、体が強い私は、お母さんになるって気持ちで、強さで、この子を産みます。隆君。私は……」

「わかってるさ。……わかっている」

瑞穂の手を握りしめて、俺は目を瞑って思った。ああ全く。本当に、敵わない。

十・最後の話

産まれてくる子はでかかったりするんだろうか。四千グラム、いや、三千でも瑞穂の体には負担が大きいように思えて。

私、強くなったんですよ。

彼女のそんな言葉が、本当のことだと思えるのと同時に、不安が度々頭をもたげる。

「瑞穂が、手の届かない場所へ行ってしまうないだろうか」

聞き飽きる程に。

そんなんだから、そんな感じだから。

「……………」

「……………」

「あの……………」

「……………」

「隆君！」

「わ、うわ！ わっ…………え？ おう。…………何だ？」

「ずっとボーっとして。隆君疲れてます」

「い、いやぁ…………。そ、うか？」

「……………」

瑞穂の心配そうな目線。こんな羽目になっちまうんだ。俺が心配されてどうすんだ。そう思って俺は、

「あの時の逆パターンだな」

九年前の春に赴任して来て、俺達を引き合わせてくれた百合神先生が色々と高説垂れてる間のやり取りを思い出しながら瑞穂に話しかけた。

「え？ ……ああ！ そういえばそうですね」

瑞穂はその時のことを思い出したようで、笑顔でそう答えた。

「あの時は、あ、あの子の隣にいるんだ、私の事覚えていたりするのかな、とか。色々考え過ぎててポーってしちゃったりして。隆君のこと困らせたり、怒らせたりしちゃいました。えへへ」

「大した事ねえよ。つか、俺は物の見事って感じに忘れてて。悪かったなー、とか」「いえいえ。私はそれくらいで十分なんです。そんな悪いなんて思わないで……」

「くおーら」

かるーく睨んでみたりする。すぐに笑ってみたりする。

「お前は俺の中でどれだけでっかい存在なのかってさ。もう何回も言ってやったじゃねーか。また説明しなきゃいけないのか？」

「い、いえいえ！ ……いや！ 今のは説明されるのが嫌だって訳じゃなくてです

ね！」

「そんな必死の弁解が面白くて。

「……。ぷ。くくっ！」

「思わず笑う俺と。

「……。むう」

「思わず剥れる瑞穂。

「私の方が年上なんです。姉さん女房ですよ」

「悪かったって」

「そして愛おしくて。

俺は反省の言葉もそこそこに、瑞穂の側に座り、その胎内で居心地よく眠っているであろう存在に思いを馳せる。

公立の中学校だというのに留年を食らい、一年後輩である俺と同級生になっちまっ
て、そしてそこから立ち上がって、ここまで来た彼女と、俺達の一つの答えを見て、
あの時よりかは自然に俺達の唇は寄せ合わされた——。

「これからも、幸せでいような」

「はい。……。三人で、一緒に——」

了

「キノシタとわたし」

深街 ゆか

ようするに　きのうおぼえた英単語が
涙腺から　鼻孔から　こぼれおちて
つまり　蹟くとわかりきっている

(　cling / ground / development　)

わたしたち　親友になろう

あそび半分で　飾りつけるように

わたし　キノシタの机の上に砂のお城をつくる

キノシタは　わたしの口内に鳩をはなつ

いつか　不意に消える

砂のお城を　鳩がついばむ

それが故意だったとか事故だったとか

もう　手遅れの

指先でなぞる　とおあさの海

安全ピンで刺せば破裂するような足取りで、つぎの曲がり角を曲がったところにある八百屋の二階でキノシタは、食物を飲み込んだ身体を衣服に身を包んで暮らしている、ということのよろこびを誰かに与えて、親指ほどにつまらない皮膚の模様が約束に変わる、きのうキノシタとわたしは川沿いを歩いて、満月の夜に撮ったクラス写真についてはなした、月が水面でゆらゆらと揺れて、水鳥がそれをついばんで、もう原型をとどめてないのにどうしてそれとわかったのだろう、いつか迷いが平然と公道を歩くようになる前にいつか、柳の木がふたりを隠すところで、キノシタとわたしは前足で爪を立てて抱き合って、掴んで離してを何度も繰り返して後ろ足ではそれを恥じるように互いを見てみぬふりをして呼吸を整える、荒削りの安心を撫で回すふたつの、分裂した、液状の恋を映画で見たことがあってそれに憧れていた、ふたり、キノシタとわたしは思い出したようにさよならと言って、器用に前足と後ろ足をあやつって帰宅する

川沿いの草花をざわつかせたのは
雨が降ることをにおわせるような風、

The new day

崎本 智（6）

○紋章の竜

トーマス・エミリオンテは復活祭の朝に翼竜を見た。生まれて初めて見る翼竜はとも大きく、トーマスが想像していたスケールをはるかにしのぐものだった。翼竜と言ってもプテラノドンのような実在の生物ではなく、いまそこにあるのは1066年ノルマンディ公ウイリアムによるイングランド征服の物語に象徴として出てくるワイバーンのことである。

「バイユーのタペストリーに刺繍されてあったね」と父が言った。

「イングランド軍の軍旗として描かれていたわ」と母が言った。

翼竜の体には無数の“しわ”が刻まれており、星霜を重ねて生きてきたことがわかった。リヴァプールにある海岸沿いの曇り空の草原で僕たちはピクニックのようなどをしていた。家具屋がしまっていたから僕の新しい机を買うことができず、僕は浮かぬ顔をしていた。そんな顔をざらざらした舌でべろりとワイバーンはなめてくれ

た。

母は冷蔵庫のような無表情な顔をしていた。父は母のご機嫌をとるように昔訪れたさまざまな外国の話をはじめた。それらの目的のない旅に母も同行していたようで、母は灰色の荒れた海を瞳に映しながら、表情を崩して「懐かしいわね」と一言いった。僕は置いてけぼりにされたようだったが気が楽だった。白いフリスビーをクルマの中からとってきて、僕はワイバーンにじっくりと見せた。ワイバーンの瞳も母と同じくらい生彩をなくしたガラス玉のように虚無に支配されていた。瞼にはやはり年輪のような“しわ”が刻まれている。歳をとるといふことはこうやって灰色になっていくことを受けとめていくことなのだろうか。僕は薄墨色の雲に気分を圧迫されながらため息をついた。

ワイバーンがコウモリのような翼をばたばたさせて草原に塵芥が飛び散る。風を正面から受けた僕は面食らって仰向けに倒れこんでしまう。どこかで鈍いホルンの音が聞こえている。演奏者は音の調節をしているのだろうか。メロディを遠ざけたまま、ブオオオンと物質的な音だけが風にのって響きわたる。ワイバーンは不意に空へ飛び去ってしまう。

灰色の海に向かって白いフリスビーを投げた。ワイバーンが炎をふいてフリスビーを灼きつくしてしまうことを期待した。でもフリスビーは王冠のような水しぶきをわ

ずかに立てただけだった。僕は風にのった塵芥を吸い込んで長い咳をした。

○曜日感覚

まっさらのシャツにボンゴレ・ロツソのトマトソースがついてしまう日曜日、葉巻を吸い紫色の煙をくゆらせるのはドン・カルネデス、追跡はまだ始まったばかり。だれもがああな平和な午後を境にして、変ってしまった。カルネデスに関わったばかりに追跡者たちは幽閉され、競売はついにカルネデスの思うつぼになってしまう。

僕はある雨降りの日曜日、タクシーを止めようとしている韓国女性をみつける。彼女の名前はルーシー。愛称なのか本名なのかわからないけど話しかけた途端に、名前を名乗ってくれた。ルーシーは夜の街のひかりのなかを泳いでいく。車道をよこぎってみずたまりを踏み、ひかりが弾けていく。靴を汚すこともためらわない。僕はルーシーから次の競売場所の地図を手のひらに託される。ルーシーはまたひかりのなかへ消えていく。

水曜日の朝。都会にそびえる森を歩きだす。孤独になって最初から考え直したかっ

た。最善の手が僕にもまだあるのかを。それなのに、思いだすのは地図を受け取るときに触れたルーシーの肌の冷たさばかり。グレートマリオンパークは森閑とした空気を湛えている。けれど煙草を買うためにちょっと公園を出て、路地を歩くともう雑踏に追い付かれてしまう。僕はカルネデスの部下たちが周りにいないか確かめる。少しずつ朝は時間と共に街に溶けだしていく。薄い雲の隙間から朝焼けのひかりが街にこぼれていく。

くカルネデス氏、心不全のため死去。 「モナリザ」が夜の街に微笑むのを見ながら僕は電光掲示板にその文字をみつけた。クラクションの音がひっきりなしに聴こえる。耳障りな不快な音。テールランプが明滅しながら、限らない数の車が目の前を走り去っていく。カルネデスが死んだ。僕の唯一の目的はいま消えたのかもしれない。明日、再び日曜日の競売が始まるうとしているのに。

レヴィ氏が管理しているムトロリタという場所で競売は始まった。もうだれも時間を巻き戻すことはできない。鉄柵の扉は開かれて、世界の富豪たちはローマ神殿風に造られた建物のなかへ案内されていく。赫い絨毯が血で染まっていることに、馬鹿な金持ちたちはだれも気がつかない。ふいに僕は自分のシャツに赫いしみができている

ことに気が付いた。血？ いや、違うポンゴレ・ロツソのトマトソースが洗濯しても落ちなかったのだ。

○三つ折りの時間

三日月をあたまに宿らせた三人の紳士がそれぞれ南西と北東と南を向きながら、宵闇の公園に立ち尽くしていた。道標の矢印のようにそれぞれの方角を向いたまま、視線をそらすことはなかった。つい先週まで傀儡政権に対するデモがあちこちの通りで、止むことのない怒号と共に響いていた——この街で三人のように黙って何かを訴えるという光景は、偶然それを見てしまった人にとって異様だったのかもしれない。アリス・カニンガムは高校のチアリーディングの早朝練習の時に三日月の三人の紳士を見かけた。藍色の空が地平からうっすらと白んでくる時間に大人が呆然と立ち尽くしているなんて、宗教の儀式だろうかと頭の片隅で考えながら、次に見える風景に意識は攪拌されていき三人の紳士のことはすぐに忘れてしまっていた。

アリス・カニンガムの視線が離れたすぐ後で、南西を向いた紳士は人差し指を立てながら時計回りにまわって北を指した。その数秒後に北東を向いた紳士も人差し指を立てながら反時計回りに北を指した。南を向いていた紳士は兵隊のようにくるりと夕

ーンして、（それが時計回りだったか反時計回りだったかはあまりにも早すぎて分からなかった）、北を向いて両手をひろげた。次の瞬間、ハシボソミズナギドリの大群が公園の林から飛び立ち、三人の紳士を糞まみれにってしまった！

○窯あとの時代

葉脈をつたってながれてきた水滴が鼻に落ちて、古びた窯あとの傍で眠ることはもう止めに行こうと思った。雨上がりのヒュルトゲンの森の入り口によく虹がかかっていた。まだ新しい馬車の軌跡をたどって森の中を散策することがわたしにとって物事を思考するときの習慣だった。道標はなんでもよかったし、それにこだわることもなかった。気まぐれにみつけたこのあばら家の窯あとを気に入っていて、訪れたのは今回が初めてではない。

姪のクラリッサを今度連れてきてもいいと思っていた。この森は比較的最近まで陶器が焼かれていたのだから。陶器の破片があちこちに散らばっていた。体内の時間がいつもよりも正常にながれているような気がしてここでは一層眠たくなることが多かったから、何かの目的でそこに置かれた平たい石の上に身体を横にして眠ることが

あった。春の森はまだ寒く、起きると肌が土のように冷たいことがあった。こんなところで眠るのはよくない——そう自分に言い聞かせながら膜がはったような森の空気にため息を混ぜる。

そこへ一息に夜が訪れるように大きなロープがあたまからかけられる。綿ビロードの柔らかい生地が肌になじんだ。目の前にいる少女が被せてくれた。少女をみつめているはずなのに老婆をみつめているような気がした。背丈は小さいのにそれは遠近法によってゆがめられていて本当はわたしの倍の身長を持っているように思えた。視界が鮮明になっていく途中その顔は誰かに似ている気がした。

「ヒュルトゲンの森に魔女が住んでいたとしたら、第二次大戦の時にはどうしていたんですか」

わたしの口を借りてわたしではない誰かが質問を投げかけたような気がした。暖かい沈黙がながれて、それから夕立が降り始めた。太陽は雲の隙間から顔を出しているのか、やけに明るい雨だった。沈黙を守ったまま、少女は窓の向こうの木枝に飛んでやがて翳になり、ひかりになって虹になったのかもしれない。

小さな虫が平たい石の上を這っていて、片目だけでそれをみつめながらわたしは過去に遡っていくような感覚に見舞われた。淡い意識のなかでそんな愚かなことを考えながら虫の歩行を眺めていた。けれどあの水滴が鼻がしらをうったから、もはやここに留まるべきでもないだろうとわたしは決意する。穴の開いた屋根から青空が見える。腐植土の冷たい匂いが漂ってきた。とうぜん六十年前の戦争で使われた火薬の匂いはその森から消滅していた。慰霊碑を訪れたこともあったけれど、それは何かを象徴することはあるにせよ、新しい意味は何も生み出さないことは明らかで刹那にわたしの印象からは消えていった。あばら家はすでに蔓にからまれ針葉樹林の枝におおわれて、もう森の一部と化していた。けれども水の出どころはつかめない。

あのととき、鼻のあたりに落ちてきたのは屋根伝いの雨漏りの水であろうはずなのに、意識がはつきりとしなないままにわたしはそれを葉脈の太い線をつたってながれてきた時間を超えた水ではないかと予感した。根拠もないまま辺りを見回してみても、やはりそれらしい大きな葉っぱはみられない。魔女も昔のまま生きることができれば、よかったのに。

○脈拍

銃口がエレノアの背中押し付けられたとき、岸に帆船が漂着した合図として鐘楼が鳴り響いた。その船に手紙があるかどうかエレノアはそわそわしながら、強盗の幼馴染におかかって「ワインでも飲まない？」と声をかけてみた。グスタフ・ムーデオは昨日から何もかもが上手くいかなかった。いや、生まれてから上手くことが運んだ試しなどないのかもしれない。昨日、旅行者向けの雑貨店で強盗をしようとしたのに激しい腹痛に見舞われて結局、トイレを借りただけで、店の金に手をつけることはできなかった。

グスタフも幼馴染のエレノアから金を巻き上げることなんかはしたくない。ただ、この町から一刻も早く出なければならぬ理由から、強盗の相手をえり好みしている場合ではなかった。偶然、選んだ家がまさか幼馴染が結婚して立てた新居だったなんてことになるうとは、覆面をしてもエレノアはクスクスと笑いだして、すべてを冗談のような空気に変えてしまえばよかった。グスタフは仕方なく荷造り用のロープでエレノアの両手を後ろ手にしばって、古美術商の叔父から買った小銃を背中に押し付けた。エレノアは殺されるかもしれないとは全く思わなかった。

「銃を向けられて恐くないと思ったのは今日が初めてかもしれないわ」

「どうしてお前がここにいるんだ。なぜいつもじゃまをする？」

「意識している人間は目の前に現れやすいものかもしれない」

「馬鹿なことを言う。俺はお前に未練など少しも持っていない」

「あの村で子どもといえば、あなたとわたしぐらいしかいなかったから学校に行くまではいつも遊んでいたわね。いまでも土をいじるとあの時の幼い記憶がよみがえってくる」

「しゃべるのはもうよししてくれ。俺は未来のことを考えているんだ。過去のつまらない、金にならない話は嫌いだ」

「時間の向かう先は過去にあるのかもしれないわ。むしろ潜り抜けてきたのは幾つもの分岐点を持つ未来の方」

「お前のそういう話し方、昔から苦手なんだよ」

「わたしは手紙を待っているの。昔、約束した手紙がやってこないかっていつも期待の連続。船が岸についたら手紙を積んでいないか確認をしているのよ。外国で絵を書いて暮らせるようになったら、いつか僕の家を招待するって言ってくれた幼馴染がいたの。その子から手紙が来ないかなって過去とも未来ともつかない時間を眺めながら、手紙を待ち続けているの」

「……絵はもうやめたんだよ……古い傷に塩を塗り込むのはよししてくれ」

「いま、目の前にいる強盗はわたしの知っている人ではないはずだわ。だってこんな

ことしなくたってあの人は世界と向き合う方法がキャンパスを通してわかっているはずだもの。……もうわたしも話すのには飽きたわ」

銃声が響いてテーブルの上にあったワイン瓶が粉々に砕けた。血よりも鮮やかな緋色が絨毯を同色に染めながら円状にひろがっていく。時が止まるような心地がした。

○水車

やがて草木が枯れていくような秋の農場を舞台にする物語を、どこかで聞いた記憶があつてそれを誰に聞いても腑に落ちるものがなく、小アジアを旅してわたしは蕭条たる土地をいくつも巡り歩いていた。石に刻まれた物語。演じつづけられて継承された物語。布を縫い合わせてつくられた物語。わたしはありとあらゆる物を読みふけり、夜も眠らずにただ、やがて草木が枯れていくような秋の農場を舞台にする物語を探し求めた。

堀の深い顔をした少女が籠をあたまにのせて、硬いパンのようなものを売っていた。わたしは穴のあいた鞆から上手く財布をとりだして、銀貨を渡した。暴落した銀貨の価値はこのような田舎にも伝わっていたが少女は嫌な顔をせず、食べ物に分けてくれた。山羊の乳も買いませんか？ と少女がわたしに尋ねてきて、わたしはまた銀貨と

それを交換してもらった。道端の石に腰を下ろした少女は同じように山羊の乳と一緒にパンを食べ始めて、真昼の乾いた風に髪をなびかせて眩しいような表情をしていた。

「ここらあたりには古い城壁が見られるけど、これは城跡か何かなのかい」

砂を孕んだ風がまた強く吹き始める。風が止むと同時に少女は口をひらいた。

「あたしもよく知らないんですが、農場のようです。寂しい感じのところですけど」少女はスカーフを上着の胸ポケットから取り出して口を覆い隠した。

目鼻立ちはとても端整で美しかった。やがて草木が枯れていくような秋の農場を舞台にする物語に彼女のような登場人物がいたような気さえする。枯草が大風に吹き上がり、城壁のなかにいるであろう動物たちの声がわずかに聞こえた。

「あれは何の声？」

遠景にこころを奪われたような表情をして沈黙を含んだ声で彼女は応えた。

「羊でしょう。羊飼いが何十頭も連れて山から下りてきたんでしょ」

地平の彼方から吹いた風が山羊の鳴き声を届かせて、わたしは風をまともに着けてしまい情けなくも尻もちをついてしまった。何も無い平原が回るように鮮やかに世界が反転してわたしはふいに巨大な雲の真下に白い人工的な小山をみつけることができた。どうしてそれに気が付かなかったのか。小川の水がその白い山に集中するように敷かれており、わたしは暫くそれをみつめることを止めなかった。ふいに風景が微か

に滲む。……

臉から水が溢れてくる。充溢された何かがわたしの血をめぐっているのかもしれない。……幼いころに亡くなった姉がわたしの前を通っていくような気がした。……少女はわたしの変化に気が付いていたけれど目を細めたきり、やはり風に髪をなびかせてそれを結わえようとせよと小さく歌を歌っていた。……わたしはその異国の言葉に姉が持っていたさまじまな小物を思い出して泣いた。やがて風は止み、白い小山が陽炎のなかに揺らめいていて、あれも近づけば離れていく幻覚かもしれないと、四方から聞こえる水の音に耳を澄ませた。

○鏡

ヘンドリック・モンフォールはモンフォール家の嫡男であり、世間ではスパスパス・パンティック王子と仇名されていた。スパンティックという言葉はこのあたりのある意味を示す方言で、ヘンドリックが街を通るたびに家々は窓をしめて、家長はスパスパス・パンティック、スパスパス・パンティック……と言ひ、子供たちもスパスパス・パンティック、九官鳥もスパスパス・パンティックと言つてどつと笑いあつていた。隣国で暮らして、貴族会議の席が一席空いたため召集され、この土地に来たヘンドリ

ックにとってスパスパスパンティックという言葉の意味には見当もつかず、いつも不愉快な思いをしていた。

「お母様……お恥ずかしいのですがスパスパスパンティックというのはいかなる意味を持つのでしょうか」

と実母にヘンドリックが尋ねると、母のマリアIIモンフォールはたまらずジャガイモのスープを吐き出してテーブルをびしょびしょにして、イヒイヒイヒイヒイヒイって床に笑い転げてしまった。実母の無様な姿を見るに堪えないヘンドリックは馬に乗って、ハーメス家を訪れた。ここには婚約者たるジョアンが暮らしていて、ヘンドリックは昵懇の仲にある召使たちを通して屋敷に入り、鏡の前にやってきた。そういえば家を出る前に身だしなみを整えてくるのを忘れてしまったから、せめて鏡ぐらいはと自分で自分の顔を覗き込むとそれはまさにスパスパスパンティックと形容したくなるようなみずからの顔と向き合う羽目になる。頬が赤らんだ成人したキノピオのような自分の顔が映り、わずかでも自分の顔に自信をもっていたのを情けなく思った。階上ではピアノソナタが演奏されていておそらくそれはジョアンが弾いているにちがいない。スパスパスバ……。こんなところだったらスパスパスバ……。まずまずスパスパスパンティックと呼ばれてしまうとヘンドリックは焦り、抜き足差し足で元来た道を引き返す。そのとき、ピアノの演奏が急に止まり、階段をせわしく

下りてくる音がする。ジョアンがやってくる。ジョアンがやってくる。気が付いたらヘンドリックはスパスパスパスパスという言葉が無意識にこぼれていて、ジョアンの前でスパスパスパンティックと叫んでしまった。ジョアンは大笑いをしながらヘンドリックの顔に平手打ちを食らわせて、ヘンドリックは卒倒してしまふ。ジョアンは自室に連れていき、ヘンドリックの顔に鳥の面をかぶせた。以来、十年、ヘンドリックはジョアンの屋敷で鳥として暮らし、再び面をとったときに、二人の婚礼の儀式は何のひやかしもなく厳粛に執り行われた。

○野放図な部屋

髪型はマッシュボブの女王がセシル・ハート。その静かな部屋に一人佇んでいて誰もいないのに一言つぶやいては、窓から入ってくる陽光をにらんで眩しそうに眉をよせた。何を映じているのか分からない、スロウな瞳の動き。部屋に入ってきたばかりの少年は一瞬戸惑った。例のバンドマンたちは隣室で食事をとっていた。部屋の中央にあるトーストとベーコンエッグにミルクがのっていたから、この女にも同じメニューが用意されていた。

「あなたがスピードなのかしら」とセシルは少年の方を一瞥もせず声かけた。太

陽の光は明るい場所をつくと同時にはっきりと暗闇を作り出していった。彼女はその光と暗闇の境界に位置して椅子に腰を下ろしていた。

「わかりません。でも僕は自分の意思でここに来ることができました」

「戦争はもう終わりそうかしら。わたしは部屋から出ないから分からないわ」

「ここに来る途中小さな雑貨屋に寄ったんですが『ミルトビューン』紙にはもう『終結の兆し』という見出しがありました」

「あの新聞社はあたまのいかれた連中ばかりだから信じない方がいいわ」

「国境で戦闘は行われているんですよね」

「自然国境説なんて馬鹿げているわ。大時代な考え方……」

セシル・ハートはグラスにオレンジジュースを注いでくれた。乱暴に注がれる橙色の液体。

透明なグラスの中に閉じ込められた果汁。どこかで似たような光景を見たことがある気がした。ステレオから流れるピアノジャズの音量はかなり小さかった。やがて隣室のバンドマンたちも、それぞれの楽器の音階の調整に入る。隣の部屋からは間の抜けた音が聴こえてくる。彼女は部屋のカーテンをさっと閉めた。

クシヤクシヤにまるめられた原稿用紙がいくつか屑籠に捨てられていて、彼女が何か文章を書いていることが推測された。窓の外には大きな灰色の雲が横たわっていて

パレードの長い列が続いている。それは滑稽にしか見えなかった。また既視感が押し寄せてくる。貝殻の破片のような真昼の月が雲の間から見えて、セシルにそれを伝えても彼女はそれを見ずに、瞳をゆっくりと動かしながら細部にわたって彼女の記憶している亡命していた国のことを話しつつづける。オレンジジュースを飲みほした少年は紙ナプキンできれいに拭き、セシルに返した。彼女は窓辺に置いてあった色とりどりのルピナスにグラスで水をやった後、ワインをついで半分ほど飲み干した。

とつぜん世界に色彩が溢れるような音楽が隣室から奏でられてそれは一定のメロディによらず、おたがいの音と音——くんずほぐれつ——の素晴らしい残酷さに満ちた氾濫。バンドマンたちのセクションは静かな部屋の二人のこと置き去りにして忘れ去るような陽気さに満ちて、それはある種の優しさにも感じられた。騒音が蹂躪する空間で彼女の声を聞き取れるのはスピードと呼ばれた少年だけだったろう。どんな盗聴器にも拾えない微かな皮膚の呼吸のようなその声が耳殻のなかに入り込んでいく。それは痕跡を残さないここにしかない会話だった。

彼女は亡命していた国で起きたさまざまな出来事を話していくうちに少し落ち着いたのか姿勢を崩して、目を閉じた。この部屋に戻ってくるのではないことはセシルもわかっていたのかもしれない。ルピナスの水やりは誰がやるのだらう。通りのパレードはすっかり終わり、喧噪のあとの静かな胸騒ぎが誰かの気分として宿り始めるこ

ろ街灯や商店のネオンが灯されていく。憂色を隠せない少年は静かに自分の名前を名乗り、礼をして、セシルを抱き、その部屋を去る。ルピナスは月明かりに照らされて小さく窓辺で鎮座していた。

(了)

子供の頃には

Pさん

子供の頃には、集中力を最大限に發揮して時間をなるべく長く感じられるようにすれば主観的一生の長さがあるいは変わるのではないかという幼稚な考えを抱いていた。学校のトイレのタイルを凝と眺めるのが癖になって、ここは正方形であるとか、ここは六方最密充填構造であるとか、しかし便器の右上のここだけは欠けているとか、周期の問題で壁際の最後が半端に切れてしまっているだとかいうのをいちいち発見していった、思えばピタゴラスなどはそういう精神に沈潜する孤独な時間を持っていたのではないか。そのような瞬間にしか三平方の定理は思い浮かばなかったであろう。ピタゴラス自身の生涯については幾説があるが、広く見るとそれはピタゴラスが興じた教団全体としての活動が主であり、その前に個人の力は霞む。一生の長さを使った数学的設問としては「ディオファントスの墓碑銘」が有名である。ディオファントスは「6分の1が少年期、12分の1が青年期であり、その後には人生の7分の1が経って結婚し、結婚して5年で子供に恵まれた。ところがその子はディオファントスの一生の半分しか生きずに世を去った。自分の子を失って4年後にディオファントスも

亡くなった」と自身の墓に銘じた。その問題が書かれていた、小学館の『学習百科事典』「数学」の巻には、出典不明の幾何学の設問とどうかパズルが載っていた。ある三角形を方眼をもとに分解して、寄せ木細工のように再構成すると、それぞれの辺の長さは同一であるのに、一マス分だけ空白が生まれ、つまり面積が増えるというものだ。

以上二つを頭の中で組み合わせると、「パズルのように分解し再構成された人生には、あるいは余剰が生まれ、全体量が増えるかもしれない」となるではないか。これは今の自分が適及的に考えたことで、そこまで頭の回らなかった子供の頃には、しかしカセットテープデッキを人力で遅回しにするという技術は持ち合わせていた。カセットを入れるのはフタにカセットを差し込んでからなので普通に考えるとカセットが読み込まれている時にフタを開けることは出来ない。そこをフタをほんの少し上に動かすことによってフタを開けながらにしてカセットを読み込むことに私は成功した。変形し白く変色したプラスチックのツメをよそに、あらゆる方向から歯車と細い棒が幾条も伸びてカセットを籠絡するさまを見た時の私の感懐は性欲そのものに近い。憎らしいことにフタを閉めていることを認識しなければ再生が始まらないのでフタの一番根元にあるフタが閉まっていることを確認するスイッチをつまようじですっと刺しておく。再生している最中にテープを回す為の棒を指でおさえるとZARD

の「揺れる想い」のスピードが変わっていく。少しおさえると声が少しだけ低くなり、強くおさえると右手中指と人差し指の皮膚が白くなり回転させる力がかかって痛くなるが音は聞き取れないくらい低い声になっておもしろい、度を過ぎるとデッキの方が「停止している」と認識してしまつてカセットは歯車と細い棒から解放されてしまう。この磁気テープに封入されている時間は、私の指の力で如何様にも変化させられる。時間という概念をこのような体験をもとに物質的に理解したのだったろうがそれでは一倍速以上のスピードは得られないので早送りしながらにして指をおさえてみるとという暴挙に出たのが最後、その遊びはしなくなつた。

子供の頃にはジブリ作品の中で唯一良さがわからなかつた「紅の豚」も今はエンディングテーマの良さだけはわかつた。詳しい歌詞は **JASRAC** が恐いので載せられませんが、歌詞にしては長いモノログのあとに、最後の「そうだね」という語が置かれることによって、対話者は聞き手もしくはそれに近い位置にいるのではなく歌詞の中に仮想的に置かれているということが一瞬で了解される。この一瞬は時間である。それでも、その良さといつてもたかだかノスタルジアの良さでしかない。ここでは日本の過去とヨーロッパの過去が同一視されている。以下はウィキペディア「ノスタルジア」の項の関連項目である。

レトロ

ベル・エポック：思潮としての「古き良き時代」

南洋幻想

昭和ノスタルジー：昭和全般における戦前、及び高度経済成長期の日本の社会・文化を懐かしむ感情

大正ロマン（大正浪漫）

オスタルギー（独：Ostalgie）：東西ドイツ統合後西側の市場経済に順応しきれない旧東ドイツ国民の間に広まった造語

ユーゴノスタルギヤ（セルビア・クロアチア語：Jugonostalgiya）：多民族が共存していた社会主義時代のユーゴスラビアに対する懐古感情を表す造語

サウダージ（ポ：Saudade）

エバーグリーン

失われた世代（英：Lost Generation）

ラヂオノスタルジア（札幌ラヂオ放送）：北海道札幌市にあるコミュニティFM局。昔の懐かしい音楽を中心に番組が構成されている

フォークロア（Folklore）

四面楚歌

(四面楚歌……?)

つまり今の私の信条からすると、時間は叙述する傍から変質してその時そのものではなくなる。かつてあった全方向的な情報が全てセピアという一次元情報に回収されるそのセピアを見たいがためだけに過去を見るのであるとすれば、過去とは何と貧しいものになってしまふことか、というのは基本姿勢であるがあまり排斥的であるのも良くないと思つて例えば今録音したラジオを聞いていてしみつたれた加藤登紀子のライブ情報が流れて来ても飛ばさずに聞いたりするようにはなつた。

今ここにある空間全てが過去そのものであるという感じに急に包まれるのはデジヤヴだ。過去とは現在であるか過去であるかを問わずその感情自体を指すものらしい。私は金色の和毛が生えたようなフワフワの上着のことを考えると様々な感情が噴出するがそれとその上着それ自体とは関係がない。時計のほとんどが電波時計になることによつて、間違つた時間を指し示す権利が時計から失われた。活字が凸版印刷でなくなつたことによつて、指先で文字そのものの形を読み取つていた盲人が読む権利を失つた。書肆山田という出版社のシリーズ「りぶるどるしおる」の新刊が長いこと凸版印刷だつたのを止めてオフセット印刷になつていた。印刷の存在感は減じておらず、

さすが限界まで凸版に拘ってきた出版社だと思った。

何が言いたいのかというと、感情である過去と堅固な過去があるということだ。だが感情を感情として見るのならばそれ以下のものでもなかるうということだ。感情は疾く流れ去る。それは丁度「今」と指し示せるのと同じ時間だけ存在して、それ以上のスパンを持たない。「今」には幾何学的時間で見るといくつかの範囲がある。痛覚が消えるまでの数秒間、短期記憶が消え去る数十秒間、風が扉を軋ませ我に返る数十分間、夜が全てを押し流し人間の健全さを保つ二十四時間、季節の記憶に甦される数ヶ月間、流行語がその効力をなくす数年間、同時代として括ることが出来る数十年間、一つの技術史に生活様式を統括される百年間、人類の限界である数億年間とある中で、一つの感情が保つのはせいぜい数十分ほどのもので、それ以上持続していると見えるのはある源から断続的に湧出するからだ。問題はこのような時間に關する述語を弄しながら説くその対象も時間だということだ。時間時間時間。時間時間時間時間、時間時間時間。アクセントを一拍としリズムミカルに言えばこれは俳句として通用する。厳密に見れば違うのかもしれないが、字余りなどの権限を根回しも使って最大限活用すればあるいは承認されるのではないか。季語はどこにあるか？ 時間こそがそれ自体季節であるから季語だ。季語のみで構成された俳句などもあって良いのではないかと思うが、本題に戻すと、子供の頃には迷路を描くのにハマっていた。完全に二次元上

の函に壁を描き足していくタイプではなく、路が立体交差をする2.5次元のものだ。無計画に描くので最後の方に足された路は全ての奥を潜りどこに行ったのか描いた人間にしかわからない。つまり他人に向けて描いたものではなくもっぱら自分のためだ。ゲーム機を使うことを禁じられていたので自分が無限に遊べる卓上のゲームを作り出すつもりだったが、少なくともスタートゴール間をなるべく長く、その他の分岐を少な目にするという配慮もなかったため膨大な面積と路の稠密さの割には解き始めるとすぐに終わってしまう。友達にバーチャボーイを買ったと騒ぐ人間がいた。正式名称は「バーチャルボーイ」であったが我々の間ではバーチャボーイで通っていた。両眼の視差を利用してデカい眼鏡のような空間にごくわずかな立体を生じさせる。見た目からして両親に「目が悪くなりそう」という印象を与えることに配慮して、目に一番負荷がすくない赤色の光のみを使用している。友達が何ヶ月分のお小遣いを親から前借りしたかは知らない。きっとお年玉も返上してのことだろう。ずいぶんもったいぶられた末にやっとその人間の家に上がりやらせてもらったゲームは外枠となる背景とブロックの間にわずかに凹凸の差があるテトリスだった。機体を起動させるときに、立体感をどの程度付けるか、両眼の視差をどの程度にするか調整する作業がある。数時間続けると痩せ我慢も通用しなくなるほどゲーム酔いをする。バーチャボーイを買ったのはその家だけだった。そのバーチャボーイが今どのハードオフに並べ

られているか知らないが、それから遙かに時間が下って私は「立体の本」と呼び習わしていたステレオグラムの本を親に買ってもらった。現在では類似する本が多数あるが、先駆は小学館の「CGステレオグラム」のシリーズだ。うちには二巻まであったが、アマゾンで詳細を見ると写真家として赤瀬川原平が参加していたとは。三巻では横尾忠則まで参加している。たしかに思い出してみるとぱっと見なんだかわからないような写真がたくさんあった。当時は今のようにステレオグラムは眼が良くなる、イラストを当てる、などというわかりやすいキャッチはなくいったい何に使える技術なのかはつきりしないところがあった。ところでそのキャッチの目が良くなるなんていうのはウソもいところだ。眼のピント調整機能のことを言いたいのだろうがステレオグラムを見る際必要なのは眼位の自力での調整であって、ピントは常に本の位置にある。かといってそのとき飛びついた美術家達にステレオグラムが何らかの足しになったのか、ならないのか、わからない。否定的な意味を込めたのではなく純粹にわからないのでわからない。その「立体の本」を後生大事というのがびったりなくらいどこにでも持ち歩いていた。そこには空間があり、空間がそのまま自分に従って移動するというのは時間だ。ある日家族で博物館に行ってそのときも持ち歩いていたらそこでなくした。泣き明かした。

子供の頃にはスポーツはしなかった。

子供の頃には文学に全く興味がなかった。空想癖はあったが子供の想像力は文学によつては刺激されない。それよりも子供の頃は宮崎駿だ。リコーダーは好きでクラスでは二番目に上手だとされていた。得意技は「コンドルは飛んでいく」だが何でも吹くことが出来た。こないだの高尾山のオフ会でも道中おみやげで買ったおもちゃの笛をずっと吹いていて仲間から白い目で見られた。中指の第二関節くらいの長さもない竹の筒に表に四つ、裏に二つの穴が開いているだけなのに1オクターブきっかりの音程を取ることが出来た。正確な演奏法を書いた紙は買うときに名前を彫ってそのままお渡しするといつてほかさされた。今は笛を吹きながら坂道を歩いていけば1フレージもしないうちに息が上がってしまうが子供の頃にはそうではなかった、というわけではなくそんなことはしなかったがあるいは可能であったかもしれない。というより何をすると苦しいとか、苦しいと止めなければならぬとかいったことを子供は顧慮しない。苦痛など閑却してひたすらやるだけだ。マラソンは得意だった。好きなだけで早いわけではなかった。だからスポーツはするとは言えない。

子供の頃には……

子供の頃には

子供の頃には鼠径ヘルニアやら結膜炎やら蕁麻疹やらいろんな病気をやった。入院中のある日病院の地下に行くとき暗い廊下があるだけで遠くに非常灯の緑の光がリノ

リウムに反射して建物の地下というものを初めて直観した。今なら死の気配とか何とか普遍的な名前を付けてもいいところだがあれは自分にとっては地下でありエレベーターに記された「B2」の「B」の意味だった。しかしすぐ側に迫る土の気配であつた。地上へ帰るとそこは明るい世界でオセロを買って遊んだがオセロは全く巧くならなかつた。そのときの自分の指よりも小さいプラスチックの粒がどう見ても安っぽく製造時のバリが指に痛く刺さつた。そればかりではないにしてもオセロは苦手だつたがボードゲーム自体が苦手だつた。人生ゲームは楽しい場の象徴であつたが楽しい場でなければ楽しいゲームにはならないと一人で人生ゲームをやつたときに思った。このミニ人生ゲームにおいても車にのせる爪楊枝ほどの人頭は天辺にプラスチックのバリがあつた。

少年期とはつまるところプラスチックのバリなのである。

(おわり)

自
由
投
稿

ディスタンスノミズ他二篇

蜜江田初朗

ディスタンスノミズ

ほとんど永遠に近い煌めき、それが天使からの贈り物ですよと告げられたら、まるで巖かに受け取ろうとするでしょう。

切ない音楽の中に無数の粒子が流れている。

真ん中を軽やかに一本の水流がはしっている。透明な水流。命の水とは別なのです。別の、世界の構成にかかわる水。

それは例えば人間と動物でもいいし、

死者と生きる者たちでもいいし、男と女でもいいし、

とにかくあなたは水流の手前に立っていて、

あの方は水流の奥に立っている。

最後の距離を抱えて生きるとは、
なかなか埋め尽くすことのできない、

〈二〉が〈一〉になれないその間の距離のことを、
つまり水流を軸にしてこことあそこを分けなさい、という意味なのです。

その水はもしかしたら、命を飛躍させるための、

悦びへと接続させるための、そんな源なのかもしれない。

例えば私は死んだおじいちゃんが遺した一冊の本を手取る、

それをきっかけとして、死んだおじいちゃんとの対話は回復されるかもしれない。

この水流の立場を壊してもいい、

なんて考える人は、生涯の中でたった一人か二人。

その時には〈私〉は瓦解し、

考えもしなかったことが起こるのでしょう、あなたの身に。

nowhere

焼けただれていく、皮膚が、

紅く、紅く引き裂かれていく。

熱さの中で鉄の屑が死ぬ。

白いマグカップをテーブルに置いたら、

地が響き渡り、

声が震え、

形という形は壊れ、

すぐにすぐにすぐにすぐに

最たるものとして戯れの中に没する。

間違いとは何だったか
アンニユイとは何だったか
なんでもなんでも分からなくなつて、
放置されて、
不毛になつて、
塵と化して、

そして

茶色の光景

茶色の光景が見えたんです。
それは、よくできた焼き物のようであり、漆喰で塗り固められた、
ところどころ褶曲もあって、波打つような力強さを感じさせる。
でもそれだけなんです。
意味とか、エネルギーとか、

実はそんなものはひとつも無く、
それはどこまでも
無味乾燥なものであった。

茶色の光景は

おそろく人の心にすっと侵入し

あらかた

全てを食いつくすかのように

悲しいものや虚しいものを

思い出させる。

茶色の光景が見えたら

あなたのその生にも陰りが見えて、

僕らは、

僕らは漸く終わりをを見る。

「あじさい泥棒」

る

六月のおぐらの中で花咲くことが色褪せている、と見えないミツバチらが羽音をたてながら相談しているのだ、もっと近く、それが愛じゃないだなんて誰が言ったの？ 女はそういってタバコの火を消した、暴力的に、もっと暴力的に花咲くべきなのだ、と、女がドアを勢いよく閉めたときにそのことに気付く、例えば、あなたと関係をもったことがわたくしと、あなたの隠された過去との、ひとつの約束として、花咲くように

計算されつくした数式の答えのようにベッドに横たわる女の尻の肉に、一匹の蠅がとまっている、まだ死んでいない、と呟くわたくしの口からミツバチらが溢れ出して、ベッドを

覆い隠してしまふ、まだ死んでいない、ピンク色の舌に噛み付くと悲鳴のような嬌声をあげる、まだ死んでいない、ミツバチらが女の穴に蠢いている、まだ死んでいない、あの六月の花を摘むように、指先が雨露に湿る

六月の雨の中で、女の尻の肉にとまる一匹の蠅だけが秘密を帯びている、まだ死んでいない、そう呟いて、女に肉を押し付ける、暴力的に？ そう暴力的に花咲くべきなのだ、と、飛び去った蠅の軌道を目で追う、生命だ、と、嘆息をして、雨のおごたらしく降る外を見つめる、まだ死んでいない、女は規則的に嬌声をあげる、まだ死んでいない、ミツバチらはとっくに息絶えている、まだ死んでいない、もっと暴力的に花咲くべきなのだ、まだ死んでいない、あの六月の花を摘むように、

まだ死んでいない、指先が雨露に湿る、まだ
死んでいない、けれど、あの六月の花を盗ん
だのは誰？ と、寝返りを打つ、あなた、と
、わたくしは、確かに、減少している

小鹿を産む

両手にスーパーマーケットのビニール袋をぶら下げた、小太り、中年の女性が雨宿りに入ったバスの待合室の中で小鹿を産む。生まれたと同時に小鹿は神の生誕であるかのごとく光り出して、あたりも一面その光に包まれたとき、近くの公園で骨折した左手をかばいながら木に結びつけた縄跳びを跳んでいる女の子が着地したと同時に小鹿を産む。縄をまわしている女の子も一緒に跳んでいた女の子も驚いてしまつてあれよあれよのうち小鹿を産む。その一部始終を車の窓から見ていた主婦は幼稚園に子供を送る途中に、ビーチボーイズじゃなくて嵐をかけてよ、と言われて小鹿を産む。光が増していく。保母さんは子供と小鹿を託されて途方にくれたまま平日にも関わらず家で寝ている彼氏が、昨晚旅行の計画を立てている途中に、俺たち何処にも行けないよな、と言ったことを思い出して小鹿を産む。出勤途中のOLが空から降りてきた光を見つめて、綺麗ね、と呟いて小鹿を生む。光は氾濫する。

そうして氾濫した光の中で小鹿たちは雨にもかかわらず微かな風をかき分けて風上を目指す。やわらかに光を伴った毛をなびかせて、草食動物のおだやかな目ですれ違ふ人たち全てを見下すように、光に包み込んで、小鹿たちは行進をやめない。包み

込まれた人々は小鹿を産む。一点に集中していく、小鹿が産まれていく、日本中のあらゆる女の胎内から、そして風上を目指す。一点に集中していく。光は収斂をはじめ

やがて始まりの風に辿り着いたものたちから順番に光の粒となり空へと還っていく。ある一点から、光は限界を超え、光の粒子になって、雪が逆さまに降るように、空へと還っていく。

つゆの日

る

あじさいさん、綺麗な

羽が生えてしまいましたね

わだかまることもなく

溶けていく

二つのシンプルな氷みたいに

透きとおるだけの

午後でした

あじさいさん、綺麗な

歌であらうと思いますよ

感傷的なだけのギターと

全然本質的じゃない声で

ただただ

漂うだけが

お似合いの

そして振り向きざまに

綺麗な

満開の星空

分かち合ったのは

だれのため？

そんなふう

に問う口をすすぐためだけに

通り過ぎた

きらめきのよう

なつゆの日

あじさいさん、綺麗な

羽が生えてしまいましたね

わだかまることもなく

溶けていく

二つのシンプルな氷みたいに

透きとおるだけの

午後でした

あじさいさん、綺麗な

歌であろうと思いますよ

感傷的なだけのギターと

全然本質的じゃない声で

ただただ

漂うだけが

お似合いの

そして振り向きざまに

綺麗な

満開の星空

分かち合ったのは

だれのため？

そんなふう

問う口をすすぐためだけに

通り過ぎた

きらめきのよう

つゆの日

あじさいさん、綺麗な

羽が生えてしまいましたね

わだかまることもなく

溶けていく

二つのシンプルな氷みたいに

透きとおるだけの

午後でした

あじさいさん、綺麗な

歌であろうと思えますよ
感傷的なだけのギターと
全然本質的じゃない声で
ただただ
漂うだけが
お似合いの

そして振り向きざまに

綺麗な

満開の星空

分かち合ったのは

だれのため？

そんなふう

に問う口をすすぐためだけに

通り過ぎた

きらめきのよう

昔々、あるところに、それはそれは綺麗なお姫様がいました。

お姫様は子供のころから、たくさんの人に愛され、すすくと成長し、やがて年頃になると、隣の国の王子様と結婚することになりました。

お姫様はいずれこの国を継がなくてはなりませんので、お二人の結婚は、二つの国を友好的にするために、お姫様の国を守るために、とても大切なことでした。

隣の国の王子はとても優しく、穏やかな瞳を持った青年でした。

王子はお姫様に言いました。

「これから、二人仲良く暮らしましょう。あなたを心から大切にします」

お姫様は潤んだ瞳で答えます。

「わたくしもあなたを心から愛します。そしてお世継ぎを早く授かりますように」

お二人の結婚は、お姫様の両親である、国王様、お妃様だけでなく、国中の人々が祝福しました。

お二人の結婚式には、たくさんの人々がお祝いに駆けつけました。

「なんてお綺麗なお姿なんでしょう」

「とてもお優しいそうなお二人。なんて素敵なんでしょう」

「早く可愛いお子様に恵まれますように」

「早く立派なお世継ぎに恵まれますように」

国中の人々がそう願っていました。

王子とお姫様はとても仲が良く、いつも一緒にいました。お互いのことを思いやり、いつも相手に優しくしていました。

ところが、三年、五年経っても、待望のお世継ぎはなかなか授かりませんでした。

「お父様も母様も、お世継ぎを心待ちにしています」

「早く、お二人を安心させてあげなくてはね」

二人はそう言い合いました。

ところが、それからさらに数年が経っても、お子様には恵まれません。お二人がご結婚されて、すでに十年近くの年月が流れていました。

違う国に嫁いでいったお姫様の妹様は、すでに二人の王子様に恵まれています。お姫様はだんだん心配になってきました。

「お医者様に相談したほうがいいのかしら」

お姫様はお医者様にかかることにしました。でも、特に悪いところは見つかりませ

ん。規則正しい生活をして、ゆったりお過ごしください、といつも同じことばかり話すお医者様を、お姫様はだんだん信用できなくなっていました。

「街のはずれに住む女が、子供をなかなか授かれない人に、特別な薬を売っているらしい。一度呼んでみようか」

王子がそう言うと、お姫様は藁にもすがる思いで、その女を城に呼びつけました。女は黒ずくめの服を着込み、しゃがれた声でお姫様に薬を差し出しました。

「この薬を飲めば効果てきめん。すぐにでも玉のように可愛らしいお子様を授かるでしょう」

お姫様はすぐさまその薬を買いました。するとどうでしょう。お姫様のお肌や、髪が、これまで以上に輝いて、前よりずっと若々しく、いきいきとしてきました。

お姫様は嬉しくなって、王子様に言いました。
「前よりもとっても綺麗になった気がします」

「僕もそう思うよ。きっとこれで、すぐに子供も授かれるはずだ」

ところが、それでもなかなかお世継ぎは授かりません。

お姫様は、黒ずくめの女から、またもなお、薬を買い続けます。

「もっとたくさん飲んだほうが、効果が出ると思っていますわ」

お姫様は女に、たくさんのお金を渡します。そして不思議なことに、その薬を飲めば飲むほど、お姫様は綺麗になっていくようでした。

けれども、お姫様と王子様の結婚を祝福した国民たちは、次第にお姫様の悪口を言うようになりました。

「あんなにお金を使って。すっかりお姫様は変わってしまった」

「綺麗になって私たち国民のことをすっかり忘れてしまわれたんだわ」

実際に、お姫様と王子様は、黒ずくめの女から買う薬を飲んだり、いかがわしい食事療法をすることに夢中で、あまり国民の前に姿を現していませんでした。

国王様もお姫様もすっかり年を取ってしまいました。

「世継ぎもできず、この国の将来はどうなってしまうのだろう」

国王様は、弱った体のため息を漏らします。

「国王様、隣の国に嫁いだ娘には、王子が二人います。養子を迎えればよいのです」

お姫様が懸命に励まします。

「ああ、養子を迎えれば、世継ぎ問題は解決する。しかし、子供を作ることにはばかり懸命になったあの夫婦に、この国の将来を任せるのはとても心配だ。いかがわしい薬ばかり飲んで、ちっとも国民のことを考えておらん」

国王様はさめざめと涙を流します。

連
載

書かれなかつた寓話 第三回

日居月諸

新田からの返事は来なかった。一週間、二週間と待っても音沙汰はない。返信を待つ間、部員と話をするたびに新田の消息を訊ねることは欠かさなかった。しかし、誰もオンラインになつたところを見ていないという。DMを送る以前から音沙汰がなかったのだから、当然の結果かもしれない。それにしても、これほど音信が途絶えることはこれまででなかった。お互いに私生活があるのだから多少連絡のやり取りが遅れるのは今までであったものの、後々になれば当人が姿を見せることで事情は明らかになつたのだ。

twitter 文芸部にはかつて、ある時ふと姿を消した部員がいた。それまで事もなげにTwitterやスカイプでやり取りを交わしていたのに、なんの断りもなくアカウントを削除し、こちらからの連絡を一切遮断してしまつたのだ。当時は、突然の事に対する戸惑いと、彼に対して信頼を寄せていた故の憤懣があつたが、今となっては無事かどうかだけが気になりとなっている。あるいは、それなりの悩みがあつてそうした手段を採つたのだらうから、相談に乗れなかつた悔いも残っている。

新田に対しても頭に浮かぶのは心配だった。もっとも、頭の片隅では彼の本性への疑いも兆し始めている。この男は紗江が文芸部にコンタクトを取ってきたのを知り、追及の手を逃れるために一時姿を消しているのではないかと、と。

とはいえ、状況証拠を材料に考えを巡らせれば、すぐに有り得ないとわかる話だった。突然現れた女のことを話したのは、大瀬良一人である。頻繁にオンラインになっている彼には真っ先に新田の消息を訊ねた。この年長の部員は、わだかまりがあると思いき二人が直接会って話すべきだというスタンスを取っている。これが変わらない限りは、諍いの当事者と会ったのならその旨を陸山にも話してくれるだろう。そして、今後の対応を協議しようとしてくるはずだ。仮に詳しい事情を知ったためにそのスタンスが変わったところで、やはり一旦は第三者に話を持ちかける案が頭にのぼるだろう。人間のスタンスを変えてしまうほどの大掛かりな事情は、一人で受け止めるには手に余るものだ。それこそ、陸山が大瀬良に相談した時のように。

紗江とコンタクトを取った他の部員が、内密に新田に事情を知らせたという可能性もある。が、ツイッターを見る限り部員と紗江はフォローを交わし合っていない。スカイプの交友リストを見ることは出来ないが、こちらも疑う必要はないだろう。まず、隠し立てをするメリットがない。訊ね人が現れなくなっただと、紗江は追及の手を止めないだろう。それを耐えてまで、ネット上の親交があるとはいえ私生活につい

ては他人も同様の人間を守る義理がない。

そして、追及の手から逃れたところでメリットがないのは、新田自身が一番わかっているはずだ。そもそも、顔を合わせたくない人間をモデルにした小説を書いておいて、何故今更逃げるといふのか。

DMの送受信履歴を見ながら、陸山は一通りの反証を終えた。新田に送ったメッセージの下には、紗江とのやり取りが記されている。気付けば、一か月近くの時間が経過している。反証を終えたところで、疑問は消えない。新田は何故、姿を消しているのか。

じれったささえ覚える拮抗状態の中で、半ば投げだすように思った。ただの偶然かもしれないじゃないか、と。つまり、新田はネットに顔を出す暇もないほど私生活で多忙に見舞われており、そこにたまたま紗江がやってきただけであって、失踪と来訪の間に関連はないのだ。それこそ、現在二人が現実で出会っている様子は見られないように。現実で出会っているなら、こちらに話かけては来ないだろう。

にもかかわらず、なぜそこには必然性があるように思ってしまうのだろうか？ 確証がないにもかかわらず、部員が姿を消した理由を部外者に求めてしまうのだろうか？ 陸山は暗闇の中にある原因を探り続けていた。原因などないのかもしれないが、原因がなければ安心しないのが人間と言うものである。なぜ新田は **twitter** 文芸部にやっ

てきて、昔なじみの女をモデルにした小説を書いたのか。なぜ紗江はそれを見つけてしまったのか。なぜ新田はあたかも小説で採用した手法をなぞるように自分を消すという態度を採り続けているのか。そして、なぜ自分は彼らに巻き込まれてしまったのか。

子どものような問答を繰り返しながら、陸山の念頭には偶然が連鎖すればいつしか必然になってしまうのではないか、という考えが浮かび始めていた。また、ネットさえなければこんなことは有り得なかったのではないか、とも考えていた。ネットさえなければ二人とは出会わなかっただろう。もしかしたら何らかのきっかけで会っていた可能性もありうるが、ここまでの抵抗は感じなかっただろう。自分と無関係ないざこざに巻き込まれるのは面倒ではあるが、ある程度仕方がない事である、なぜなら彼らと関係を持つことを選びとったのは自分であるのだから、ちやうど契約書に書かれている注意事項のように、初めから折り込まなくてはならない責任だったのである、と。現実の人間関係は、その解決に尽力しなければ最悪自らの命さえ断念しかねない。それに対して、ネットでの人間関係のいざこざは、最悪一切を遮断してしまっても命までは取られない。心に呵責が残るとはいえ、他のコミュニティに移ることも可能であるし、何より現実世界には影響が残らないという保証が付いている。

本来なら繋ぎえなかった関係を、ネットは容易くつなぎ合わせてしまう。それはつま

り、偶然を必然に仕立て上げてしまうということではないだろうか？ もちろん、そうした考えは思いつきに過ぎなかった。その推論は明確な裏付けがないゆえに、仮説どころか駄々をこねているようなものだ。

しかし、目の前で起きているいざこざならともかく、遠い場所で起こったいざこざをわざわざこちらの目の前にまで差し出されて、お前にも責任はあるのだ、と言われても手に余るとしか答えようのない現状に至ってみれば、何度でも全てのつながりはこじつけに過ぎなかったのだという可能性にすがってしまわざるを得ない。新田の失踪と、紗江の来訪の間には因果関係がない。新田が文芸部にやってきたことも気まぐれであり、自分の姿を消滅させた小説を書いたことには何の意味付けもされていない。ましてや小説で採った手法と、現在陸山に対して取っている態度との間には相似性があるだけで必然性はない……。

……作者と小説の登場人物の間には、執筆している間だけ紐帯が存在するだけであって、完成しまえばその紐帯はすっかり無くなってしまう。

編集部の皆様に連絡です。締め切りまで十日となりました。滞りなく運営を進めるために、編集会議を開こうと思います。日時は今度の日曜日の二十二時からにしよう

思いますが、いかがでしょうか。

三カ月に一度発刊される雑誌『Ji-twent』の締め切りが迫る中、編集長を担当する陸山は会合の場を設けようとしていた。もちろん、編集委員が決まってからというもの、定期的に会議は開いてはいたが、寄稿予定者の原稿の進捗状況や作業の準備状況を確認しなくてはならない。

原稿回収を担当する大瀬良からはすぐさま参加のリプライが送られてきた。続いて表紙やデザインを担当する雨野も参加してくれるという。最後に、原稿依頼や進捗状況の確認など、部員へのコンタクト全般を担当する流川からの参加の表明があった。

「では、これから編集会議を始めます。まず流川さん、寄稿予定者のリストに変更はないですか？」

「今のところは。たぶん、これからも変更はないかと」

他の部員に比べればやや低めの、落ち着いた声が聞こえて、続いてチャットに寄稿予定者のリストが映し出された。

「チャットにも貼ったけど、特集は小説が陸山さんと生駒さん、詩を出すのが浅村と私。自由投稿が雨野さんと聖澤さん、それから上総さんに椿さん、全員小説を寄稿してくれる予定。で、連載が大瀬良さんと榊さん。以上です」

「となると俺のメールアドレスは全員知っとるね。原稿回収は問題なく済みそうだし、訛りの利いた、大瀬良の声が聞えた。

「馴染みのメンツですね。悪く言えば、代わり映えがしない」

流川の一言をきっかけに苦笑が交わされて、それぞれが笑いを堪えたまま会話が進められた。

「波瀬君は結局ダメだったの？」

「大学はテストの時期だしね」

「近井さんや半田さんも忙しいみたいでした。大隈さんからも、連絡が来なかった」
雨野の高めの声が響く。

「海外に行ってるからね、あの人は。間もなく帰ってくるなんて話もしてたけど」

おおむね、これまでに重ねられた会議で確認されたことと変わりはない。誰かの原稿が滞っているという話もなく、このままいけば何事もなく締め切りを迎えられそうだ。

「で、新田さんとは連絡が取れたの？」

流川が言った。安堵の境地に差し掛かりかけていた陸山の心が、その一言でざわついた。

「毎号出してたし、いなくなるならいなくなるで断ってたのに、どうしたんでしょうね」

雨野も追隨する。もちろん、彼らが陸山を脅しつけるつもりでもって物を言っているわけではないのはわかっている。新田の消息は二人にも訊ねており、その後何の連絡もしないまま時間が過ぎたのだから、彼らにとっても少なからぬ気がかりではあったはずで、事後報告を求めてしかるべきだった。

「DMを送ってみたけれど、反応はありませんでした。スカイプでオンラインになったところも、誰も見ていないらしい」

部分的な回答をしていると、あたかも失踪の理由を知っているにもかかわらず、隠し立てをしているような気分になった。部員の間には波風を立てないためとはいえ、これ以上新田を守る必要があるのだろうか？　そもそも、隠し立てをするのは新田を守ることなのか？

「陸山さん、この二人には経緯を話しても良いんじゃないの」

陸山の胸中を推し量ったかのような大瀬良の一声が掛かった。やはり、この年長者も紗江の来訪が原因ではないかと疑っている。とはいえ、その口調があくまでも何らかのメリットを得るために二人に話すのであって、決して新田に疑いの目を向けるためではない、とでも言いたげな穏やかなものだったため、陸山は後押しを受けた気分になった。

「わかりました。ちょっと込み入った話になるんですが、まず、新田さんの幼馴染の

女性が、僕にコンタクトを取ってきたんです。彼女、紗江さんは、新田さんの小説「横を向いたまま」の主人公は、自分がモデルであるという。けれど、決してモデルに選択された事実そのものを恨んでいるわけではない。むしろ、小説の中で書かれた出来事に、新田さんも深くかかわったはずなのに、彼の影がそこにあることを、あたかも作者である自分には関わりのない世界であるかのように書いていることを、恨んでいる。なぜ恨んでいるのかは教えてくれませんが、おそらく、過去に何らかの因縁があって、その責任を新田さんが放棄しようとしている、と彼女は解釈しているのかもしれません。

新田さんが姿を見せないのは、おそらくこれと関連があるのではないかと思うんです。ちょうど紗江さんからコンタクトがあったのと、時期が被るから」

相槌を打ちながら聞いてくれている二人を相手にしながら、陸山は自分の語りが、初めて大瀬良に対して事情を話した時よりも明瞭になっていると気付いた。どこるか、足りない部分を補強しながら、降りかかった事どもを紗江の狂言ではなく、根の深い“事件”として取り扱っている。

あたかも物語の粗筋を喋るような自分の言葉に乗せられて、新田が姿を見せないのは、紗江の来訪と関連がある、という思いにつき過ぎなかった考えが確かな疑惑になったのを、陸山は感じ取った。

「その人から以降コンタクトはあったの？」

「一度ありました。だけど、詳しい事情はやはり聞けないままです」

「本当に恨んでいるなら新田さんが何をやったのか、ちゃんと教えてくれるんじゃないでしょうか？」

「いや、なにもかも伝えてしまったら、陸山さんが引いてしまうと思ってしまって出しにしているんですよ。策略家だな」

大瀬良の勘ぐるような言葉が聞えてきたが、あながち否定は出来なかった。

「けれど、新田さんの高校時代に彼女となにがあったのか、ほのめかすくらいには教えてもらいました。ある時、彼女が高校の男子に対して誘いを掛けている、という噂が立ったんだそうです。もちろん根も葉もない噂でした。そんななか新田さんから声を掛けられて、こんな噂があったが、本当なのか、と訊かれたんだそうです」

「じゃあ、あの小説も実話だったということか」

大瀬良に合わせて、雨野も、なるほど、と相槌を打った。流川だけが知らないことなので、その補足は大瀬良が担ってくれた。

「いやね、新田さんが入部当初、大学時代に書いた小説を見てくれということで、私と雨野さんが読んだんです。主人公が通う高校には、誰とでも寝る女の子がおった。その女の子が例のごとく主人公を毒牙に掛けようとしたんだけど、そんなのはまっ

びら御免だつて言うので断つたんだ。でも、友達にはなつた。誰とでも寝る女の子と、寝ない男の子、なんて取り合わせは好奇心を煽るからね……あれ、雨野さん、確か主人公に対して女の子を紹介する奴がいたんじゃないかな？」

「いましたね。ぼかしてはいるけれど、多分その女の子と寝たと思われる、主人公の友人が」

「じゃあ、それが新田さんなんか……」

これまで明らかにならなかつた小説のエピソードを聞かされた陸山は、紗江から教えられた事柄がやはり真実ではなかつたのか、と思ひ始めた。

「その流れで話を戻しますが、振り返ってみると、噂の中には彼女の出自、つまり売春をして生計を立てていた女の血筋を引いている、という事実を知っていなければ流し得ない話も含まれていた。だから、実は噂を流したのは新田さんではないか、と。念のために言っておきますが、これは彼女の推測です」

一度偶然を必然に仕立て上げておきながら、今度は偶然を強調しておく。矛盾した態度には陸山も氣付いていた。しかし、このままでは完全に新田が疑惑ありきで語られてしまうと懸念して、二の足を踏んでしまった。まだ、新田を信じている節は残っている。

「大瀬良さんと雨野さんが読んだ小説ってさ、友達になるだけで終わり？」

「まだ続きはあるよ。女の子が、他の男子と寝るんだ。それを主人公に逐一メールで知らせる。今からホテルに行くよ、っていう具合に。主人公はそれに対して冷淡な態度を取るんだけど、女の子から叱責されちゃうんだ。逃げてるだけじゃないか、って。でも、俺からしてみればイチャイチャしてるだけにしか思えないんだわ、それが。だからダメだって言ったのよ。書き慣れてるは書き慣れてるけど、まだ甘えがある。本当なら友達になっちゃったらダメなんだよ。微妙な距離感で、女の子と対峙すべきだってね」

「新田さんはなんて言ってた？」

「昔書いたものだから、とは言ってたかなあ」

「思いきり村上春樹や島田雅彦に影響を受けてしまっている、とも言ってた気がします」

「ああ、二人ともそういう小説は書く気がするね……それにしても、暗示的だな。誰でも寝る女の子に対して、寝ない男の子が、逃げてる、って言われちゃうのが。今の新田さんと、紗江さんじゃん」

「いやあ、しかしまだ向こうが狂言を使ってる可能性もある。というか、大学時代からつけまわされてたんじゃないの？ それを書いた小説かもしれない」

半ば冗談めいた口調で話してはいるが、大瀬良も新田を信じているらしい。会話を

傍で聞きながら、陸山は少し安心した。しかし、流川が、いや、と否定の言葉から始めて、

「ただね、これ新田さん本人には言ったことがあるんだけど、あの人の書く小説って、調和的な終わり方をするでしょ。「風が吹くたび春が来る」だったか。あれを読んだ時に、ちょっと願望が混じってると思った。主人公が別れた女の子と再会するんだけど、お互いに幸せに暮らしているのを見て、安心する、っていう終わり方をして、そんな簡単なものかな、と引っかけたんだ。誰とでも寝る女の子じゃないけど、過去に何かしらの出来事があって、そこから逃げるためにああいうラストを選んだんじゃないか、って思ったんだよ」

「それは人格と小説を混同してるよ」大瀬良が強い口調になった。「小説でそうだからって、幼馴染の女の人を取った態度がそうとは限らない」

「そこまで言いきるつもりはないんだけどさ、「横を向いたまま」って、調和的な終わり方じゃないじゃん。あの人の中では唯一と言っているほど。あの終わり方はどうなんだっていう意見はあったけれど、その前の雪が降り始めたところを見るシーンがあったよね。通夜の席を離れて、イトコと窓を見るシーン。あそこで終わっても良かったし、それで十分調和的だった。けれど、そうしなかったってことは、やっぱり何かしらの因縁があるんじゃないかな、モデルとの間に。それが妨げになって、調和的

にならなかつたんだと思うよ」

確かに、流川の言う通り「横を向いたまま」の幕切れは、部員の間でも議論になった。告別式に参列した後、紗江は恋人からメールを受け取る。それは逢引の誘いだつたが、葬式に出たからという理由で断りつつ、一週間後に二人は顔を合わせた。そこで二人は体を交えるが、互いにどこことなく違和感を覚えながらの営みで、事が終わって抱き合っても、紗江の背中には冷たい空気が撫でるばかりだった……スカイプでの通話と並行しながら、陸山はホームページに掲載されている合評会のログを見直していた。いわゆる本筋、大叔母の昔話りのエピソードに比べて、このラストは断絶が感じられるという意見が確認できる。

「あのラストはフィクションなんですかね？」

「わからないけれど、本人が必要だった、というのだから、何かしらの意味は持っていると思う」

雨野に対して陸山が答えた。まぎれもなく、新田自身が構想の段階でこのラストにしようと思った理由は、いったいなんなのだろうか。

「ううん」不意に大瀬良が唸ってみせた。「流川さんの言うこともわかるけれど、あの方がウチに出した小説はわずかだからね。即断は出来ないと思うよ」

「大瀬良さんが初めに言い出したんじゃない、誰とでも寝る女の子と対峙しきれてないって」

揚げ足を取るような言い方ではあるが、笑いながら言う流川自身には悪気はないだろう。しかし、

「いや、そういう意味で言ったんじゃない。対峙しきれてはいないけれど、小説と作者の性格にはつながりは、あるにしても薄いでしょう。少なくとも読み手は深入りしちゃいけないよ。そうした前提がないと、書けるもんも書けん」

一息に反論したところを見ると、いくらか誤解が生まれてしまっているらしい。「大体、新田さんと普段付き合ってみたらわかるでしょう。そんな大それたことを出来るような人じゃないって」

「それって、臆病とも取れる言い方だけど」流川の口調も、それにつられて挑発めいた響きを帯び始めた。

「だから違うと言ってるでしょうが。完全にあの人の性格を分かりきってるわけじゃないけれど、物事をすっぱりと割り切れるのがうかがえるでしょ。本当に紗江さんとの間に何かがあったとしたら、卑屈になると俺は思うね」

「無理して割り切っているっていう可能性もあるんじゃない……」

雨野がおそろおそろ声を出した。これも揚げ足を取っていると思われかねない。

「まあ、快活だよな。ウチのメンツに比べれば。ただ、私はやっぱりウチに来るだけの理由はあったと思うな。ある種の後ろ暗さを抱えつつ文芸活動やってるってところがあるじゃん。その中に混じってこれまでやってこれたってことは、シンパシーは感じてると思うんだよね」

「まるで新田さんが虚勢を張ってるみたいない方だね」

「別にそんなことは言っていないって」

一見、大瀬良が強い口調で理に合わないことを述べ立てているようにも見えるが、その言い分も理解は出来た。文学に片足を突っ込んでいる身としては認めたくない事だが、昨今の出版業界は不振で、文壇も活況であるとは言いがたい。そんななか新田がTwitterのプロフィールで、日本の文学を祈るように読みたい、と公言していることは、無邪気としか思えない。普段の彼の言葉を聞いていても、業界の事情を頭に入しながら、そこで自分がどう振舞っていくべきか、ということとは考慮に入れていないように思える。ただただ、自分の文学観を貫いていけばいいと思っっている節がある。

その裏には、これまでの人生がおおむね上手く行っていたのだから、これからも上手く行くだろうという帰納的な見通しがあるのではないか……とはいえず、それも推測にすぎない。本人がいない中であれこれと言ってみても、各々の印象を語っているだけでまさしくフィクションを展開しているようなものだ。それは事態が進展しない事

を意味する。虚実が入り混じった、無限の推論のドツポに嵌りこんでしまうことを意味する。

「落ち着いてください。本筋からズレ始めていますから。大体、今は新田さんの個人攻撃をしている場合じゃないでしょう。どうしたら新田さんと連絡を取れるか、方法を講じるのが先です」

陸山がそう言うと、ああ、そうだったね、と大瀬良が言って、ひとまず場は落ち着き、流川や雨野もそれに続いて詫びの言葉を述べた。結局のところ、全ては新田が事情を明かしてくれること、つまり真正銘のノンフィクションを陳述してくれることにかかっている。

それにしても、ある程度パーソナルな部分を捨象してもコミュニケーションが成り立つはずのネットで交流しているのに、一度疑惑が降りかかれば本人が逐一パーソナルな部分でもって誤解を訂正しない限り信頼を取り戻すことが出来ないというのは、撞着していかないだろうか、と陸山の頭に疑問が掠めた。

「だけど、話を吹っかけてきた陸山さんが場を収めるって言うのは、なんだか釈然としないなあ」

大瀬良の口調にはなるたけ冗談めいた色を伝えようとしているのがうかがえたので、こちらにも、どうということ、と苦笑しながら返すことが出来た。

「いやね、まるで陸山さんが紗江さんの役割をしているみたいだな、と今思ったんだよ。たぶん、陸山さんは少なからず紗江さんに揺さぶりを掛けられた。で、我々も陸山さんによってちょっとした諍いが起きるまでになった。その中には陸山さんがおらず、遠くで見守って、肝心な時にまあまあ、と言いながらおいしいどこ取りをする。これはちょっと、紗江さんに揺さぶられた時の心境を我々に体験してもらいたかったがための演出じゃないかと思ってしまった」

「それは言いすぎじゃないの？」

「ちょっと意地悪な見方が過ぎるような……」

あくまで苦笑で会話が進んでいるため、大瀬良自身も本気では話していないだろう。しかし、陸山には少なからず心当たりがあった。大瀬良の誘いに乗って事情を話したとはいえ、あたかも新田の方に問題があるような話し方をしたのは事実だった。極力言葉には気を付けたとはいえ、どこかで新田に対する不信任感を共有して、それが自分だけのものでないと安心したかった気持ちは、なかっただろうか。

「ともかく、いざとなったらまた相談してください。あんまり自分で抱え込むようなことはしないで。そういや、新田さんと電話番号を交換しとったっけな。掛けてみま
すよ」

そう言うと、大瀬良からの音声が遮断された。大瀬良からの報告を待ったために沈黙

が続き、空気が擦れる音が流れた。あたかも電話の応答を待つ様子を追体験させられているようだった。

「ダメでした。留守電だ。まあ、遅いから出ないのかもしれないな。後日改めて掛けてみますよ」

気付けば二十三時を回ろうとしている。『Li-tweet』のための会合だったが、これでは新田のための会合だ。

「よろしくお願いします。もし通じたら、僕が会って話したい事があると言っていた、と伝えておいてください」

「指名手配しているみたいだね」

流川が言うと、一同は軽く笑った

「話題を戻しましょう。今は『Li-tweet』のための会合です」

締め切りを迎えても、新田と連絡は取れなかった。大瀬良が電話をしようとしても、依然として留守電、ないしは電源を切っている際に流れるアナウンスが流れるのみだという。番号の使用が停止されている旨のアナウンスが流れないからには携帯は引き続き使われているわけで、命に別条はないとは思う、と大瀬良は言っていたが、何らかのトラブルに巻き込まれている可能性は依然として否定できない。ここまで来ると、

単なる私生活の滞りでは説明できなくなる。

『Li+tweet』に寄せられた原稿の校正期間が過ぎていく中、打ち合わせのために編集部、あるいはその他の部員が集まるたびに、新田の話題は上がり続けた。とはいえ、誰かがうってつけの解決策を持ち出せるというわけでもなく、指をくわえて不在を眺めつつける状態が続いた。

それでも滞りなく Twitter 文芸部は活動し続けている。新田がいなくなったところで、何かが変わるわけでもない。ただ原稿を寄せてくれる部員が一人いなくなっただけで、引き続き文学に関する話は出来るし、あるいは私生活でのフラストレーションを発散するための世間話を交わすことも出来る。『Li+tweet』の誌面の色調も特別の変化を見せるわけでもない。そうして一人の部員が居なくなった分の穴はいつしか補填されて、もつとも必ずしも埋められるわけではないから忘れた頃に誰かが継ぎ接ぎのほつれに気付き、あの人はどうしたのだろうか、と話題に上るはもの、大方どこかで元気にやっているのだろう、と皆が自分を納得させるような曖昧な結論を出し一切は済むことになるかもしれない。そうして、継ぎ接ぎが継ぎ接ぎでなくなり、穴が穴でなくなるかもしれない。

こんばんは、雑誌の発刊作業、お疲れ様です。お忙しいでしょうか？ もしお手すき

でしたら、また文学のことで話しませんか？

そんな頃、紗江がスカイプのチャットに現れた。

（次号に続く）

合同教会の人びと3

南あおいのスキーの技術はそれほど下手ではなかった。呑みこみが早いのもかもしれない。リフトも二回目以降はそれほどミスはなくスムーズに乗り降りできた。柔らかな新雪に朝の陽射しが当たると心も晴れ晴れとしてきた。静間はスキーも悪くないなと思いついて返していた。ただ年齢からか時折、穴にハマると身体がしたたかに打ち付けられてしまえばらくは起き上がれなかった。若い頃と違って転び方がひどい。それに比較するとあおいはめったに転ばなかったが時々は頭から突っ込んで行く派手な転び方をした。静間が手を掴んで起こしてやるとあおいから笑顔がこぼれた。陽射しに映えて美しかった。色白なんだと静間は思う。美人の条件として色が白ということがあるのだろうか。と初めて感じた。それは一緒に来たためぐみや比較するのもおかしいかもしれないが溜奈もまたそうであった。彼女たちは顔色がいいとは言えなかった。何度目かのおおいを抱き起している時、あおいの顔が静間のウェアの胸のあたりをすべっていた。それから胸に耳を押し当てた。静間は唾を呑みこむ。

「あれあれ、何か聞こえますよ。携帯の着信音みたい」

「会社からだろうね。レストランで掛け直すよ」

まったく会社から年がら年じゅう監視されているようなものだ。と静間は苛立った。おおかたはユーザーからのクレームだ。どんな簡単な事でも受付の女は静間に転送する。

まるで逸らされたものを取り戻すように静間はあおいに尋ねた。

「あおいちゃんて？ やっぱり彼とかいるのかな」

「え？」首をひどく斜めに傾けてあおいは困惑の表情を浮かべる。

「気になるんですか？」

「多少は、ね」

「木島さんが私に訊いたらセクハラですよね？」

「俺もセクハラになるのかなあ」

「さあ、どうでしょうかね。あ、あたし、彼がいても他人には言わないですよ。言っ
て何になりますか。そうでしょうか？」

言われてみればそうだった。そういった自分の態度自体がオヤジ臭いものだった。
「だって……」言葉はそこで途切れた。聞き取れなかったのかもしれないし声がフェー
ドアウトしていったのかもしれない。次の瞬間、あおいはちよっとためらうようにし
て携帯電話を取り出した。「ちよっと待ってね。メールが来てる」

静間はグレンデの途中で立ち竦んでいては他の客に迷惑なので先に行くことにし

た。この頃増え始めたボードがひっきりなしに滑って行くからだだった。

「第二リフトまで先に行ってるよ」

「あ、そうですか。すみません、ね」あおいの表情が硬くなって大人びて見えた。

それから十数分後、あおいはやってきた。依然として木島やめぐみたちと逢うことはなかった。彼らは何処をすべっているのだろう。

「さっきのメール、うっとおしいやつからでしたよ」あおいは苦笑しながら言った。そう言われても静間は困る。少し若い世代になるとやっばり違う。自分の主観が客観だと思いつ込んでいるのだ。もちろん親しい間柄で共感が予測できるならまだしも知り合ったばかりでそれはないだろうと静間は感じていた。だからその言葉には反応のしようがなかった。

「ああ、着信の確認、忘れてた。まあ昼休みでもいいかな」静間は切り口を変える。「あ、新しいですね、その携帯！ いいなあ」

そう言われるとまんざらでもないがゼロ円の携帯にすぎない。やがて普及して珍しくもなんでもなくなるものなのだろうが、たまたま手に入れた赤色は入手困難だとショップの店員も言っていた。

「ちょっと触れさせてもらってもいいですか？」いいとも悪いとも言う間もなく静間

の手から小さなすべすべとしたあおいの手に携帯は渡っていた。

「あら。この着信の番号って見覚えあるなあ」

それからあおいは自分の携帯を取り出して静間のそれと見比べる。

「え、同じだよ。この番号、掛けてる時間も。侑じゃないの!」

「侑? って誰だ? あ、さっき車内で掛けてきた人か。高橋って」あおいは先ほどは聴き漏らしていたようだった。

「え、なんで侑が静間さんに電話してるの? あの、英会話の事務員ですよ。知りませんか?」

「ああ、彼か。思い出した。いつやらクリスマスのパーティーに来てくださいっていきなり言ってきた学生だよ。知りあいな?」

「そりゃ、同じ教会ですから。合同教会ですから、知ってますよ、もちろん」

「ああ、そうだったよね」静間は自分の教会に対する関心のなさには自分でも呆れた。「掛けなくてもいいんじゃないかと思えますよ」

静間が考えていた。高橋君は自分の意志ではなく瑠奈に示唆されて静間を誘っているのではないだろうか。それならば今後の英会話では気まずいことになりはしないかと。

「もうスキーに来ていると告げてますから。クリスマスパーティーには間に合わない

時間帯ですから。そういうものがあるのは知っていたのですが、私は欠席すると母にはことづけしておきましたからね。侑だって知ってたはずです。もちろん母も教会で食事や飾り付けの手伝いをしているわけだから母に訊けばいいわけなんですよ。直接じゃなくても。もう携帯の番号やメールアドレス変えようかな」

静間は侑に電話を掛けた。さすがに止めはしなかったものの、あおいは訝しげな表情を見せた。その顔はこのお人よしが何もわざわざ関わり合いにならなくともと語っているようだった。

「ああ、何度も電話いただいたみたいで申し訳ない。スキー場にいましてね」

「あ、僕のこと覚えてくれていたんですね。で、今日のパーティはどうなんですか？出席できそうですか。瑠奈先生や教会の人たちと朝から大変なんですよ。それから僕のブログ読んでいただけましたでしょうか？」

「いや、ああ、それからだね。パーティはとでもじゃないけど行けそうにはないんだよ」

「そんなあ」落胆のため息が漏れる。そうはいつでも静間が行かないくらいはたいしたことはないだろう。

「それにしても君はやけに僕にこだわってくるじゃないか。僕はキリスト教には関心はないんだよ。それはまったく言ってもいいくらいだ。この際、はっきり言ってお

くけど宗教の押し付けはよくないぜ。その点はマネージャーの春子さんやあおいちゃんと同意見だね、やみくもに信者を増やしてどうするんだい？」

「いえ、僕はカルトではないですし、そんなつもりはないですよ。ただクリスマスを楽しく過ごせたらいいなって思うだけで」

「悪いけどとてもじゃないけどそうは思えないんだよな。それとも僕がクリスマスをひとりで過ごしているのは可哀そうだともいうのかね！」

「まあ瑠奈先生はそんなことを言っていましたけど」

「まったく！ そんなことだから独身〇〇のマネージャーにも嫌われるんじゃないのかね？」そうは言いながらも静間は内心は言い過ぎていると思わなくてもなかった。ひよっとしたら彼は涙ぐんでいるかもしれない。いや電波状態がよくないのか雑音に混じって鼻をすするような音が聞こえてくる。

「言いすぎかなあ？ 替わる？」

「え、あたしがですか？ そりゃまずいでしょ。侑にはあたしと静間さんが一緒にスキーに来ているなんて言っていないのよ」

「あ、でももう遅い。聞こえちゃった」

それは地獄の底からこだましてくるような低く響く声だった。

「なんで、南さんと静間さんと一緒にスキーに行ってるんですかあ」激しく昂奮して

いた。

なぜ、なんだ。独り言が何度も繰り返された。

「そんなに不思議なことないのよ。侑。あたしたちは瑠奈先生と同じクラスなのよ」
「だって年齢的にぜんぜん違うでしょう！ 僕は、混乱、いや錯乱しました。こんなことを瑠奈先生にどうやって説明すればいいのでしょうか！」

「おい、キミ勘違いするなよ。ふたりだけじゃない。君は知らないかもしれないが木島という男や他に女性ふたりも同伴しているんだ。キミの思うような関係じゃない。変なふうに思うんじゃないよ」

「そうよ！ 瑠奈の旦那が強引に誘ってきたんだからね！ まあ教会に行くよりはましだから来てるんだけどさ。木島なんてあたしたちのことほったらかしよ」

「瑠奈先生の旦那ってあのひと結婚してたのですか」

「そうよ。もう別れたみたいだけど。あんたそんなことも知らなかったの？」

「知らないですよ。南さん今まで言わなかったし」

「そんなことあたしは言わない。瑠奈先生から聞いていたかと思っただけよ」

「そういうことか……」

「それでさ、あんたこのスキーの話を瑠奈先生に報告するつもりなの？ 彼女きつとショックを受けるわよ。あんたに八つ当たりするかもしれないよ、ね」

「僕はただ、スキーに行ってる人たちみんなに合同教会の良さをわかってほしいだけです」

「あたしは毎週行ってたじゃないの」

「じゃあ、なんで来なくなっただんですか？」

「日曜の度ごとに集まって悩める人や迷える人たちのお世話をするのに疲れたの。旅行だって行けないじゃないの。あんたは学生だからいいけど会社勤めしてたら忙しくて日曜のたびごとに行ってられないわよ」いつの間にか静間の手を離れて携帯はあおいの手の中にある。

「ああ、まるで聖書の中のあの…」

「やめてよ。知ってるから。さんざん言われてるから」

あおいは携帯を固く握りしめて語り口調は熱かった。

「それにあそこにいる人たちとは肌が合わないのよね。漁師かホストが多いでしょ。バンドやってるフリーターや葬儀屋とか。あたし普通の会社の人がいいの」

「言いますねえ。ひどい発言だ！」

「現状を見なさいよ。漁師が魚が取れなくなっただからってホストやりますか？」

「まあ、なぜかそういう人が多いですよね。あそこには」

「とにかくね、あたしたちには関わりたくないでくれる？ 静間さんも迷惑なのよ」

「いや、南さんとはもかく、静間さんの道までも塞いではいけないと思いますよ。静間さんに替わってください！」

「で、どうなの？ 瑠奈先生には報告するの？」

「します」

「どうして？」

「頼まれたからです！」

「あ、そう、じゃあ勝手にしたら」そうしてあおいは静間に替わった。

「あ、静間さん、僕のブログだけでも読んでもらえますか。合同教会の歴史について書きました。ほとんど静間さんのために書いたようなものです。みんなから批判されていて歴史の歪曲がひどいとか、教会のなかにもちょっと詳しい人もいるんです。瑠奈先生とか南さんだけで教会を判断しないでください。教会にこないインターネットでしか参加していない人も多数存在してるんですよ。その人たちに僕は発信していたのですが、信頼を失ってしまいました。瑠奈先生のライブ動画がたぶん悪評の根源だったと思いますけど僕のブログが炎上してしまってます……」

「人のせいにするなよ」あおいが言った。

「いいよ。わかったよ。ブログは読むよ」こいつらは知らないな。俺だってキリスト教の幼稚園に通っていたんだ。聖書や讃美歌くらいは少しは知っている。内心そう思

った。

ようやく五人が集まったのは昼も過ぎた午後一時半でピアノのあるロジジの食堂から徐々に人がいなくなっていく、そんなころだった。昼前に携帯で連絡を取り合ったのだったが昼は食堂が混み合うという理由から時間をずらしたのだった。その結果、木島を除く四人は疲れ切ってしまう歩みものろろとしていた。耳たぶは冷え切っていた。雲行きはやや怪しくなってきた。みぞれ交じりの冷たい風が吹き始めていた。

木島は上機嫌でコーラをがぶ飲みしながらライスカレーと地元名物のそばを食べていた。

「今日は満足したなあ。ひさしぶりに滑ったという気分だ」

彼は毎週のようにスキー場に訪れているはずであったが、ふだんはそれほど滑らないのであろうか。

「雪質が良かったな。天気が良いすぎると雪が融けはじめてしまうからね」

四人はうなずいたものの、語る元気はなかった。どうやら木島はひとりで、静間はおおいと、めぐみはあきなどずっといたらしかった。モーグルコースは足腰の負担が大きいために木島以外は避けていたから木島と出会うことはなかったのだ。

「もう普通のコースじゃ面白くないんだよね。南さんは満足できたかな？」

「ええ、まあそれなりに」あおいは上司の前では大人しい。

「ずっと静間と一緒だったの？」

「ええ、あたし静間さんと……」話しはじめて静間はドキリとした。英会話の事は黙っておいたほうがいいんじゃないかと思った。すると何か電流でも通じたようにあおいはびたりと口を噤んだ。ちらりとあおいは静間の顔色を窺ったのだらう。

「昼からはあたしもモーグルコースにチャレンジしてみる！」急にめぐみが言い始めた。

「だからあきなちゃんはそっちに合流してね。静間さんと南さんの方に！」

「ええ？ そんな。迷惑じゃないかしら」

「いえいえ、そんなことはないですよ！」静間とあおいは声を揃えていた。

「私は滑れないですよ。ほとんど」

「あたしだって滑れないですよ」

とにかく連れてきた割には初心者者の面倒は見たくないというのが木島の本音で、そのために初心者に毛が生えたくらいの静間を連れてきたのは彼女たちの面倒をみさせるためだったのだ。だから午前中あきなにつきあったためぐみが昼からはあきなから離れるというのはけっこう自然な流れなのだが、誰もが自然でないものも感じていた。

いや、あきなはそれほどでもなかったかもしれない。屈託がないというのは若さの特権なのかもしれない。

(連載第三回)

暴力論（第一回目）

蜜江田初朗

これは連載企画である。暴力に関する、様々な論述をしていく。基本的には、理論としては哲学、政治哲学、社会学の方面から、そして扱う内容としては政治、経済、現代社会、戦争—平和学、国際社会、ジェンダー等々一箇所に留まらない領域を扱うつもりである。

第一回目は、〈紛争〉総論として、争いに関する哲学的な考察を展開する。

第一章 〈紛争〉総論

□争い

不和、緊張、対立、戦争、そういった諸々のことをひとまとめに争いと呼ぶことにして——争いは〈他〉と〈他〉が互いに存在するから生じる（生起する）のであるか？もしこの四千年あまりの世界史の歴史を運動としての戦争と和平の繰り返しと捉え

るならば、そこには「諸存在ノ自身ノ命運ヲ賭ケタ地平」とでも言うべきものが見出される。争い、なるほどそれは避けられないものに違いない。争いは我々人間——いや、生命存在——にとって本質的な事柄である。争いは我々の心をおびやかす、沸き立たせる、若しくは戦慄へと走らせる。しかしその一方で一部の賢明な者達はいつも争いからの離脱を希求し、思考してもいた。

□性的差異

人間同士の不和——もちろんそれらの諸原因には質的に区分すべき諸々のカテゴリーといったものがあるだろう。しかしここでは例を限定して考える。男女間の対立といったものには、一般的な処方などほとんど存在しないといつていいし、それらの争いは不毛である、などとよく言われる。

さて、男女間の生理学的——生物学的差異は、いくらラディカル・フェミニズムの議論（例えばジュディス・バトラーの過激なジェンダー論）があるといえ、やはり無視することはできない。そしてその生理学的——生物学的性差（肩幅の違い、筋肉の質、生殖機能……）に基づいて各々に文化的役割——機能が付与ないし堆積される。性差は何よりも機能として在るといふことだ。そして性の目的（機能）は何かと問えば、一義的には生殖活動による人類社会活動の連続性である。

おそらく人類存続の産出原因が生殖活動以外に見出されない限り、程度や形態の違いはあれ性別の違いに基づく存在の対立構造（男—女がいて子ができる）は無くならないであろう。

□ 抑圧とは同一化の要求である

私がここで突きつめたいのは、男女間の俗的でつまらない——だからこそ重要？——争いの根本的原因である。しかし、性差の存在目的は生殖活動を通じた人類の存続にあるから、それ以外の事柄はどうでもよいとか仕方がないとか言うのではあまりに粗末であろう。

もう一度、今までの議論を引き継ぎつつ、フェミニズムの功績を参照する。フェミニズムの活動が賢明にも発見したのは、人類の歴史において男が女を抑圧、封じ込めてきたということだった。人類の歴史の担い手——主体は男性であり、女性は閉鎖的な家庭で家事という名の無償労働を強いられるか、あるいはそれすらマシな方でもすれば家庭外——社会の闇へ投げ出されるか——。そこでは女性は抑圧される。抑圧とは排除か？ そうではない、それは見せかけだけの排除にすぎない。抑圧とは、排除しつつ、それを内包しもするという、二重の形態の縛りである。

もう少しこの点、抑圧の具体的なプロセスを見てみよう。排除しつつ、内包する、というこのプロセスは、支配者の被支配者への同一化の要求／への従属である。男たちは言う、「我ニ従エ！」。そこで女性の主体性という主体性は削除され、抹殺され、消去される。そして女性は男の従属者としての悲しき存在——（主体存在）とは比べものにならないくらい悲惨な——を付与されてしまう。ところで男（性）は女（性）をどうやってその内包に持ち込むのだろうか。

そこに登場するのが、私が社会Ⅱ世間Ⅱ常識と呼ぶ媒介項、メディアウムである。男は女を支配するにあたり、まず社会Ⅱ世間Ⅱ常識を男性の論理で埋め尽くしてしまう。実は男女の争いが起こっているとき男が本当に相手しているのは女ではなくて、この社会Ⅱ世間Ⅱ常識なのである（だから多くの男性は女性と真の意味で向き合っておらず、自己の論理で埋め尽くされたつまらないナルシズムに浸っているだけなのである！）。男（性）の論理——男は仕事女は家、子供の事は全てヨメ、オットの方がエライ……——によって埋め尽くされたメディアウムとしての社会Ⅱ世間Ⅱ常識は反射してその一般性を男性諸存在と女性諸存在に対して観念や行動様式として送り込む。このことで、男性は、ああやはり私たちは正しかったのだと開き直り、女性は私たちが仕方ないのねと諦観する。男性が女性を再—支配する。そうして永遠に支配は続く

というわけだ。

もしメデイウムがなければ存在としての男と女は当然のことながら平等である（差異の尊重！）。メデイウムが存在しなければ。しかし男は巧みにメデイウムを我がものとし、そして世界全体を自己とその家臣とで埋め尽くしてしまうわけだ。

おそらく、男が女を支配する、支配しようとするのには、欲望の運動が関わっている。互いに〈他〉なるものであるからこそ、その自己にとっての〈他〉を〈同〉に変えてしまいたいという暴力的な欲望が——。ともかく、互いに（質的に）異なる存在としての男と女は、前者が社会Ⅱ世間Ⅱ常識というメデイウムを巧みに利用することで、後者を抑圧—支配する。

□ “明るき” 中立性の立場

このような抑圧のプロセス—構造は、“暗き” 中立性の立場と私が呼ぶものの動きと極めて近接している。“暗き” 中立性の立場とは、例えばBとCが口論している時に、Aが聞き手役として乗っかる際「俺／私はどちらにも最初からは味方しないよ」という立場である。簡単にいえば裁判所の立場・ポジションである。

裁判所のごとき“暗き” 中立性の立場は、一般性をかなり志向する中立性である。かかる中立性は、具体的解決としばしば衝突する。というのは、先程の事例で、Bと

Cは本当にいつでもAのような聞き方を望んでいるのであるうか？　つまり、「どちらにも味方することのない」意見など欲するであろうか？　この点が問題である。

“暗き”中立性は、争いの両当事者間の衡平というよりも公平、つまりバランスのとれた解決を目指すであろう。問題はここからである。

世界各国の民事・刑事・憲法それぞれの諸領域での判決文をよくよく眺めると分かることだが、判決文にはよく「社会通念に照らして考慮すると……」（強調筆者）、「社会のおよそ常識といったものに鑑みると……」（同）という、マジック・ワード magic word が散見される。つまり、裁判所は、事件の判断にあたって、その論理構成においてあの社会Ⅱ世界Ⅱ常識というメディアウムを参照することがままあるのである！　これこそは男性が女性を支配する際に用いたメディアウムの悪しき活用である。

つまり“暗き”中立性とは社会Ⅱ世間Ⅱ常識を参照する、という特権的な立場だったのである。このことの権力性もしくは権力形態に気が付かなければならない。「俺／私はどちらの味方もしないよ」と言うAは、その実、社会Ⅱ世間Ⅱ常識を時として味方につけていたのだ。

これに対して、“明るき”中立性の立場といったものがある。それはおそらく、自己の中心というものを建設的に捉えている、あるいはその過程のさ中にある。先程の

口論していたBとCは、明らかに「自分の主張を親身に聞いてもらいたい」と思っている。もちろん、「自分の言っていることが社会的に判断して良くないのかどうか」という点もとても大切であろう。しかし裁判所のみが争いの解決人ではない。BもCも、まず自分の話を分かってくれる人を本当は探したいのだ……。さすれば、たとえこのBとCによる争いが不毛なまま仲互いに終わったとしても、BもCも孤独は免れる。そう、あらゆる争いにおいて孤独を免れることは強調しても強調し過ぎることがないほど大切である。不毛な争いというのは、孤独を生産しすぎる争いのことを言うのだ。

“明るき”中立性の立場は、自己の内容・内実・実質をある程度自律化させたまま、〈他〉へと向かう／と付き合う。

そのとき、彼／彼女は社会Ⅱ世間Ⅱ常識というメデイウムを使うことはないであろう。そして例えばある〈他〉が「くはどう思う？」という漠然とした難しいことを聞いてきたとしたら、自己の内容を主軸に、自己の内実に忠実に耳を傾けてその聞こえてきた声を返すであろう。それこそが、そしてそれのみが本当の「真摯な対応・態度」と呼ばれるものである。

“明るき”中立性の立場にはもう一つのポイントがある。それは、〈他〉を否定し

ないということである。私が思うに、中途半端な全否定は（テキトーなダメ発言、真意のない誹謗中傷）は良きものを一つももたらさない。〈他〉の他性を、自己の内実とは違ふと知って、そしてその上でその差異をただ単純に楽しむ——享樂するのである！ なぜ差異が愉しき対象に成るのか？ それはおそらく、自己の内容——実質がある程度形成されてはじめて、諸々の〈他〉の他性といったものを理解することができようになるからのである。そして自己とは違ふ存在へと生成した〈他〉を、尊重すること、敬意を払うこと——、これである。ドゥルーズのいう差異の肯定という思想は、このことなのではなからうか。

“明るき”中立性の立場は、自己の内実を集中して形成することによって〈他〉と関わり、そこではじめて自己とは違ふ〈他〉の他性の存在生成に感動するのである。さて、この“明るき”中立性の立場から、果たして残酷な争いの発生の余地など読み取れるだろうか。

□ガンジীরの非暴力

全ての人がガンジীরのようになれば、我々がガンジীরを本気で敬愛しまた実践もすれば、あるいは争いはこの世界から消えるのかもしれない。しかし、二〇〇〇年代に入ってアメリカと日本の政治領域に「決断主義」の旋風が巻き起こりそれがなくな

らない現在、たとえば決断主義は、「沈黙すること（決定するかどうかを保留にしておくこと）」を「決定に従わないこと」と全く違うものにすり替え、そして決断しないものをどんだん置き去りにするどころかむしろ事後的に勝手に巻き込むのだった。ガンジーの非暴力でさえも、そうした危険性に落ち込む。非暴力、それは諦めて我々に従属することにもなるぞ、それでもいいのだな、それでは臣下となりたまへ……。なんと、長ったらしく荒んだモノログであることか。しかし非暴力の概念はたしかにこの決断主義の圧倒的速さにくまく対抗できないのである。スイスの永世中立性とまた違うものとしての、日本国憲法第9条の〈真意〉。世界はいまや二〇一〇年代に入って、再び動乱の時期を迎えはじめている。

それでも私たちはガンジーのことを、非暴力の夢を、一瞬たりとも忘れるべきでない。ガンジーの非暴力はインドという場所の第二次世界大戦期間という時間においてその結晶をみた。私たちは彼の魂を受け継ぎつつ、うまく変容させ展開させていかねばならない。

□ 結論

結局、争いの根本にあるものは、一、互いに異なる存在がいること、そして二、どちらかがもう一方に対して同一化を要求し抑圧することからくるのである。その時、

大きな処方箋となるのは、社会Ⅱ世間Ⅱ常識というメデイウムを使うのではなく、非暴力の精神を受け継ぎながら、自己の内実の声に忠実に耳を傾けて、〈他〉との差異を肯定できるかどうかなのだ。我々の争い、そして私たちの肯定！（了）

瞳子

常磐 誠

連載第一回 私達の今

一

私の父親は私の曾祖父から見ても初孫だった。全盲という障害を生まれつき持っていたが大層愛されたと言はう。

その父とタツチの差で遅れて生まれ、初孫になり損ねた父親の従兄弟がいる。障害はなく、実に頭が良い。けど初孫じゃなかったから愛されなかった。……なんてことになればそれはそれでドラマチックかも知れないが、実際曾祖父は分け隔てなく全ての孫を愛していた。

そんな父親と従兄弟はタツチの差で曾孫にあたる私達を産んだ。曾祖父は大層面白い、また喜んだそうだった。結果が逆転した事も、また面白い。曾祖父が言いそくな事だと私は思う。

離れた場所で竹刀の打ち合う音、気合いの入った子ども達の叫び声が遠く聞こえてくる。

やあーっ！

メエーン！——ピシャンッ！

ダンッ、と踏み込まれる床板の音。遠いけれど聞こえてくる音が、やかましいように感じられるようでいて、それでも不快だと思わない。

その部屋でピアノを弾くことに、特別の障害であると思う事はない。

私は曾祖父の初曾孫になり損ねた。

だから曾祖父に愛されなかった。何て事は無い。実際曾祖父は出来る限り平等に曾孫に接しようとしていたと思うから。

結構な頻度——大抵週一とか二とか——でパソコンの無料通話をかけてきていた曾祖父が、流石に小学校の高学年になった頃の私にはうざったらしく思い始めていた訳だし、平等に接しようとしていたことは間違いないと思った。東京に住む私と、九州の曾祖父。この距離を埋める為に使われるパソコンの通話は、実に便利ではあった。もう、話ができなくなってしまうって七年が経ってしまったけれど。

別に後悔はない。——私には。

私が出来る事は、したつもりだ。最期の最期に、雰囲気呑まれて、というのも多分にあるけど、泣いてあげることだって、少しはしたし、さよならの瞬間が近づくその時にも、話をした。もう、十分だと。その時の私からすればもう十分な量、曾祖父とはやり取りができたのだ。後悔は、ない。……私には。

「……………」

九分刈りの猫毛。立派で整った太い眉。大きな瞳を潤ませ、泣くもんか、泣くもんか。そんな言葉が震える唇からこぼれ出そうになりながら、曾祖父の棺を握りしめていたあいつは。

タッチの差で初曾孫になったあいつは、どうだっただろう。

曾祖父と近い場所において、一番言葉も、直接の触れ合いも多かったあいつには、後悔はなかっただろうか。

別段親しい訳でも、多く言葉を交わす訳でもない親戚でしかないはずなのに。そんなことを考えながら、私はピアノを弾いていて、丁度弾き終わる頃、また私は目の前

のピアノに意識が傾いていく。譜面を見る必要も最早無く。容易く、容易く弾き終える。

パチパチパチ。

母が、拍手する。黒髪で、いつも落ち着くから、とか言っていて着物を着ているような、少し浮いた人。童顔、幼児体型。

「いっつもお母さんは若く見られるんですから！」

と無い胸を張る、色々と残念な母親だ。

「……………」

ピアノの蓋を閉めて、私は母に向き直す。赤みがかった髪を持つ私が結構羨ましいと思う、母の髪を見る。

「袖眞の髪はいつも綺麗ですね。お義母さんの髪と似ていて、お母さんいつも羨ましく思っています。ピアノも上手だし……………」

ピアノの置いてある部屋の隅には、母の着物のなおされている箆笥が置かれている。その整理をしながら、母は私にそんなことを言う。お互いに青い芝生でも見ているんだろうか。そんな風には思えない。何故なら幼い頃の私が、

『お母さんみたいな黒髪が良い！ 私の髪を黒く染めてよ』

と駄々をこねて泣き、両親を困らせたその日から、母は決まって私が母の髪を見た

時に今のセリフを言うのだ。

もう私も高校生、染めたければ自分で染められる。実に馬鹿馬鹿しいものだと思う。ピアノについてもそうだ。

『じゃあなんで、私はコンクールで賞が取れなくなったのかしら？』

口は開けても音は出さない。手と、指を使って私はそう母に聞いた。母の顔に、愛想笑いの皺が見える。嘘がヘタクソで、私は本当にこの顔が嫌いだ。

「それは、周りの皆が上手だから……」

『じゃあさ、中学ん時まで私が取ってた賞は何？ ライバルは結構同じ顔なんだけど』

「そういうのは……きっと時の運だし……」

『もうさ。言ったらいいじゃん。袖眞は下手になっただってさ』

手と手がぶつかり合う時の音は意図しなくとも激しくなる。

「お、お母さんピアノのコンクールのことはもう難しくてわからないから……」

『あーでたでた。そうやっていつも逃げるんだ。もうさ。いい加減にしてくれないかな。そうやってピアノのことをわからないくせに褒めちぎったり、髪のこといつまでも言ってくるの。何。自慢なの？ ねえ！』

「ごめんなさい。やっぱりこの前のことも気にして……」

『うるさい！』

という言葉を言葉に表す事もできないまま、ピアノの蓋を小突く。小突いたつもりで、結構な音がする。それだけで母は体を震わせ、娘の私にびくびくしてしまう。

背丈の小さな母だ。小学生の時に追い越してしまった。今や二十センチ近く私の方が大きくなってしまったのだ。力に訴えれば、すぐに黙るしか無い母を見て、私は何故か落胆する。

『ごめん』

軽く手話で言う。謝る私も、何で謝っているのかわからない。

「いいえ。いいんですよ。お母さんも、いっつも袖眞のことを傷つけてしまうから……」

軽く泣きそうになっている母の顔を、直視出来ない。わからないくせ、イライラする。

「ダメだよ。袖眞」

背中越しに聞こえてくる、父の声。

「袖眞、どうして謝っているのかわからないまま謝ったって、しょうがないんじゃないかな」

穏やかな物腰で、そして刺し貫くような視線と声。目が見えないはずの父は、一瞬の内に私の腰掛ける椅子の眼前で膝をつき、私に手を差し出した。

「柚真。お前が謝ってたのはお母さんの言葉から察しがつくよ。でも、お母さんに何を謝るんだい。言っでごらんよ」

この父親の様子からすると、きっと気配を消して部屋の側で聞き耳をたてていたのだろうとわかった。私の言葉は手話で、目の見えない父親には私が何を言ったのかはわからなかっただろうが、母の狼狽する言葉だけで、きっと十分だっただろう。

きっと、娘は母を追いつめ詰ったのだと結論づけただろう。……それは、間違っていないが。

けれども、癪だとも思う。私が謝る理由を見付けられないのを、きっと父は悟っていて、それであえて今の質問を私にぶつけている。

そんな型通りの謝罪に、何の意味がある？

その問いに、私は見事答えられることなく、沈黙する以外にないのだ。

「コンクールから、全く変わらない」

父が話してくる。普段閉じられた双眸が開かれていて、その眼差しが私に刺さる。一気に、苦しくなる。全てを見透かすような瞳(め)、鋭く尖り、私の内側を穿つような、隠し事も秘め事も、何もかもを露にする眼が、怖い。眼を背ける。

「今、多分だけど、僕の眼から視線を逸らしたね」

その多分、が外れた事は一度も無い。

「いいかい袖眞。お前は腕前、技の部分では抜きん出ている。だがいつの間にか自分を律する事ができなくなっているんだ。勝手にする、暴れ回る自分の中の自分を、律する事もできないまま、音楽を奏でている。その未熟さが、こっち側にまで伝わってくるようだったよ……」

『……………ッ！』

父親の手をカ一杯に握る。目の見えない父親に私が言葉を伝える為に覚えさせられた指数字。耳は聞こえても、言葉を話す事だけができない、構音障害の私が、ようやく父に思いを伝えられるようになったその手段を用いて、言えた言葉なんて、『ピアノのことも！ 音楽のことも！ 何も知らないくせに言う事だけは一人前か！ 素人のくせに！ ふざけるなド素人が！』

振り返るだけでみっともなく死にたくなる。しかもだ。

「これは先生にも確認を取って、その上で言っている言葉だよ。先生も、同じ意見だ
ってさ」

というおまけ付き。私の師からのお墨付きまでもらえるような見解を父は持っていて、流石にどっぺりとくる。うんざりした心地で、私はピアノを弾いていた。

コンクール用の気が利いた楽曲なんかではない。猫踏んじゃった、だ。それも、が

っちゃんがっちゃんと打ち付けるように、乱暴に。反抗期のガキかと我ながら思って、弾き終わった後に、自分一人で勝手に笑っていて、さぞ滑稽だ。ここに鏡がなくて良かった。もしもあつたら、本当に死にたくなくなっていることだろう。

一頻り笑い終わって、本当に馬鹿馬鹿しくなっている。だから私はまたピアノの蓋を閉じる。その時に、

「今日も荒れてたね。姉貴」

三つ年下の弟、貫太が話しかけてきた。剣に全く興味を示さなかった私とは違い、貫太は幼稚園に通いだす頃から一生懸命に剣の道を歩んでいる。

『何の用？ 別にアンタと話すような要件こっちにはないんだけど』

視線と手話で冷たくあしらう。

「んだよ。別に姉弟なんだからさ。用がなくっても話しかけて良いだろ？ つか、用はこっちあんだけどさ。姉貴には何の連絡も行ってないの？」

しかめっ面をしながらも、貫太は私に話しかけてくる。携帯電話を差し出しながら。何の要件だ、そう怪訝に思いながらめんどくさい、という感情を露骨に示しつつ携帯電話を見ると、それは最近中高生に流行っている無料通話やグループでの会話ができるアプリの会話の画面で、

琥太坊(こたぼう)「今年もバッチリ全国決めたよ！ 来週にはまたケビンと一緒に

来るからよっろしっくね〜♪」

と楽しいなメッセージを送りつけている例の初曾孫の文章だった。おまけにニコニコマークのスタンプまでつけてきやがって。ガキか。

読み終わった私は携帯を貫太に押し付けるようにして返したため息をこれまた露骨についた。

「やったね。俺またこの時期が来るの楽しみにしてたんだよね〜。今日早速その準備とかしてたんだけどさ。まあそっちは大変だからちよっと嫌だったんだけど」

兄貴が増えるような感覚があるのだろう。普段こんなに饒舌になることのない貫太が、この時期になると本当にテンション高く喋り続ける。それがまたウザい。

「姉貴も何だかんだ言って、楽しみだろ？ 琥太さん達が来るの！ いっつも来る前は嫌っそんな顔してるけどさ。来たらいっつも楽しそうだもんない！」

『やかましい』

という言葉と同時に脛に一発蹴りを入れる。

「うわっ！ 痛ってえ！ 弁慶の泣き所とか最低なクソ姉貴だな。俺間違った事何一つ言ってるねーのにな！」

『私は生憎手が使えないんだ』

そう手話で言いながら今度は股間を狙う。

「怖え！ 姉貴クソ怖ええ！」

走って貫太は逃げていく。窓の外は日暮れ。赤く染まった空が見える。

かあ。かあ。かあ。カラスが飛んでいく。

そう言えば汗ばむ季節にもなったか。そうだ。また、この家が暑苦しく、男臭くなる時期がやってきた。この時期が、やってきた。

二

別に泣いたっていいんじゃないの？ という貫太の声が頭に染み付くこともある。そうして、その染みが生み出す音と一緒にピアノと向き合えば、大抵何かが狂いだす。それがわかっていても、不思議とその染み付いた響きが心の中に不協和音を作り出し、そしてそれに左右されずにピアノを弾く事が、どうやら私にはできないようだった。「困った、なあ……」

という師匠(せんせい)の声を聞いて、私も困る訳だ。指導者が困ってどうするっていうんですか。

「柚真、君は譜面にもっと集中するべきだ」

そんな単純な指摘を受け、私は返事をしながらも、

『そんなこと、わかってる』

というそんな思いを、手話や文字盤——五十音に濁点、半濁点、アルファベットが備えられている意思表示用の板だ——を使わなければ人に伝えられない私は、師匠（せんせい）に伝えないうまま、頷いている。

私は譜面をあまり演奏しながら見ていない事が多い。何せ何度か弾いてしまえば音は頭に残り、それらが私に教えるのだ。次はここだ、こういう風に運指して、そんな風に弾いていけばミスは一切無い。

「ミスが無いのは君の一つの魅力だ。でもね、ミスが無いだけならロボットのほうがより良いんだよ。君の演奏は……」

そういう風に続く言葉に私は手話で斬って返す。

『ロボットのなり損ね、ですか？』

その手話を見て、師匠（せんせい）は、

「……いや、それなら、まだ良かったと思うよ」

とだけ言って、黙ってしまった。黙ったまま、次の指示がない。

『じゃあ次、私はどうすれば良いですか？』

と、指示を仰ぐ。

「……………。いや、もう止めだ」

師匠（せんせい）が、重たく口を開いた。重たい口、ではない。かつてドイツを始め、

世界各国でコンサートを成功させ、指導者としても優れた人。そんな人を父や曾祖父が見つけて口説き、私の師匠(せんせい)になってくれた師匠(せんせい)が、匙を投げた瞬間だった。

『……………』

私も、これには流石に絶句せざるを得なかった。

「君は、あれからちっとも変わらないんだ。自分の出す音に振り回され、何もコントロールできていない。君は譜面を正確に、ロボットのように弾いているのかも知れないが、実際はロボットにもなれていないし、まともな大人にもなっちゃいない。そして子どものような楽しさだって微塵も持っていないんだ。何の為に君はピアノを弾いているんだ。君はピアノを弾く事が楽しいのか？」

一気に、堰を切ったように溢れ出す師匠(せんせい)の言葉を聞きながら、私は、

『……………』

何も言葉が出てこなかった。

正確じゃない？ 私は演奏に際してミスなどしていないはずだ。譜面に描かれた情報を読み損ねや弾き損じ等、ない。

感情がダメなのか？ 楽しい？ どういう意味だろう。私はピアノが楽しいと思っただ事はない。一度もない。

本当に子どものように、楽しそうにピアノを弾く大人のプロを、私は知っているが、私から見れば、何が楽しいのだろう、どうして楽しいのだろうと疑問に思えてならない。

要するにバカみたいに思えてくるのだ。そういう風にピアノを弾く事が偉いのか？ そんな風にピアノを弾くから素晴らしいのか？ そんな表層的事柄しか見れないものなのか？ そういう疑問が私の中にはいつだってあって、そして今の師匠(せんせい)の言葉は、

「うん、そうだよ」

という肯定にも等しかった。言葉が出ないということは、つまりは落胆だ。私はそんなコトに対する師匠(せんせい)の肯定と、私に対して並べようとしているハードルに対して、落胆した。

「……しばらく君はピアノから離れるべきかも、知れないと思ったんだよ。お父様にもそうお話ししている。けど、もし戻れるのなら、君がちゃんと演奏出来る状態になれそうならば、また私も戻ってくるよ」

せんせい、と呼んでも師匠(ししょう)として敬え。父の教えだ。師と敬っているはずの人が目の前で述べた言葉は、一種の敗北宣言とも取れて、一層私の落胆は深まっていた。

師匠(せんせい)が家を出て行って、母がそれを見送った。父は門下生の指導をしてきたからそこに同席する事はできなかった。

「……………」

母は何も私に言わなかった。言えなかった、なのかも知れない。昨日の今日で、言えばまた私から責められると思ったかもしれない。思わせている私は、何も言わないでいて、それでなお私と目が合った時に微笑もうとする母のその姿に、またイライラを募らせていた。流石に、自分勝手だ。そう思ったが、だからどうしろというのか。ため息だけ小さく吐いた私は、ピアノの部屋、ピアノに触れる事も出来ずにただ、ここにごろんと横になることしか出来なかった。ピアノに触れる、ということすらも、今の私には許されないような気がして、許されないっていうのがどういことなのか、それは全くわからないままで。

「姉貴！ 風邪引くぜ姉貴！」

という貫太の声に起こされるまで、眠りこけてしまっているばかりだ。

琥太の方はといえば、私から見れば順風満帆、という言葉がこれ以上似合う人間はいない。ムカつく程に、だ。

公式の大会においては負け知らず、という奇跡的な成績を残している。いや、全戦

全勝、という都合のいい話では流石に無い。

でも、琥太が負けるのは決まって、練習試合だったり、団体戦でチームの勝利が確定している時だったり、後は精々琥太が負けても残りのメンバーが勝ってしまったというようなそれ程重要な場面ではない時だけの話で、琥太はいざ、という時には百パーセント白星を手にするという相撲人生を歩んでいる。

テレビであいつが特集された時、当然その無敗伝説は取り沙汰され、インタビュアーから質問された。それに対して、

「稽古をするだけ。本当にそれだけなんですよ」

とにこにこした笑顔で愛想良く答えるあいつの顔を見て、私はチャンネルを速攻で変えてやった。貫太が、

「何すんだよ！俺見てたのにさ」

と言うのも無視してテレビのリモコンを放り投げ、私はピアノの部屋に向かっていった。行ってやることは決まっています、乱暴な気持ちで乱暴に音楽を奏でるのだ。

ハードな楽曲を選べば、そういう気持ちに乗せてもそれらしく聴こえるのだから便利だ。だから、そういうのに甘えている、ということも私はわかっている。わかっていて、やっている。世話が無い。

そもそも、ピアノ今私禁じられてんだっけ。そうだったけね。もう知らないわ。知

らねえ。ああ。どいつもこいつも！

こういう時、家族も、父の門下生も、誰一人顔を出さないし、部屋には近づかない。そりゃそうだ。どいつもこいつも！ なのだから。

どいつもこいつも私をイライラさせるばかりで。

こうやってピアノにあたるくらいしか、私はストレスを解消する手段を知らないし。がっちゃんがあつちゃんズジャンズジャンと鳴り響くピアノの旋律が、私の心を慰めるどころか、余計にかき立てる。もっと叫べ。もっと奏でろ。打ちつけろ。

どこからもそんな明示されて指示は飛んでこない。これは私の脳が。頭の中が勝手に叫んでるだけの夢想。思い込み。

でも、私はまるで私以外の何かに導かれるようにして、そしてその誘いに乗っかるだけ乗っかって、のめり込む。のめり込んで、私は消えていく。いや、溶けていく。音の中に、私は溶けていくんだ。

——連載第二回『追想劇』へ続く

記 録

【2014/04/06】

・ 四月定例会

内容：①夏号の編集部決定

②合評の日程決定

③春号の最終確認

【2014/04/26】

第一回春号合評会

ホスト：日居

対象作品：ふかまち「夏の、流れる」(詩)

新嶋樹(イコ)「透明」(詩)

る「かなしみ」(他3篇)(詩)

ういろいろ「実存主義の新たな形式」(評)

【2014/05/03】

五月定例会

内容：①夏号の原稿受付

②夏号原稿回収の方法の説明

【2014/05/04】

第二回春号合評会

ホスト：ふかまち

対象作品：緑川「藍よりも青く」(小)

常磐「あたしの世界」(小)

彩「SNOW DANCE」(小)

【2014/05/18】

第三回春号合評会

ホスト：小野寺

対象作品：Pさん「集積回廊1」(エ)

うさぎ「流言飛語」(エ)

小野寺「ソメイヨシノ」(小)

【2014/05/24】

第四回春号合評会

ホスト：Pさん

対象作品：日居「古井由吉と「家ならざるもの」」(評)

彩「知的遊技場」(工)
安部「暗い部屋」(小)

【2014/06/01】

・新入部員、アキさん。

【2014/06/15】

六月定例会

内容：①夏号の校正割り振り

②原稿回収方法の再確認

【2014/06/23】

芥川龍之介読書会第一回

対象作品：「鼻」(事前読書)

「蜜柑」(朗読)

【2014/06/30】

芥川龍之介読書会第二回

対象作品：「羅生門」(事前読書)

「舞踏会」(朗読)

編集後記

置き捨ててしまった小さな背中：編集後記

聡明であるがゆえに周りから一步引いて物事を見ることができ、その姿が傍目から見れば浮遊しているようにも見えるから、近寄りがたさを感じて爪はじきにするつもりもないのに独りにさせて、本人は本人でさみしさを覚えるような性質ではないので結局別の道を歩んでしまう少年の話が、妙に頭から離れない。造形の手つきからしてヘッセあたりかと思当をつけているのだが、ともあれ少年は周りから外れて独りで自然を愛でる日々を送る。ところが、何かの拍子に自然からも外れて、小川のせせらぎに誘い寄せられ、そこに浮かぶ小舟に乗りこんでしまい、二度と帰って来ることはなかった。暗い夜の出来事だったはずだ。夏のことなら堂が道案内を務めてくれて、あるいは日本のことならホトトギスが船頭を務めてくれる、と興味が添えられそうな気もするが、頭には、ひたすら暗い視界の中どこへ行くとも知らされず、かといって震えるでもなく、周りから外れた時のように結局行き着いた先でも落ち着く事はないのだらうから、たとえ鬼が出ようと蛇が出ようと通り抜けるのみ、今更怖がることもないだらうと一切を受け入れるかのごとく前を見据えている少年の背中だけが残っている。

以来、人間は何かの拍子に自らの少年時代を置き捨ててしまふ生き物ではないか、という観念が根付いてしまった。もしかしたら漠然とした想念が寓話めいた話によって呼び覚まされたのかもしれない。とはいえ、元の話が載っている書籍に行き当たりもできず、自らの来し方を振り返ってもピンと来るものがない、と来た日にはもっともらしく書いたところで説得感は出ない。むしろピンと来るのは自らには縁のないはずの、あるいは他人が話してくれたわけでもない、ひょんなことから頭に訪れた妄想にも等しい断片的なイメージと来たものだ。

たとえば迷子になって闇雲に走り散らした揚句、いっそのまま果てまで向かってしまった方がつまらない果てが待っている人生を送るよりもいいのではないかと振り切りかけた矢先に、見覚えのない川瀬に行き着いてしまって、左右を見渡しても橋がないから行き場がなくて坐りこんでしまった少年。

普段兄が占有してる自転車を羨ましがって、ある日こっそりと鍵を奪い自らの所有にし、あちこちを走り回った末に兄にも出来なかった芸当をやったのければこれは自分にこそ相応しい代物だと証明出来るのではないかと、坂道をブレーキも利かさず全速力で駆けて転倒してしまい頭から血を流す少年。

放課後の夕暮れが差し込む教室に居残って、課題があるわけでもなし、とはいえ家に帰るのも物憂い、ただただ黄金色に輝く時間の中に身を浸して、この瞬間を知っているのは自分だけだと感じることでおしろこの瞬間を永遠には出来ないかと模索する少女の黄昏た姿を、ドアから盗み見ている少女。

少年少女をモチーフにする時は、そんな縁もゆかりもない断片的なイメージにこだわり続けて、文章を書いてきた。向こうからすればそんなこだわりは余計なお世話であり、あるいは大人からすれば固執したところで懐古主義、あるいはセンチメンタリズムとの誇りを受けるだけだろう、と咎められかねないところだ。そもそもそんな少年や少女が本当にいるのかどうかもわからない。元の体から切り離されて、置き捨てられてしまったかのごとく、あちこちに浮遊している姿だけが浮かび上がってくるだけの話である。ただ、どうにもそうした一人きりでいる姿を見ると、申し訳なさが先立ってしまう。憐憫、とするのが相応しいか。

誰かを頼りにするどころか、自分さえも蔑ろにしまって、目の前に続く道を真っ直ぐに見詰めている背中だけが見えている。このままでは破滅に近い結末が待ちうけているが、導きになるだけの体力はとうに失ってしまっているから、追い越して前に立つことは出来ない。ただただ、責任を負うことも出来ない背中だけが見えている。

どうせ先導も出来ないのならば、せめてその背中を押させてくれるよう頼んでみるか、果てまで向かう力が衰えないよう手助けだけでもできないものか、思索している隙に足元にも及ばないところまで走ってしまっている。

さしづめ、彼ら彼女らが、元の体から引き離されて自分さえも置き捨ててしまう瞬間を捉えることしか、小説家には出来ないのではないか、という諦めさえも思い浮かんでくる。あるいは、彼ら彼女らが、果てまで行き着いた末に力を失い坐りつくしているところへ、何の事情も知らないくせに、自分にもおぼろげながら思い当たる節はあるから放っておけない、という具合の自分勝手な憐みによって手を差し伸べることしか、小説家には出来ないのではないか。ともあれ今のところは、さみしさを覚えなのまま走り続けた彼ら彼女らが、やがてさみしさを知ってしまった時に隣にいるのは悪い事ではないだろう、というくらいの心持で小説を書いている。

暮れなずむ道をたったひとり、リヤカーのうしろにのせられてひかれて行く子供の姿が見える。昼間の引越しは機銃掃射をおそれて避けたのだろうか、それにしてもこんな時刻に、なぜひとりきり先へやられたのか、どう言い聞かされてきたのか、覚えはない。梶棒を取る見知らぬ男の背が物も言わず、地下足袋の脚をひたひたと運ぶにつれて、道は暗くなる。子供も物を言わない。何を考えていたのか。これで安穩な

ところへ越せると思っていたのか。何処へ行くのか、知っていたのだろうか。

西の在所の農家に身を寄せてほどなく、ある夜、城下町が全体に炎上するのを、畑の間から眺めた。赤く焼けた空へ、白熱した火炎がつきからつきに押しあがる。吸いこまれるように眺める人の顔も赤く照っていた。また家をなくして美濃の奥の母親の実家によく落着くことになり、長かった梅雨が急に明けて猛暑に変わり、広島に特殊爆弾が落とされてたった一発で街が壊滅したと伝えられ、まもなく敗戦となった。それから子供ながら心身が弱りはてて、炎天の午後を過ごすのも苦しく、夕方の涼風が立つと年寄りのように息をついていた。その体感の後年まで、夏の盛りにはいまだに過ぎ去らずに思い出された。しかし、暗い道をリヤカーにのせられて運ばれて行った子供の姿を見送ったのが、最後であったような、そんな哀しみをときおり覚える。

(中略)

いずれまた出会うことになるだろう、とその頃から、暮れ時にリヤカーにひかれて行った子のことを、今では暗い土をひたひたと踏む足の気配しか伝わって来ないが、振り返るようになった。とにかく無事だった子供の身にいつまでこだわっているのか、何の悔いのあることか、と訝りながら年を取ってきたけれど、この年になれば、ひとりきりになって行った子を、それこそいつまでも、放っておけるものではない、というような気もしてきた。記憶はいよいよ声や音を消されて、いたずらに鮮明なように

なつて遠ざかるそのかわりに、静かな夜明けの、ふつと耳について静まりをさらに深める木の葉の、一葉ずつのさやぎの内から、これを限りの切迫が兆しかけるように、聞こえることがある。それが天地に満ちて、身の内にも満ちきる時、そばに子供がいるか。

黙って手を引いてやらなくてはならない。手を引いて、そこから先はもう一本道になり、その涯までつれて行く。

古井由吉「子供の行方」『蝸の声』

夏号の誌面がこうした私の気分を反映しているかはわからない。そもそも個人の単なる思い込みを元にして、こんな原稿を書いてほしい、などというのは押しつけもいい所であつて、そんなことをしては書けるものも書けなくなつてしまふ。とはいへ、原稿を寄せてくれた部員たちが、執筆をしている間にふと置き捨てられた少年少女たちのことを思つていくれたら、あるいは、部員の原稿を読んだ人が一人きりでいる少年少女たちのことを思い起こしてくれたら、きつと彼ら彼女らは一人でありながら一人ではないことになり、これから心おきなく駆けていけるのではないか、そんな漠とした考えを一通りの編集を終えた今では抱いている。

。

夏号編集長：日居月諸

Li-tweet 夏号

発行日

平成二十六年七月七日

編集長

日居月諸

編集委員

崎本智（6）、る、蜜江田、小野寺

発行者

twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

<https://twitter.com/twibun>

ホームページ

<http://twibun.jindo.com/>

表紙デザイン
まとめPDF作成

本誌はホームページに掲載している「Li-tweet 四月号」をプリント用、電子書籍端末用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。

© twitter bungeibu 2013

Twitter 文芸部